
タダシイ冒険の仕方 短編

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダシイ冒険の仕方 短編

【Nコード】

N9296Q

【作者名】

イグコ

【あらすじ】

「タダシイ冒険の仕方」シリーズの短編集になります。本編では触れる機会の少ない卵達の学園生活を中心に更新中。

太陽が町を暖めようという目覚めの時間と共に、少女の部屋は騒がしさを覆われる。

狂ったように太鼓を叩き続ける猿の人形。シンバルを割れんばかりに叩く犬のぬいぐるみ。笛を吹き鳴らし、手を叩く縞猫もいる。たつぷりと時間を取っても、それらが止められる気配は無い。

「うああああああ！！」

隣の部屋からそれらを聞いていたミカルは切れそうな血管を押さえつつ、妹の部屋に突入した。

「うるせえ！うるせえ！うるせえ！」

罵声を浴びせながら騒音をまき散らしている人形たちを蹴り、手に触れたものは片っ端から壁に投げつけていく。大抵の物はそれで止まるが、床に転がった後も主人を起こそうと楽器を振り続けるものも多い。

「何なんだよお！」

気味の悪い呪文が中から聞こえてくる木彫りの熊を蹴ると、足の方がダメージを受けてミカルは涙目になりながら床に転がった。

部屋の中心に配置された天蓋付きのベッドに目を向けると、すやすやと眠る妹イルヴァの姿がある。絵本に出てくる眠り姫のような美貌、艶やかな髪に薔薇色の唇。そんな彼女の胸ぐらを掴むと、

「起きろおおお！」

ミカルは何度もイルヴァの頬を叩いた。叩き続けてミカルの手が赤くなつて来た時にようやく、

「んあ……おはようございますっ……」

イルヴァがゆっくりと目を覚ます。ミカルの手はじんじんと熱を持って痛むというのに、イルヴァの頬は綺麗なままだ。毎回のことから不思議でならない。のそのそとベッドから這い出ようとするイルヴァの肩を、ミカルが掴む。

「何度も何度も言わせんなよおお！俺はお前より一時間遅く起きた
いんだよお！」

「イルヴァはこの時間に起きたいんですう」

けるりと言う妹の頬を、かつとなったミカルは思わず叩いた。ぺち
ん！という景気の良い音の後、一瞬の間を起き、

「……暴力は良くないですよ？」

イルヴァが表情を変えずにミカルを持ち上げる。

「ぎゃあああ！」

ゆうゆうと天井近くまで体を持ち上げられ、ミカルは悲鳴をあげた。
「そーれっ」

扉から投げ出され、冷たい廊下に体を打ち付けられる。背中を強く
打ってしまい声も出ない。一瞬の静寂のあと、堪えきれない嗚咽が
喉を突き破る。

「……う、ううう……うおゝんっうわああ！！」

今日もミカルの号泣する声が、フリユクベリ家に響き渡った。

フリユクベリ家の長女イルヴァが家族の誰よりも早く起きるのには
理由があった。毎日の衣装選びに時間がかかるためだ。夜準備する
のは、翌朝になって気が変わることがあるのでしない。

ベッドの脇にある扉の奥、クローゼットになっている一室に入ると
色とりどりの衣装に小物が彼女を迎えてくれる。全て丁寧にハンガ
ーに掛けられ、靴、ハットといった小物もきちんと棚に並ぶ。これ
らを前にあれこれ頭を悩ませるのが彼女の至福の時だ。あれこれ手
にしては戻す作業を繰り返した後、イルヴァは呟いた。

「今日はこれで行きましょう」

やたらと古めかしいベルベットの服に袖を通すと身が引き締まる。
まるで変装した相手に成り切ったような高揚感。すっ、と深呼吸す
ると羽根つき帽を手にして部屋を出る。廊下に出ると朝食の匂いが
する。イルヴァは足取り軽く、一階へと向かった。

「今日は何の格好なの？イルヴァ」

母親が山盛りのトーストを差し出しながら聞いてきた。

「500年前の剣士の服ですう。三銃士の1人ですよ」

イルヴァの答えに母親はにこにこ「いいわねー」と言った。父親が新聞を顔から下ろす。

「それはいいんだが……、朝ちよつと静かにしてやってくれないか？ミカルは試験を控えてるから……」

父は不機嫌顔でトーストを口に運んでいるミカルを指差した。イルヴァは公務員試験を控えているという兄の顔を見る。同じ親から産まれたというのにどうしてこつも違ふのだらう。イルヴァから見ればつまらない人生を送る兄ミカル。外見は似ていなくもないが何の特徴もない髪型といい、覇気のない顔といい気が合うとは到底思えないミカルを、イルヴァはあまり好きではなかった。

「考えておきますう」

娘の返事をほつとした顔で聞く父。昨日は勤め先で同僚の、反抗期の娘の話を聞いてきたばかりだ。邪険にされなくてよかった。心の中でそつと胸を撫で下ろす。

「ルートヴィヒの格好だね、イルヴァ」

イルヴァは声を掛けてきた弟の方を見た。何故かトーストをナイフとフォークで切り分けながら口に運ぶのは、10歳だというのに家族の中で一番物知りのアルヴィド。美しいがどこか無機質な顔がイルヴァによく似ている。

「よくわかりましたねー」

イルヴァが言うアルヴィドの隣りに座る妹ベアトリスが頷いている。

「胸の十字架と、あとそんな羽根つき帽で洒落ていたのは三銃士の中でもルートヴィヒだけですわ」

双子だからかベアトリスはアルヴィドにそっくりだ。黒髪をカール

させたロングヘアはイルヴァに似ている。ようするにイルヴァ、アルヴィド、ベアトリスはよく似ているのだ。外見だけでなく纏う雰囲気も同じものだった。話しも合う。和やかに会話する様子だが、人形のように固まったままの顔。そんな三人を見て少し不気味だ、と父とミカルは溜息をついた。

イルヴァの家は学園から遠い。そのため勤務先が同じ方向の父が、個人用の馬車を出して一緒に通うのだ。父と時間がずれる日は歩いて通うが、この行き帰りの時間が父と娘の会話をする時間でもあった。ぱかぱかという馬のリズムミカルな足音の中、

「暖かくなってきたな」

隣りで手綱を握る父が呟いた。

「お腹が空いちやいますね」

娘の返事にそれはどういう意味なのか間を置いて考える。

「それは暑い時期から涼しい季節に移る時に、食欲が出てくるから言う台詞だろう？それにイルヴァはトーストを山盛り食べたばかりだ」

いちいち細かく突っ込む父は兄のミカルに似ている。いや、ミカルが父に似たのだが。しかしイルヴァは父親は不器用ながらも自分を理解しようとする様子が窺えるので好きだった。案の定、父は言い過ぎた自分に気まずそうに顎を撫でながら、新たな会話を探す。

「学園は楽しいかい？」

父に聞かれ、イルヴァは深く頷く。父は安心したようにほっと息をついた。この通り変わり者の娘だ。集団の中に入れば浮いてしまうのではないかと心配したが、そうでもないらしい。現に毎日楽しそうな様子ではあった。危険を負うことが仕事である冒険者を目指す我が子を、父は心配ながらも誇りに思った。

「おい」

校門を少し入ったところで、聞き覚えのある声にイルヴァは振り返った。学園の門の前でエルフの青年が仁王立ちしている。

「アルフレート、おはようございます。今日も偉そうですね」

アルフレートはそう言われてもふんぞり返ったままだ。「当然だろ」とでも言うように。

「これ運んでくれないか。私には重すぎる」

アルフレートが指し示す先を見ると地面に置かれた袋があった。

「何です？これ」

「本だよ。次に何処へ向かうかの資料になればいいと思ってな」

「いいですね。じゃあ運んであげます」

ひよい、と袋を持ち上げる。なんだ大したことないじゃないか、と思っただが、ひよろりとしたエルフの青年には重いのもかもしれない。

「なんだ、その格好は」

アルフレートが冷ややかにイルヴァの服装を見た。

「昔の剣士の服ですよ。三銃士って知らないですか？」

「私も産まれる前の話じゃないか……いいか、服装っていうものはな」

アルフレートはミーティングルームに向かう間、イルヴァに「服飾の歴史」をぺらぺらと聞かせる。いかに時代に見合った服を着ることが重要か、という嫌みも含まれていたが、イルヴァにはどうでもよかった。それにすぐにアルフレート自身が好きな服装、というずれたの話題に移り変わっていく。

アルフレートはいつもイルヴァの格好を咎めるが、すぐに自分の話したい話しになっていくのだ。それはうっとおしくもあり、面白かった。イルヴァは「コスプレをする女」というよりイルヴァ本人を見てくれる、この青年が好きだった。

ミーティングルームに本を置くと珍しくアルフレートからの礼を貰

い、イルヴァは機嫌良くファイタークラスの校舎に向かう。学園の西側に位置する建物は全六学年のファイタークラスがひとまとめにされている。クラスの特性からして男の子ばかりだ。イルヴァはそれは少し寂しいことだと思っていた。友達が出来にくいというより見た目が寂しいからだ。すでに選択授業しかないのだが、何となく戦士の皆は一度教室に顔を出す。同士の顔を見る為でもある。

「おっす」

ぼん、と肩を叩かれ振り向くと笑顔で手を挙げる銀髪的美男子が立っている。

「おはようございます、ヘクターさん」

ヘクターは同じファイタークラスでも所属が違う。これは人数が多いために3つに分けられているからで、各クラスで優劣があったりするわけではない。ークラスは40〜41人。同じクラスでも全員と仲良いわけではない彼女にとつて、他のクラスの人間はかなり遠い人だった。そのため話すようになったのは最近だ。

「今日も面白い格好だね」

「今日は昔の剣士なんです。ルートヴィヒって人ですよ」

「へえ、すごいね」

あまり興味が無い言い方だが、軽蔑の目は決して向けないヘクターをイルヴァは好きだった。知り合う前は物静かでどこか憂いを含んだヘクターを「いけ好かない奴」と認識していたのだが、話してみると嫌味のない柔らかな物腰といい、嫌いになる要素を探す方が難しかった。嫌いな部分が無いのだから良い人なのだ。だから好きになる。イルヴァの考え方は単純であり明解なのだ。

「今日はアルフレートが色んな本を持ってきてくれましたよ。次に何処に行くか、決めるらしいです。ミーティングルームに置いておきました」

「じゃあ用事済ませたらすぐ行くよ。……イルヴァは？」

「イルヴァはすぐに行きます。リジアに早く会いたいです」

ヘクターは顔を綻ばせる。こういう態度もイルヴァは好きだった。

「じゃあ後で」

軽く手を振り去っていくヘクターを、イルヴァはいつもと変わらない顔で眺めていた。

「まーたそんな格好して」

ミーティングルームに向かう途中、さらさらとした金髪に綺麗な顔をした人物に出くわす。司祭のローブがよく似合う。

「大体その格好なら腰に細剣じゃない？背中にウォーハンマーってどうなのよ」

「そんな格好、っていうわりにアドバイスくれるんですね、ローザさん」

イルヴァが答えるとローザは胸を張る。

「当たり前じゃない。中途半端は嫌なのよ、あたし」

「ローザさんに言われたくないですっ」

「何よそれ！あたしが中途半端な存在みたいな言い方しちゃって！」

イルヴァはぷりぷりと怒る、この変わった個性的な友達が好きだ。

イルヴァを咎めながらも心配するような気配りを見せるローザは、

イルヴァの学園生活に欠かせない人だった。楽しませてくれる存在

でもあり、守ってあげるべき人なのだ。

「ローザさん、今日のおやつ何です？」

「朝からおやつの話し？」

そんないつもの会話をしつつ廊下を歩く。二人揃ってミーティングルームの扉を開くと、机に腰掛ける可愛い姿があった。

「んもう！フロロっ机に座るなって何回言えばわかるのよ！」

ローザから注意を受けたフロロは猫のようなフワフワの耳をピコピ

コと動かすと、ふわりと床に飛び降りた。

「朝っぱらからうるさいな」

フロロはクリーム色の尻尾をふわりと揺らすと総レースの一人掛けソファに腰を下ろす。

「おはようございます、フロロ」

「おはよ、イルヴァ」

そう答えると懷からガラクタのような金属片を取り出し、いじくり始めた。フロロはあまりイルヴァの服装に注意を払ったことがない。それはそれで気が楽な相手だったし、何より見た目がかわいいこの異種族の友達がイルヴァは好きだった。

「おはよー」

小柄な少女が部屋に入ってきた。薄い金髪を器用に結び上げ、くりくりとした瞳がかわいらしい。魔術師らしい姿だがローブの色は珍しい空色だ。

「おはようございます、リジア。どうですか、今日の衣装は」

「ん？ああ、いいじゃん。いつもより大人しめだし。わたしもローブと靴、新調したんだー」

「あ、かわいいじゃないですか」

リジアの靴はクリーム色のブーツだ。リボンが付いていてかわいらしい。彼女の外見によく合っている。唯一、女の子らしい会話ができるこの子のことをイルヴァは好きだった。何より少女の「ソーサリーは黒いローブっていうのが嫌いな」という主張が素晴らしいと思っていた。

「お、全員集まってるな」

アルフレートが教師のような口ぶりでヘクターと共に入ってきた。

「ちょっとお！アルフレート、なんで持ってきて来た本、バンダレン地方の本ばっかなのよ！」

「私が行きたいからだ」

「何が行きたいからだ、よ！これじゃ決定って言われてるのと同じじゃない！」

リジアとアルフレートが言い合っている。バンダレンは音楽の都。リジアも嫌なわけではないが、勝手に決められたのが嫌なのかもしれない。

「あたしはフロー神の一番大きな教会があるところがいいわあ」

ローザの言葉にフロロが首を振った。

「それってあの『アヴァロン』らしいぜ」
えっという顔のローザ。

「呪われた島か、面白そうじゃん」

「ヘクター、本気で言ってるの？」

ローザが呆れたように返す。

「兄ちゃんの故郷は？あんたサントリナ生まれだろ？」

「よく知ってるなあ」

フロロの言葉にヘクターは目を丸くする。フロロはふふん、と鼻を鳴らす。

「俺は何でも知ってるのさ」

何だかっこいい台詞だ。イルヴァはこういう時、あまり口を出さない。よく分からないから、といってしまえばそうだが、リジア達の会話を聞いている方が面白いからだ。色々な人物の変装を楽しむ彼女は、色々な人物の観察も好きだった。

イルヴァが最も気が休まる瞬間は、このメンバーといる時間だ。言いたいことが言えて、言いたいように言われる。何より自分の存在が浮かないこの場合は、何より貴重なものだった。一番の理由は、イルヴァがこのメンバーのことが好きだからかも知れないが。

「お腹空きません？」

イルヴァが言うと、皆の動きがぴたりと止まる。

「……またそういうこと言い出してー」

リジアが呆れたように返してくるが、目線はお菓子が仕舞われた戸棚にいつていたりする。

「……お茶にしましょうか」

ローザが言うと、一瞬の沈黙のあと、揃って首を縦に振った。何よりもまずは食い気。気が合う根本は、ここにあるのかもしれない。

父親と待ち合わせた場から馬車に乗って帰る、それがイルヴァの一

日の終わり方だ。

「今日も楽しかったか？」

夕日で顔を染めながら父が聞いてきたので、イルヴァは大きく頷いた。

しばらく馬車の振動に身を任せた後、イルヴァは口を開く。

「お父さん、イルヴァはまた、旅に出るかも知れないです」

父は一瞬、不安げな顔を見せたがすぐに笑顔になる。

「そうか……、じゃあまた、出発の日まで夕飯はイルヴァの好きな献立にしてみよう」

父に言われ、イルヴァは笑顔を見せた。

「急ぐぞ」

父はそう言って手綱を振るった。

夕食の席に用意されたのは山盛りのラム肉だった。

「さあさあ、がつつり食べなさいね」

母の間延びした掛け声。

「やっぱりラム肉は香草焼きに限るな」

双子の兄アルヴィドがラム肉を頬張り言うと、妹ベアトリスも「だわね」とご機嫌に答える。イルヴァも好物を頬張る。美味しい。母の作る料理はどれも一番美味しい。

ちらりと父と兄ミカルの方を見る。父もミカルも黙々とラム肉を食べていた。だがイルヴァは知っている。ミカルが本当はラム肉が好きではないことを。それでもミカルは何も言わない。この献立になる時はイルヴァがもうすぐ旅に出るのだと知っているからだ。イルヴァがいなくなるから「それまでぐらい我慢してやるか」と考えているのかもしれない。でも、イルヴァはミカルのことを少し好きになった。

カーテンの隙間から見える暗い景色を見て思う。明日も遅刻しないように、目覚ましをかける用意を忘れないようにしなきゃ。イルヴァ

アは積み上がったラムの骨を眺めながら考えるのだった。

f i n

「一度は行ってみたや音楽の都」

アルフレートは朝食である林檎をかじりつつ呟いた。

古めかしい本が並ぶ棚から数冊、迷うことなく取り出していく手つきからして、彼がこの本の山を全て内容も把握していることが伺える。茶の表紙の分厚い本を引き抜いた時、ひらひらと何かが舞い落ちていった。アルフレートは腕に抱えていた本を机に置くと、それを拾い上げる。

「……ああ、なつかしいな」

黄ばんでいて端も少し破けている一枚のメモ用紙。乱雑な字で『クリストフに返すこと！』と書かれていた。たぶんこの本を仕舞う前に本の上に置かれていたものだろう。ということはこの本はクリストフのものだ。

まあ、いい。どうせ返す友も、このメモを書いた友ももういないのだ。アルフレートは窓辺に置かれた揺り椅子に目を移す。かつてのこの家の主の顔を思い出した。何十年も前に死んだ人間の友、ウェインは非常に勤勉なやつだった。だからこそアルフレートが気に入った数少ない人間となったわけだが。

ウェインと出会ったのはウェインが二十歳そこそこの若者だった時代。それからの何十年間、彼が失敗するところも、成功するところも見えてきた。彼が言語学を専門に勉強をする、と言い出した時はアルフレートは必ず成功する、とわかっていた。なぜなら彼の言葉選びは常理的で言語中枢が人より優れていることを知っていたからだ。そしてそれは本当になった。彼が恋に落ち、結婚するところも見てきた。寂しくはなかった。なぜなら相手の女が傲慢でヒステリックなところがあると知っていたから、すぐに駄目になると思ったのだ。そして、本当に駄目になった。

老いた彼が日に日に弱っていく姿も見えてきた。白髪が増え、目が悪

くなり、ぼんやりすることが多くなった。そして、この家で安らかに息を引き取ったのだ。寂しくは無かった。なぜなら人間が自分たちよりも遥かに弱い生き物であり、遥かに寿命が短い生き物だと知っていたから。

ウェインが呟いた台詞を思い出す。

「僕と一緒にいた時間は、君にとってはあつという間の出来事なんだろう。僕という存在は君の人生の何分の一を占めたのだろうね」
「アルフレートは悲しい、とは思わなかった。なぜなら彼はエルフだからだ。長寿の種族エルフは生き物の生き死にに、あまり感情が動かない。そういうものだ」と知っているからだ。それは他の種族には理解しにくい感情かもしれない。時の流れを共有しえないエルフ特有の心の守り方なのかもしれない。

用意した本を抱えて家を出る。数日前より大分強くなってきた日差しに目を細めた。

アルフレートの住む家はウェインから管理を頼まれた小さな家だ。まさかウェイン本人もこんなに長い間住まわれているとは思ってないに違いない。しかし学園にも近いところがアルフレートには気に入っていた。そして何よりこの町が好きだった。時が止まっているかのような古めかしさを感じさせる時もあれば、常に新しい波が渦巻く喧騒もある。

「……重いな」

いくら近いとはいっても少々欲張りすぎたかもしれない。肩に引っかけた袋の重みを感じながら、持ってきた本の冊数に後悔し始める。荷物を持つ手を反対に変えた時、横から声がかかる。

「おはよ、アル」

能天気な台詞にアルフレートは返事を迷った。

「何だよソレ。行商でも行くの？」

構わず相手は話しかけてくる。猫のような耳に尻尾、身長はアルフ

レートは半分ぐらいだが軽快な動きを見せる異種族。

「何度も言ってるだろう、フロロ。私の名前を変な風に略すな」

「いいじゃない、そんな長い名前をしてる方が不便だよ」

フロロはけるつとした顔で言って抜ける。

「お前がそんな呼び方するから、学園でモロロ族の奴らに同じように呼ばれて迷惑してるんだ」

アルフレートはそう言うと言と眉間の皺を深くする。学園にはフロロの他にも彼と同じモロロ族が何人かいるのだが、いずれもフロロと同じような馴れ馴れしさに加え、どうもテンションの高さに付いていけずにアルフレートは苦手だった。モロロ族はフロロなど大人しいほうで、皆「絵に描いたように陽気」という性格だ。そのおめでたさはアルフレートと正反対の位置にいる。

ふとアルフレートは随分前に出会った草原の民族を思い出した。そういうえば彼らもアルフレートが引いてしまっぐらいおめでたいやつらだった。毎日宴会を開き、毎月のように祭りを開催する。結婚式といえは三日は続き、葬式でも「故人が寂しがるから」と理由をつけてどんちゃん騒ぎをするような種族だった。その時は「こういうやつらに関わるのは極力避けたいものだ」と思ったのだが、まさかこうして一緒に旅をする仲になるとは。

人生とはわからないものだ、と長い長い年月を振り返りアルフレートは噛み締めた。

学園の門まで来た所で肩にかかる重みに限界がきた。袋をどさりと地面に下ろす。

「おい、持ってくれないか？」

隣りにいるフロロに聞くと、彼はひょいと肩をあげた。

「冗談だろ？アルより俺の方が非力だっつーの」

そう言うと言と門の中を指差した。

「あ、ちよつと良い所にいい人がいるじゃん」

アルフレートたちより前を歩く一人の女。すらりとした体に長い艶やかな髪。

「じゃ、俺は先行くから」

薄情な台詞を残すとフロロは校舎の方ではなく裏庭の方に駆け出した。アルフレートはふうと息を吐くと前にいる人物に声をかける。

「おい」

呼びかけにくるりと振り向いた彼女は長い睫毛をぱちぱちとさせるとアルフレートに近づいて来る。

「おはようございます、アルフレート。朝から偉そうですね」

「お前よりは偉い自信があるからな、イルヴァ」

アルフレートの態度にもイルヴァは不愉快な顔は見せない。いつもの無表情があるのみだ。彼女の場合は『何を考えているのかわからない』のではない。何も考えていないのだ。

アルフレートは昔会った、一人の女剣士を思い出した。いつも無表情を崩さない鉄の女。口数少なく、甘い言葉にも崩れない彼女は腕も立つことから周りから羨望の目で見られていた。実際は彼女は寂しがりやでマイナス思考の塊だったが。そのことが原因で独り身のままだった彼女をアルフレートは「最も愚かな人間の一人」に認識していた。強いのではなく弱い自分をさらけ出すことも出来なかった彼女を、アルフレートは手を差し延べることもなかった。

アルフレートはイルヴァを見た。彼女の場合は少し違うようだ。不器用だから無表情、無口というより、生れつきのものを無理していない感じだ。その理由にイルヴァは言いたいことはそのまま言うし、自分の欲望にも正直だった。それは賢い生き方の一つだ、とアルフレートは考えるのだった。

「ここに置いておきますよ」

「ああ、悪かったな」

ミーティングルームに来たアルフレートは本を運んでくれたイルヴァ

アに礼を言った。イルヴァが大きな瞳を見開いてアルフリースの顔をじっと見ている。

「なんだ？」

「アルフリースに褒められるなんて、珍しいことです」

イルヴァは「うふっ」と笑うと廊下を去っていった。

「……あいつが驚くこともあるんだな」

アルフリースは自分でもズレていると思いつつも呟いていた。

窓の外の景色を眺めながら教官室までの廊下を歩く。教官から地図を借りる為だ。今日はメンバーと次の旅の目的地を話し合う予定だったのに、資料を持って来たはいいが地図を忘れてしまった。

曲がり角で急に出てきた人物に思いきりぶつかる。アルフレートはふらりとよろけると壁に頭をぶつけた。

「やだ、アルフレートじゃない」

聞き覚えのある声に怒りが倍増する。

「……まずは謝ったらどうだ、ローザ」

「お互い様じゃない。っていうかアンタちゃんと食べてるの？そんなひよろっこい体してるから今のくらいでよろけたりするんじゃない」

余計なお世話だ、この大女め、と思ったところで間違いに気づく。こいつは男だった。金髪碧眼に端正な顔つきといい、威厳あるオーラといい、アルフレートが見てきた王族にも勝る雰囲気を持ち主だというのに、どうしてこうもおばさんくさいのだろう。女を通り越しておばさんだ。

「今日もうちで御飯食べていけば？どうせ家帰っても一人なんですよ？」

ローザの言葉にアルフレートはある人物を思い出す。1人で旅をしていた時に立ち寄った、小さな村の中年の女。人を見るなり「妖精さんだ」と指差す遠慮のない人物だったが、やはり世話好きのおせっかいさんだった。彼女には村に滞在中、しこたま食わされたが、どれも美味しかったのは認めざるを得ない。

どうして彼女のことを思い出したのかが可笑しくて、吹き出しそうになるが堪えた。理由を言えば目の前の人物が色々うるさそうだからな、とアルフレートは顔を引き締める。

「じゃ、後でね」

駆けて行くローザの後ろ姿を見ながら思う。田舎での思い出を思い出したのはきつと、彼女たちの性格が似ているというよりも、二人に共通した強さを感じるからだ。

「まあ、あのキャラを隠さず生きてる時点で相当タフだよな」
アルフレートは一人呟いた。

「破かないでくださいよ」

地図を手渡しながら言う女性教官にアルフレートは頷いた。教官たちのアルフレートに対する態度を見るのはとても面白い。集団の中に入ると他の生徒と同じ扱いだが、一対一になった途端にどう接して良いかの迷いが生じる。それが手に取るように分かるからだ。学園の生徒であるが相手はエルフだ。人間に対して絶対的な力の差があるこの相手をどう扱うべきか、という混乱が垣間見えて面白い。アルフレートが属している吟遊詩人を育成する『バードクラス』では教官たちは命令口調、もしくはフランクな話し方なのに対して単位取りに選んだ選択授業の精霊魔術の時間では敬語になる教官が多いのも可笑しい。

そういうことを楽しんでいる自分が一番の変わり者だという自覚はあった。だからこそ同種族の集落ではやっていけないかった苦い過去があるのだから。

教官室を出ようとした所である人物に目が止まる。学年主任のメザリオ教官と話している長身の男。話しが終わったようで椅子から立ち上がったところで目が合った。アルフレートが手を挙げるとこちらにやってくる。

「おう」

「おす」

男同士の挨拶が素っ気ないのは人とエルフでも変わらない。二人揃って教官室を出ると、アルフレートは閉まり行く扉の隙間からメザリオ教官が溜息をつく姿を見た。

「何か言われたな？」

アルフレートに聞かれ、ヘクターは苦笑する。アルフレートはそれを肯定と受けとった。あまり突っ込んで聞く気もない。彼が話さないのであれば、それは話すような事ではないのだろう。

「何それ？」

ヘクターがアルフレートの持つ地図を指差す。

「ローラスの地図だ」

「ああ、もう『次』を決めるのか」

二人はすっかり人数の減った校舎を見渡す。学園の仲間は今も旅を続けているのだ。

「嫌なのか？」

「まさか」

ヘクターの強い返事を受けて、アルフレートはまた、過去に戻る。

この男はかつて『神王』と呼ばれた男に似ている。顔や体つきも違ければ包んでいる雰囲気もまるで違うが、きっと同じ王星の下に生まれたのだろう。神王は寒気するほどの威圧感を放つ男だったが、神の娘に恋をした。それで愛の甘さに溺れていったのでは単なる教訓話だが、神王はそれを強みにした。王になるために生まれてきた男、それが神王だった。

ヘクターの横顔に目を向ける。学園に来た時、真っ先に目についたのはきつと、人より目立つ容姿だけでは無いのだろう。彼がどういう道を歩むのか、見守るのも面白いかも知れない。

「生まれた土地が違えばなあ、この国は共和制だ」

アルフレートの脈絡のない話しにヘクターが眉をひそめた。

「何？」

「いや、何でもない」

アルフレートの答えにヘクターが首を傾げるのが横目に見えた。

ミーティングルームの扉を開けるとすでに全員が揃っていた。

「ちよつとアルフレート！」

挨拶もそこそこに、アルフレートに突っかかってくる一人の少女。

「なんで持ってきた本、バンダレン地方のばっかりなのよ！」

「私が行ってみたいからだ」

アルフレートの物怖じしない返答に少女は一瞬言葉に詰まる。が、より眉を釣り上げて詰め寄ってきた。

「これじゃアルフレート一人が決めるのと同じじゃないの！皆の意見も聞かなきゃ！」

真つ直ぐこちらを見る少女の顔。これだ、この気の強さ、彼女の祖母を思い出す。リジアの祖母であるアルマ・ファウラーに出会った時に言った第一声がこうだった。

『お前の血族にイーラ・ファウラーはいないか？』

返ってきた答えはこうだ。

『イーラはわたしのおばあさんだけど……、おばあさんを知っているの？』

アルマ、お前もそうだったな。へたくそな魔法しか使えなくて、その割に気が強くて賢かった。何度言い合いになったかわからなかったな。でもアルマの考え方も嫌いじゃなかったんだ。

『きつとわたしとあなたの生きる時代は違っていつてしまうのでしょうけど、もしもわたしの子供やその子供にも出会うことがあるならば、その時はお願いね、アルフレート』

出会ってしまったよ。私の驚きがお前にわかるだろうか、アルマ。厄介なことになった、と思ったが、もしかしたら私も望んでいたのかもしれないな。アルフレートは目の前の少女を見て思う。

「ちよつと聞いてんの？」

リジアがアルフレートの顔を覗き込む。

「聞いている。『皆の意見を聞こう』とか言ったな？これが私の意見だよ。お前が行きたいところはどこなんだ？さあ、言ってみる」

淡々と返すとリジアは口箆った後、腕を組み睨みつけてくる。

「……もう！そういうところが嫌い！」

ふん、とそつぽを向くりジアを見て、アルフレートは「同じ顔するんだな」と苦笑した。

「え？」

「いや、何でも無い」

アルマの時もそうだった。イーラの表情と被ってはかつての友を思い出してしまったものだ。

「変なの」

そうだな。まったくもって変な現象。この縁はいつになったら切れるのだろう。こんな運命を決めた神は本当に変な趣味をしている。アルフレートは悪くないかもしれない、と思った。

夕刻、かつての友の揺り椅子に身を委ねながら本棚の隙間を見た。

音楽の都バンドレン。その都市を描いた小説、ガイド本、歴史書が抜け落ちた棚。

一度だけウェインが言ったことがある。

『このへんは処分しようか？』

アルフレートはそれを柔らかく断った。後にも先にもアルフレートが曖昧な否定の仕方をする言葉を選んだのはあの時だけだったかもしれない。『ひどく人間くさい言い方だな』と自分で笑ってしまっただものだ。

暗くなってきた室内を見て、アルフレートは短く呪文を唱える。すぐに光の精霊がいくつも現れて部屋の隅々を照らして行く。

『わたしの子供やその子供に出会うことがあったら、その時はよろしくね。そうすれば？？』

「私は再び歌えるようになるだろうか、アルマ」

アルフレートは呟いた。

『会いにいらつしゃいよ、生きてるうちに』

アルマの声が聞こえた気がした。

f
i
n

夢を見た。

一人の少女が泣いている。

声を上げて泣いているわけではないが、静かに涙を流す姿が痛々しくてひどく寂しい。

思わずヘクターはその少女の頬に伝わる涙を拭おうと手を伸ばした。届かない。

目の前にいるのに。

もう一度、手を伸ばす。

少女が驚いたように目を見開くのを見て、反射的に手を引っ込めた。

目の前には見慣れた自室の天井があつた。ヘクターはぼんやりする頭を無理矢理起こすと深く息を吸い込んだ。足が木目の床に着いたところでゆっくり吐き出す。

何か夢を見た気がする。長く続いて欲しいような夢だったのが、急に早く終われ！と意識が変わった途端に目が覚めたのだ。どんな夢だったか思い出そうとするが出来なかった。ひどく喉が渴いている。あまり良い夢ではなかったのかもしれない。

顔を軽く叩くと部屋を出る。廊下を祖父が庭から戻って来るところに出くわした。

「おう、おはよう。なんだ、変な夢でもみたのか？妙な顔して」

祖父に言われてヘクターは苦笑する。

「いや、どんな夢か覚えてないんだ。だから気持ち悪くて」

「そりゃぐっすり寝たつてことで良いじゃないか」

祖父はぽん、とヘクターの背中を叩くと片手に持っていた庭の花を手渡してきた。

「ばあちゃんに渡しておいてくれ」

自分で渡せばいいのに、という言葉は口には出さない。祖父の性格はよく知っている。庭で育てた花を渡すことすら恥ずかしいのだろう。

「これ、何？」

「シャクナゲだ。食卓に飾る花を欲しがってたから切ってきた」

「そう、渡しておくよ」

祖父が頷くのを見てから台所に向かう。

「おはよう。あらいい男が花なんて持つちゃって」

祖母が卵を焼く手を止めて冷やかしてきた。

「じいちゃんが庭から切ってきた」

祖母は嬉しそうな顔をしながらも「また孫を使って」とぼやく。

「パンが焼けてるわよ。食パンを隣の力ロリーナから貰ったの。」

「こんなよ、こんな」

祖母は両手で大きな円を作った。

「今度お礼言つとくよ」

「ええ、お願いね」

祖母から花瓶を受け取り、食卓に移動する。

隣の力ロリーナ親子は何かとヘクターの家の世話を焼いてくれる。年寄りの家に男の子一人だと何かと不便じゃないか、と心配してくれているのだろう。ヘクターはいつの間にか隣りで朝食を食べている祖父のすっきり白くなつた頭を見た。もそもそ口を動かす横顔は、少し自分に似ている気がする。

ヘクターの両親も、祖父母も決して早い年齢で子供を産んだわけではない。だから祖父母の年齢も、また見た目もヘクターと並んだ際「見ようによつては親子にも見える」とはかけ離れたものであり、現に母側の祖父母はすでに病死している。

この歳になつて孫を、しかも男の子を引き受けるのにどれだけの勇気がいったらう。一度も孤児院行きなどを考えなかった祖父母には感謝しかない。元々風来坊だった両親の代わりに自分を育ててくれた祖父母には両親以上の愛情を持っていると言つていい。ただ、

なぜだろう、「両親は？」という質問にはまず本当の両親の顔が浮かぶのだ。当たり前前の事なのかもしれないが、それが少しもどかしかった。

「来年にならないとローラスからは出れないんだってな」

祖父が目線は皿の上のパンに向けたまま聞いてくる。

「そうだよ。どこか用事でもあった？」

「いや、……サントリナの友達に会いに行くのはもう少しあとになるな」

サントリナはローラスの隣国だ。ローラスより少し暖かい風と深い青の海を思い出す。

「いいよそんなの。もうこっちの方が馴れたよ」

故郷ウエリスペルトに戻りたい、それが祖父母から唯一言われたお願いだった。ヘクターはすでにサントリナの学園の3期生になっていたが喜んで受け入れた。友と別れる寂しさもあったが、新しい町に行く期待の方が大きかった。ローラスはサントリナに比べて大きく、都会だというイメージもあったからだ。それでもいまだに祖母は気にしているらしい。

「今度友達連れてくるよ」

サントリナにいた頃は幼かったこともあって、よく家に友達を連れてきたのだ。今は友達と家で遊ぶ、ということも無くなってしまったので余計心配しているのかもしれない。それは年頃からくるものなだけだ。ヘクターは二人を安心させる意味で提案した。

「女の子か？」

「……どっちでもいいよ」

じゃあ女の子がいいなあ、という祖父の言葉を無視して立ち上がった。結局、歳のわりに落ち着いた孫をからかいただけなのだ。

支度を終わると台所で洗い物をしている祖母に顔を出す。

「いつてきます」

「あら、もうそんな時間？いつてらっしゃい」

玄関を開けた先には祖父が育てた植物たちが朝日に向かって敬礼し

ている。門を開けたところで隣家の住人が家の前の掃き掃除をしているところを見つけた。早朝に出る時も必ず姿を見る事から、よっぽど大掛かりな掃除を毎朝繰り返しているのだろう。

「おばさん、おはようございます」

ヘクターが声をかけると隣人のカロリーナが猛烈な勢いで走ってきたので思わずたじろいだ。少し太めの彼女が走ると迫力を感じずにはいられない。

「おはよう！パン、どうだった？」

「美味しかったですよ。いつもありがとうございます」

「良かったわあ。ミシエルにも言っとくわ。ああ、娘と作ったのよ！」

『娘』という単語を強調される。ヘクターはきつと料理が出来る娘、ということを自慢したいのだろう、と解釈した。

「今度ミシエルにも会ってやって！お茶でもしに来たら……ああ、なんなら今呼んでくる？」

カロリーナの申し出を「遅刻してしまうので」と断ると、ようやく解放された。

いつもの場所から大型の馬車に乗り込む。歩いて通えないこともない学園までの道のりだったが、この大型馬車、通称『バス』で通うことを選んだ。毎日朝から夕刻まで走り回される授業にくたびれたのもあるし、乗り物に乗った際のひたすらぼーとする時間が好きだったからだ。

しかし、その理由も今は変えた方が良くかもしれない。

二列に伸びる客席の右側後ろから二番目、彼女はいつもそこに座っている。大きな鞆を隣の席に置いて分厚い魔術書と睨み合っている。「おはよう」

ヘクターが声をかけるとぱっと顔を上げ、大きな緑色の瞳と目が合った。忽ち笑顔になったかと思うと、今度はあわてふためくように

本をしまいだしたり忙しい。少女が鞆に本をしまったところで鞆を網棚に乗せてやる。

「ありがとう」

少女の言葉を聞いてから、ヘクターは少女の隣に座った。じつとこちらを見る瞳に顔を向けるが、目を逸らされてしまう。少し寂しい気もするが、何か言いたい事があるのかもしれない。しばらく待つが何も言葉が無いのを確認し、こちらから声を掛けることにする。

「リジアは行きたい所決まった？」

ヘクターが聞くとリジアは首を振った。

「行きたい所はいっぱいあるけど、ここ！って所が無いんだよね」
今日はメンバー達と次に行く冒険の地の話し合いをする予定だった。この時期が一番どきどきとして楽しい。

誰かが窓を開けたのか、リジアの金色の髪が揺れる。二の腕に触れたそれがくすぐったくて手を出しそうになるが止める。気にするだろう。

「でもまあ、何処に行くことになっても楽しめると思っただけだね、わたしは」

そう言つて笑う彼女を見て、ヘクターも頷き笑った。

前から思っていたことだがこの少女と話している間、夢を見ているふわふわとした感覚に似たような不思議な気分になる。きつと彼女の雰囲気がそうさせているのだろう、とヘクターは一人納得した。

「ヘクターは？」

リジアに顔を覗きこまれ、ふと今朝見た夢が臍げに思い出される。

確かこんな情景があった気がする。……駄目だ、思い出せない。リジアの不思議そうな顔を見て、自分が彼女の質問に答えていないことに気づく。

「いや……、俺もどこでもいいんだ。行つてみたい場所はいっぱいあるしね」

そうだよ、と言つて笑うリジアを見て安心する。

そうだ、彼女は泣いてなんかいないんだ。

そう納得したところで「何故そんな事を？」と再び首を傾げてしまった。

学園に到着するとリジアと別れる。リジアはソーサラーを目指す。校舎は魔術師クラスが纏まって入る東側の校舎。ヘクターは西側の校舎に向かう。

途中、クラスメイトの何人かに出会って近況を報告しあいながら自分の教室に向かって廊下を歩いていると、見知った顔を見つけた。ふわふわと羽根が揺れる帽子をかぶった少女に近づくと声を掛ける。

「おっす」

少女は振り向くと長い睫毛を瞬かせた。

「おはようございます、ヘクターさん」

相変わらず丁寧な挨拶だ。それにある意味いつもと変わらない格好、赤を基調とした古めかしい騎士のコスプレにヘクターは少し嬉しくなる。

「今日も面白い格好だね」

ヘクターが言うといルヴァは心持ち嬉しそうに本日の衣装の説明をしてくれた。

「最近タヌキにも怒られなくなりました」

タヌキとはファイタークラスの授業を受け持つ一人の教官のあだ名だ。自分の武勇伝を語るのが大好きな割には締まりのない体をしているので、ファイタークラスでは侮蔑している者も多い。

イルヴァの服装をこのタヌキだけでなく、生徒の間でも怪訝な顔でみるものは少なくなかったし、「ルックスは最高なのにな」と笑うのがヘクターの周りの人間の評価だった。そのため同じパーティに入る前から彼女のことは知っていたが、ヘクター自身の思いとしては「楽しそうだからいいんじゃない？」とある意味冷めたものだった。彼女の服装が派手なことよりも、それを貫く彼女自身が良いものだと思ったのだ。

ヘクターが、

「よく似合ってるよ」

と言うと、イルヴァは「早くリジアに見せたい」と言い、口元がほころぶ。そんな彼女と後ほど会う話をして別れる。

彼女はリジアが好きなのだ。「いつか、リジアと騎士とお姫様ごっこしたいです」と言ったイルヴァを思い出す。リジアは丁重にお断りをしていたがヘクターも「似合いそうなのに」と思ったのだった。その遊びはよくわからないけれど。

自分は？自分の夢は？

思考する頭に一振りに剣が浮かぶ。が、首を振るとそれを胸の隅に追いやった。今は考える時期ではないのだ、と納得させながら。

「どうした？何か悩みがあるなら相談のるぜ、兄ちゃん」
ずしり、と肩が重くなる。

「……危ないだろ、フロロ。急に乗られたら首に悪い」

ヘクターは前振りも無く肩に乗ってきたモロロ族の青年に注意した。

「そう言っなよ、あんたが悩んでると俺もつらいぜ」

フロロは降りる気配もなく少しずれた返事を言っただけだ。

「……何のこと？」

ヘクターが言うのとフロロはぼんぼん、と頭を叩いてくる。

「あんた、俺が盗賊だつてこと忘れてるだろ」

その言葉の意味の裏にあるものを理解して、ヘクターは一瞬動揺した。

「……リジアには言うなよ」

自分でもなぜあの少女の名前を出したのかわからなかった。ただ、仲間にはあまり知られたくない。フロロが髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜてくる。

「わかつてるよ」

そう言うのとフロロは肩から飛び降りていった。

教室に向かう廊下を、気持ちゆっくり歩いていく。気乗りしないことは確かだ。教官に会いに行くのは別に叱られるのではない。が、ヘクターは人からの申し出を断ることが生まれつき苦手だった。彼の性格の中で一番の欠点と言っている。

「失礼します」

断りを入れながら教室の扉を開くと、教官たちの空気が変わる。何気ない顔で机に向かっている者、窓の外を見ながらお茶を飲む者、明らかに「無関心を装う」気配でいっぱいだった。

「おう、こっちだ」

奥の方から学年主任のメザリオ教官が手を振っている。彼の元に行くと「まあ座れ」と椅子を勧められる。ヘクターとしては長い話し合いにするつもりはなかったが、とりあえず勧められたまま腰を下ろした。

「えー……、で、どうだ？」

「やっぱりお断りしようと思います」

昨日と変わらない答えを聞いて、メザリオ教官は深い溜息をつく。

「そうか」

「はい」

教官からの申し出はこうだった。学園に卒業生を中心にした戦闘部隊を作りたい。先日のローラスに悪魔が出現したという情報から考えられたものだ。元々魔術師クラスには「研究科」という機関があるのに対して戦士たちが集まるようなところが無かったのもある。研究科と少し違うのはこの計画はローラス全域の学園に対しての計画であり、国家レベルの話だということだ。

始めに話を聞いた時点では「モンスターから民間人を守る、ということでは冒険者と何が変わらない？」と疑問に思ったが、メンバーを聞いて少し納得した。聞き覚えのある名前ばかりだったのだ。自分が知っている名前、ということはある程度腕の立つものと考えていいのだろう。そしてそれはローラスを守る為に戦いに特化したもの、という意味だ。ローラスに常駐し、並の冒険者では歯が立たないモンスターが出現した時に前線に立つものということになる。日頃から教官たちに言われている教えを忠実に守るなら、願ってもない申し出なのかもしれない。それでも受けたくは無かった。

長い沈黙の後、メザリオ教官は苦笑した。

「お前もハマっちゃったんだろうなあ」

「はい？」

「いや、何でもない。気にしないでいいぞ。始めから断られると思っていた話だから」

それでも声を掛けてきた、ということは自分の腕が評価されていると考えていいのだろうか。ヘクターは教官の心遣いに感謝した。短くお礼を言つと席を立つ。振り返った瞬間、一際存在感を放つ人物に目が止まる。黒髪から長い耳が覗いている青年。体は細いのにくぐに目につく。彼の方もヘクターを見ると手を挙げた。

「おう」

「おす」

簡単な挨拶を交わすと二人揃って教官室を出た。扉が閉まった瞬間、アルフレートに指摘される。

「何か言われたな？」

人間以外の種族というものはこんなにも勘が鋭いのだろうか、とヘクターは苦笑した。が、アルフレートはそれ以上は突っ込んでこなかった。言いたいことがあるなら自分から言ってくるだろう、年上の青年の顔にはそう書いてあるようだった。

アルフレートの右手にある丸まった紙に気づき質問する。

「何それ？」

「ローラスの地図だ」

アルフレートはひょいと持ち上げて答えた。地図、と聞いただけで少しわくわくする。広げて眺め、仲間と談笑する。それがあから冒險者は幸せなのだ。

ミーティングルームに入ると仲間の全員が揃っていた。今日初めて会う顔に挨拶する。

「おはよう、ローザ」

「あらおはよー、何か機嫌良さそうな顔ね」

彼女に言われてヘクターは自分の顔を触った。

「そう？」

「ええ、なんか男前がもつと男前になってるわよ。なんつって」

ほほほ、とローザが笑う。最近どうも彼女が本当は男だということを忘れて困る。気づかいが上手いからだ。今言われた「機嫌がいい」というものも予想外の指摘で驚いてしまった。

リジアとアルフレートが言い合いを始めた。いつものことだ。お互い頭が良いので独自の意見というものがあるのだろう。イルヴァに声を掛けられる。

「ヘクターさん、お菓子食べます？」

うん、と答えるとイルヴァが抱えていた缶からぐわっと掴んだ大量のクッキーを手渡された。

「あ、ありがとう」

予想を超える量だったが、最近彼女の食べ物を分け与えてくれる量というのは彼女の好意のパロメーターである、という事に気が付いたばかりなので嬉しかった。

「俺にもくれよ！」

フロロが飛び跳ねながら叫んだ。

「しかし、こんなに菓子ばっか持ち込んで怒られないのか？」

アルフレートがお菓子で埋まった棚を眺めながら呟く。

「それより『うるさすぎ』って言われちゃった、両隣りから」

リジアが部屋の両サイドを指差し、溜息ついた。

「そろそろ教官から注意されるかもね」

ローザが紅茶を飲みつつ答える。ローザが持ち込んだお湯を湧かす器具も注意されたばかりだ。

「いいじゃん、別に」

ヘクターが答えると皆が一斉に見た。自分には特に問題があるとも思えなかったので素直に口に出したのだがまずかっただろうか。

「リーダーが言うならしょうがないわね」

「そうね」

ローザの答えにリジアが乗る。

「そうか、リーダーがこんなだから我々がだらしないんだ」

アルフレートも頷いている。色々突っ込みたいところはいっぱいあるが、ヘクターは「まあいいか」と納得した。

いつも通り、午後はローザの家になだれ込み、夕刻にはリジアと一緒に帰る。自宅のある通りに戻ると鍋を抱えたカロリーナが走ってきた。

「これ、トマト煮！鶏のトマト煮！作り過ぎたから持って行って！」

興奮気味に喋る彼女に頷きつつ鍋を見る。いくら作り過ぎたといつてもこんなに始めから作り始めるものなのか、という重さの鍋を受け取り、ヘクターは小さく笑った。たぶん遠慮するといけないと思つての方便なのだろうと理解した。

カロリーナが隣家に向かつて声を張り上げる。

「ほら、ミシエル！出てらっしゃいな！ヘクターが帰ってきたのよ！」

家から応答はない。ミシエルの顔を大分見ていないように思う。確か同じ年ぐらいだっただけだが。祖母がたまに話題に出すのであることは確かなのだが、自分とは生活時間が食い違っているのかもしれない。娘が顔を出さないことをカロリーナは詫びてきた。

「恥ずかしがつてるのよ、あのこつたら」

朝と同じようにお茶に誘われ、「今度ぜひ」と答えるとようやく解放された。

家に戻ると台所に立つ祖母に鍋を渡す。祖父が庭で草を耒っていた。

夢を見た。

目の前で少女が泣いている。

どうして泣いているのだろう、と思つると同時に自分のせいであると考えていた。

「泣かないで」

手を伸ばすと少女の頬に手が触れた。ああ、ようやく触れたのだ、と思う。少女の肩がぴくりと揺れた。逃げ出しそうになる気持ちを抑え、構わず指で涙を拭くと少女を目が合う。

「泣かないで、リジア」

リジアの顔が驚いたように目を見開いた。思わず手を離しそうになったが、次の瞬間、リジアの顔に笑みが溢れたので安心する。ああ、良かった。自分でも驚くほどの安堵感に包まれた。ああ、やっぱり、やっぱりリジアだったんじゃないか。

どうして忘れてしまったんだろう。

リジアが何か囁いた気がした。

ああ、そうか。そうだったのか。いつも、目が覚めると忘れてしまう。どうしてなんだろうね。きつと君といると今のような夢の中にいる気分になるからなのだと思う。こんな俺を許して欲しい。

でも、それでも朝になればまた忘れているんだ。そして夢を見ると思い出す。

本当は君が。

でも、それでもいいのだと思う。ずるい考えかもしれない。でもこの心地よい空気に暫くは酔っていいように。

f i n

「リジア・ファウラー」

教官に名前を呼ばれ、わたしは立ち上がる。教壇に向かい手渡された自作のタリスマンを受け取った。

「なかなかよく出来ていた。加護の呪文まで大味なのがお前らしいがな。魔力付加の呪文は呪文のコントロールには良い練習になるから、これからもがんばりなさい」

わたしは褒められているのかどうか微妙なお言葉を頂き、少し頬が引きつる。

「次、セリス・ミユラー……」

席に戻るとしげしげと自分の作ったタリスマンを眺めた。月をモチーフにしたエンブレムに小ぶりのジュエルズアミュレットがはめ込まれていてデザインも可愛い。鎖はやや太めなので普通に考えたら男物だ。でもこれなら自分で着けちゃおうかなあ、そう考えた時、後ろからひそひそと話し声が聞こえてくる。きやいきやいとした楽し気な雰囲気思わず耳を傾ける。

「ねえ、やっぱり同じパーティの人にあげるの？」

「そりゃあ、ね。自分で作ったタリスマンぶら下げても虚しいし。っていうか約束しちゃったのよね」

「ええっ、それってやっぱり、ジャンに？」

「まあねー、ファイターの間でも有名な話しになっちゃってるみたいだから『貰えないのは肩身狭い！くれ！』とか頭下げてきたし」

「やっぱりそうなんだ。毎年の恒例行事になってるもんね」

「あんたもあげるんでしょ？ランディに」

「うーん、でもやっぱり恥ずかしいよおー」

後ろの女子二人の会話を聞き取ることに神経を集中しすぎたのか、わたしは不意に腕を突かれ飛び上がる。

「ひゃあ！」

「ちょっと、変な声出さないでよ」

わたしは慌てて姿勢を低くしながら隣りにいる人物、腕を突いてきた張本人を見た。

「脅かさないでよ、キーラ」

「脅かしてないわよ。誰かさんは上の空だったみたいだけど」

キーラはそう言って、ふふふ、と笑った。キーラは同じクラスの中でも同年齢には見えないくらいに大人びた見た目だし落ち着いている。どこか一歩引きながら周りを眺めている感がある子だ。憂いある雰囲気といい飛び抜けた美人であることもあって、確かに上の学年からものすごいメンバー勧誘があったと噂で聞いていた。

「そんなに深く考えずにさらっと渡せばいいのよ？どうせ皆渡すんだから」

キーラの色つばい視線にやられてわたしはふらりとする。

「……別に深く考えてないもん」

「そう？ふふふ」

いたずらっぽい笑みを浮かべる彼女に逆に聞いてみる。

「キーラは誰に渡すの？」

「わたし？わたしは自分で使うわ。うち、二人ファイターがいるから、一人に渡したら色々面倒でしょう？」

キーラはそう言うのと無造作に自分のタリスマンを鞆に仕舞う。そしてにこりと笑う彼女を見て思う。こ、こいつは『モテる女』だ……！しかも自分で分かっているモテる女だ！

「リジアはちゃんと渡してあげなさいよ。良い事教えておいてあげる。あのね、毎年タリスマンを作る授業の後は騒ぎが多いのよ。このタリスマンに関する逸話はリジアも知っているとと思うけど、騒ぎが起きる理由はね、ソーサラーの皆が皆、同じパーティーの人間に渡すとは限らないからよ」

「……っていうことは？」

「好きな人が同じパーティーにいないとは限らないでしょ？だから告白のアイテムとしての意味が大きくなってしまったコレを、違うパ

ーティーの人に渡しちゃう人も多くなってきたわけ。その後の混乱は想像出来ない？貰えなかったファイター、他所から貰っちゃったファイター、自分のパーティーのファイターが余所者からタリスマンを受け取ったと知ったソーサラー、裏切り者の烙印を押されるソーサラー……」

キーラの話し方はなんだか怪談のようで、わたしは背中がぞくりとする。

「『彼』、モテるんでしょう？いいのお？今更嫉妬するもなにも無いだろうけど、彼がごたごたに巻き込まれたら……」

阿鼻叫喚地獄絵図よ、とキーラは締めくくる。流し目にした青い瞳がきらりと光った。わたしがごくり、と飲み込んだのが聞こえたのかキーラは笑みの色を濃くした。

「大事にならない方法、教えてあげようか」

「大事なんて、そんな……」

否定しながらも聞く気満々のわたし。

「簡単なことよ。リジア、あなたが彼に気持ちを伝えて、『他の人からは受け取らないで』そう言えばいいのよ。皆が幸せになれると思わなくて？」

い、いや、わたしがあなた程の色気と豊満な胸があつたら良かったんですけどね。わたしの腕を取ること二の腕に当たるキーラの大きな胸を感じながらわたしは思う。っーかそんなこと言えるぐらいなら初めから悩んでないわ！キーラは絶対楽しんでいる。彼女の微笑みを見ながらわたしは思った。

ソーサラークラスにこの時期になると毎年やってくるこの雰囲気。それは魔力の護符、タリスマン造りの授業があるからだ。タリスマンに限らず様々なマジックアイテムの生成もソーサラーの大事な仕事になる。そしてタリスマンにも色々な種類があるが、今回造ったこの護符に限ってどうしてこんな学園全体が浮き足立つかのような

騒ぎになるのには理由がある。

数百年前、まだ世界に戦乱の火が多く上がっていた頃、ある一国の騎士が自国の何倍もの兵力との戦闘に赴く為、戦場へ向かう。その際に肌身離さず持っていたとされるのが、自国に残してきた彼の恋人の造ったタリスマンである。

この話しが本当かどうかはわからない。が、実際騎士の出身国が何倍もの兵力の隣国と戦争になり、辛くも勝利しているというのは実話だったりする。

こんなロマンチックな逸話のあるタリスマンを造る授業があることは、すぐに学園のソーサラー以外にも広まっていき、大抵は同じパーティー内の戦士に渡すことになるので、貰えなかった戦士は涙に暮れる、というちょっと迷惑なイベントになってしまっている。

授業で造る物なもんだから一個しか造らない、というのも話しが大袈裟になる理由だ。一個しか無い物なので『いつも世話になってるから』という気楽な渡し方が出来ない。『初めて造った大事な大事なタリスマン様』になるのだ。

わたしは腕を組み、廊下を歩きながら唸る。

「やっぱりヘクターも知ってるわよね……。こんだけ有名な話だし」

今回のタリスマンを造る授業はわたしたち五期生だが、もちろんわたしも去年以前から知っていた。先輩たちが泣いて笑って大騒ぎの現場を何度も見てきている。

「こんだけ知らない騒ぎが毎年起こってるのに授業が無くならないのって、絶対教官たちも楽しんでるわよね……」

そう呟き廊下の曲がり角を進んだ時だった。がつんと景気の良い音と共に頭に衝撃が走る。

「いだっ！」

わたしは頭を押さえてしゃがみ込み、ぶつかったであろう相手も顎を押さえて座り込んでいる。涙目になりながらも相手の顔を見ると、ヘクターのクラスメイト、赤毛のクリスピーアン君であった。わ

たしの頭がもろに顎に決まったらしく、クリスピアンの目の焦点は少し定まっていけない。

「だ、大丈夫？」

わたしが問うと、はっとしたように顔を上げる。

「俺の方こそ、わ、悪い。……ってリジアちゃんじゃん」

クリスピアンは手を合わせて頭を下げつつ「ゴメンっ、許して」を繰り返している。そんなに謝られると、逆にムツとしてくる。

「お互い様なのに暴れたりしないから、止めてよ」

「い、いや、姫に怪我させたらヘクターが恐い……ってゴメンなさい、もう言いません」

わたしの能面のように変わる表情を見たのか、クリスピアンは土下座した。この人までからかってくるって、どういう風に話してるのよ、と彼のパーティーメンバーであるキーラの顔を思い浮かべる。

どうせお子様なわたしを二人してからかっているのだろう。

「どうでもいいけど、どうしてこんなところにいるのよ」

わたしが聞くとクリスピアンはばつが悪そうな顔になった。ここはソーサラークラスとソーサラーの教官室の間にある廊下だ。ファイタークラスの彼が用事があるとは思えない。ふと、ある考えが浮かぶ。……ははあん、さては、

「キーラの様子を見に来たのね」

わたしは腰に手を当て睨みつけた。考えてみればわたしと彼の身長差を考えると彼の顎にヒットしたのが不思議なのだ。背の大きな彼の体を考慮すればクラスピアンの方が腰を屈めて身を潜めるようにしていたとしか考えられない。「ばれたか」とクリスピアンは肩をすくめた。

「で、キーラが誰にあげるか、とか聞いてない？」

ばれたらどうでもよくなつたのか、クリスピアンは堂々と聞いてくる。

「……何の話し？」

「またまた、惚けちゃって。リジアちゃんもあげるんでしょ？タリ

スマン」

はあ、とわたしは溜息をついた。

「やっぱり知ってるんだ、その話し。ていうか、今日が返却日ってことまで知ってるんだ？」

尋ねながらわたしは思う。彼の好きそうな行事だもんない。タリスマンを実際に造ったのは先週のことだ。授業終了後、一度教官に提出して、返ってきたのが今日のことだ。

「そりゃあ知ってるさ。学園に入ってからが一番のイベントだもん」
「底の浅さが伺えるわね」

わたしの言葉にクリスピアンはがっくりと肩を落とす。

「そう言わないでくれよー」

クリスピアンはソーサラークラスのわたしでも名前を知っているくらい、魔術師クラスでも話題に上がるような所謂『モテる人』だが、ノリの軽さがヘクターとは対象的だ。ようするにモテるけど本気の人はい少ない可哀想な人、といえる。タリスマンをあげる程の人は少ないのかも。

「……話し戻るけどさ、知らない？ キーラが誰にあげる、とか」

真面目な顔に戻り、聞かれるが答えていいものかわたしは口籠る。

キーラとクリスピアンが同じパーティーとは何分目立つ二人なため知っていたが、もう一人いるからあげない、ってはっきりと言ってたもんなあ。もう一人って誰だっけ？

しかしクリスピアンはわたしが口籠るイコール知っている、と解釈したらしく食い下がってくる。

「教えて！ 頼む！ 俺の学園生活がこれに懸かっていると思って！」

余計言い辛いわ！………ということは言えないな……。逆に正直に伝えた方が傷は少ないかも、と思い渋々わたしは口を開いた。

「あげないんだって、誰にも」

「へ？」

「同じパーティーに二人戦士がいるから、揉め事は起こさないように自分で使ったって」

それを聞いて一瞬固まっていたクリスピアンだが、はああと長い溜息をつく。

「なるほどね、誰にもあげない、か。はあ、そうだな、わかってたはずなんだ、そういう女だって……はあ、いかにもあいつらしい」がつくり、という言葉がぴったりの反応を見せてくれるクリスピアン。慰めるべきなのか、ほっとくべきなのか。

「……いや、リジアちゃんは気にしないでくれ」

クリスピアンは、はは、と力ない笑いを浮かべた。目の端光ってますけど。

「ちくしょー、俺も『貰えない組』に入るとは……。あいつらの笑った顔が目には浮かぶぜ」

クリスピーアの反応を見るに、キーラから貰えない、ということよりも貰えない俺、にショックが大きいみたいだ。気持ちはわからない。ここまではつきりと勝ち組負け組が分かれてしまうのなら必死になるのかも。

「キーラ以外に貰えるかもよ？」

わたしが言っているとクリスピーアは首を振った。

「無理だろー、俺は。同じメンバーにいるファイターと気まづくなつてまでくれる子なんていないよ。粘着質なファンが多そうなヘクターとかならわからないけ……」

そこまで言つと『まずい』という顔に変わつて、彼は口を手をあて黙った。

「全部言ってるのと同じですけど」

「……だよねー、俺、こういうところ怒られるんだよね、キーラにだろうな。何となく想像ついた。

「まあ俺のことは気にせず幸せになってくれい、リジアちゃん。ヘクターも待ってるぜ、きつと。早くしないと他の子から貰ってるかもよ？」

「……残念ながらわたしも今日のイベントは関係ないのよ」

わたしが声低く言つと、彼はきよとした顔になる。

「なんで？」

「今日は午後から教官のアシスタントに付く当番の日なの。お昼は教官と打ち合わせしながらだし、夕方まで下級生の授業に付き合つて終わり」

それを聞いてクリスピーアは「あちゃー」と呟いた。

ソーサラークラスに限らず五期生になると下級生の授業を手伝う当

番がある。四期生までは午後までみつちり授業があり、五期生以降はあっても午前授業だが六期生になると大抵は冒険に出ているのでアシスタントは暇が多い五期生の仕事になる。一人一回ぐらいしか回って来ない仕事だが、よりによってこんな日にわたしに当番が回ってくるとは。つまり唯一の余時間であった今、たった今が彼によって潰されたわけだが、そんな事も知らずにクリスマスピアノはきょとんとした顔で聞いてくる。

「帰りに渡せばいいじゃん」

「帰ってるでしょ、そんな遅くなったら」

「一緒に帰ってるじゃん」

「別に毎日一緒に帰るなんて約束してないもん」

「ええ!？」

そんなに驚くことだろうか。一緒に帰っていること自体たまたまだし、今でもたまにお互いの時間が合わない時は自然に別々に帰るし。「そういうわけで、わたしにはこのイベントは関係なし。明日になつて渡すのも何だかね。他の子から貰ってるだろうから。いいのよ、珍しく腰の低いメザリオ教官が見れたし」

今日の仕事はメザリオ教官のアシスタントだ。教官も今日のことは知っているらしく、しきりに「悪いな」と繰り返していたのだ。わたしといえばかり半分、ほつとしている気持ちも隠せない。なぜなら余計な緊張が解けたからだ。渡さなくていい言い訳が出来たからだろう。

「じゃあね」

わたしは手を振りその場を離れる。後ろから「ドンマイ」という声が聞こえた。

教官室の一角にあるテーブルに向かい合って座るわたしとメザリオ教官。他の教官達は皆出ているようだ。

「その、悪いな」

お弁当を食べながらメザリオ教官がぼつりと言った。わたしは教官が奢ってくれたサンドイッチを食べながら答える。

「いいれふよ、気にしないでください」

教官は「そうか」と呟いた。

「今日はお前が当番だと聞いて、私も驚いたんだ。……その、なんだ、今日は実習の授業なんだ」

ぶほっ！わたしは口の中のハムサンドを軽く噴出する。

「……おい」

「すいませんっ、でも、じ、実習って……」

わたしも去年まで先輩がアシスタントに付く授業を受けていたからわかっている。実習の日、先輩たちはわたしたちのサポートだけでなく、手本を見せてくれたりしていたのだ。わたしがやるのか！？手本を！

「まあそうはいっても二期生の授業だからな。今日はエネルギーボルトの試し撃ちの日だ。大丈夫だろう」

教官の言葉にわたしも胸を撫で下ろす。なんだ、エネルギーボルトか……。これならわたしが唯一胸を張って『大丈夫』と言える魔法だ。

教官は顔についたハムサンドの欠片を拭きつつ、この後の説明をしてくれた。今日の授業は二クラス合同の実習であり、生徒数は80人を超える。教官は始めの説明はやるが、その後は各生徒の評価も付けていかなくてはならないので、その場で手取り足取りわたしがアドバイスしていつてやって欲しい、とのことだった。授業後は教官とともに実習場の結界を張り直してお仕事終了、と。

日が長くなってきたこの頃だとしても、明るいうちに帰れるのか微妙なところなのではないか。たぶんわたし以外のメンバーは今日もローザのお宅でくつちゃべってるだろうけど、終る頃にはみんなないだろうな。わたしは改めて諦めの溜息をついた。

「本日は前々から発表してあった通り、攻撃系呪文の基本といえる『エネルギーボルト』を実際にやってもらう」

広々とした実習場にメザリ才教官の声が響き渡る。わたしの前には年下の少年少女の緊張した顔が並んでいた。

「皆にも先ほどから見えていると思うがあそこに」

と言って教官が指差すのは大きな二重丸が描かれた的だ。全部で五つ等間隔で並んでいる。特殊な術法を掛けられたもので少々乱暴に扱ったところで傷一つつかない。特に魔法に対して耐性が高いので的の役割としては充分なものだ。

「あの的に向かって呪文を放ってもらう。呪文がキチンと、素早く唱えられるか、的にちゃんと当たるか、出現した光弾の大きさはどのくらいか、これらが評価の対象だからな。……まずは私が手本を見せるのでよく見ているように」

教官は一歩前に出ると胸の前に手を突き出す。

「万物のマナよ」

唱えているのは教科書通りの組み立てのエネルギーボルト。この程度の呪文なら詠唱を省略、手印も略するのが普通だが、今は駆け出し魔法使いたちへの手本である。

「エネルギーボルト」

教官の声に反応した魔力の塊が、胸の前に出現した。光の束のようなそれは的に向かって飛んでいく。パアン！と景気のいい音をたてて、エネルギーボルトの呪文は的に衝撃を与えた。

『おおおー』

自然と生徒たちから拍手が起きる。それに応えるように教官は軽くお辞儀した。

「この呪文は一番簡単な攻撃呪文だが、一番各個人の魔力の大きさが反映される呪文でもある。魔力の鍛練の成果を見なければこの呪文を唱えてみるといいぞ。……さて、彼女だが」

教官はそう言うとなわたしの肩に手を置いた。

「彼女は上級生の中でもトップクラスの魔力がある。これは鍛練の

ものというより、生まれもっている才能だ。しかしそれゆえにコン
トロールに苦勞しているのは否定できない。彼女程の魔術師がこの
呪文を唱えるとどうなるのかも、見せておこうと思う」

わたしと教官の間に緊張が走る。前もって聞いていたとはいえ、「
絶対に失敗してはいけない」というプレッシャーがのしかかった。
そんな事情は知らない下級生たちは目を輝かせてこちらを見ている。
たしかに今の説明じゃ「すげー才能の魔法使いなんだぜ」という意
味に捉えかねないではないか。多分だがメザリオ教官もフォーの
つもりで説明しだしたはいいが、途中で何言ってるかわかんなくな
ったんじゃないだろうか。

「……大丈夫だ、生徒の方向に暴走させる、なんてことがない限り
は平気だ。的に当ててくれさえすればいい」

教官が小声で言うてくるが、彼の緊張も伝わってきた。教官にオッ
ケーサインを送るとわたしは的の直線上に進み出る。深呼吸一つ、
わたしはエネルギーボルトの呪文を唱えはじめた。

万物のマナよ　我が力を餌食とし　我が呼び声に応えよ　我
が前に光もたらし破壊を与えよ

「エネルギーボルト！」

腕一抱え程あるうかという巨大なエネルギーの塊が現れる。大きさ
はともかく、形が波うつていて見るからに不安定だ。やばいかも、
とは思いつつヤケクソ気味に撃ってみることにした。わたしが指を
的に向けると、それに反応してのへと走っていく。

バアン！だか、ガッン！だか、何ともいえないド派手な音を撒き散
らし、わたしの放ったエネルギーボルトは的を粉碎した。過剰なエ
ネルギーが暴走したからかマナの引き起こす風が演習場に巻き起こ
る。下級生から「ひっ！」という悲鳴が漏れた。

その後の沈黙とともに、わたしの背中にどつと流れる嫌な汗。

「……このように、的は一つ減ったが全員最低一回は出来るように

きちんと列を作りなさい」

教官の冷静な声に下級生たちは焦りながらもばらけていった。わたしだけには見えていた。メザリオ教官の額に流れる大粒の汗が。

「そう考え込むな。お前のお陰でふざける生徒もいなかったしな、今日は」

メザリオ教官は実習場の内部を周りながら声をかけてきた。

「恐怖政治と一緒にやないですか」

わたしは教官と同じく実習場の壁を指でなぞりながら答える。二人の指先から光が漏れ、それが壁にルーン文字を描いていく。結界の張り直しである。

「そう言うな。また今度ハムサンド奢ってやる」

「スペシャルシーフードサンドの方がいいです」

わたしは購買で一番高いサンドイッチの名前をあげた。教官は少しの沈黙ののち、

「そうだな。今日みたいな日に当番に当たった不運も含めて、奢ってやる」

と言って頷く。こんな教官が見れたことに、今日一日の運勢はプラスマイナスゼロにしてもいいかな、とわたしは考えていた。

「うはあ、やっぱり暗くなってるわ」

わたしは実習場を出て、目の前にある空の色に溜息を漏らす。夕方の赤を通り越して藍色に染まっている。

「鍵閉めなんかは私がやっておくから、お前は早く帰りなさい」

「はい」

メザリ才教官の言葉にわたしは返事し、校舎へと戻ることにする。

途中、空き教室で見たことのある顔の集団が輪になっているのを見つけた。ソーサークラスの子たちだ。声を掛けようかと思ったが、何やら真剣な雰囲気言葉に飲み込む。泣いているらしき子がいるじゃないか。いじめ？と一瞬眉をひそめるがそんな険悪な空気では無い。彼女たちの会話が微かに廊下に漏れてきているのを少し聞き耳立てさせてもらおう。

「受け取ってもらえなかったってこと？」

「ちがう。なんか今の時間になっても他の人と集団でいて声掛けれなかったの」

「何よそれえ、声かけてみたらよかったじゃない。ちょっと良いですとか言ってさあ」

「無理よお、だって話したこともないのに」

「でもさ、今日みたいな日になにも居残り練習なんてすることないのね」

「やっぱりわかっててそうしてるんじゃない？ いっぱい貰えそうで面倒だとか」

「だよねえ、面倒でしょう。だって逆恨みされても嫌じゃん。やっぱり同じパーティーの人に渡しときなよ」

「そんな」

泣き顔の子の声を最後にわたしはその場をそっと離れる。なるほど、そういうかわし方をする相手もいるわけか。やっぱり貰う側として

も気使うようなイベント、必要ないよなあ。わたしは無意識にポケ
ットに突っ込んであったタリスマンを手で触り、放した。

自分の教室の前までくると帰り支度のためにロッカーを開ける。

「……おいおい」

自分の鞆の上にあったのは、見覚えのある月のエンブレムのタリス
マン。しかも数個。

「まさか代わりに渡しておけ、ってことじゃないわよね」

もしくはわたしに対する無言のプレッシャーか。『抜け駆けは許さ
ない』的なね。……それはないか。なんにせよ、こういうやり方は
良くない！とわたしはタリスマンを掴むと、教室に入る。誰もいな
いがらんとした部屋にわたしが教壇にタリスマンを置く音が響いた。
「……丸見えは流石に気が引けるわね」

武士の情けだ。わたしは教壇の引き出しにタリスマンを移した。こ
こなら教官が必ず目を通すはずだ。教官から本人に返却してくれる
だろう。

校舎を出たところで出会った集団に、わたしは息を呑んだ。

「あれれー、リジアちゃんじゃん」

わざとらしい声をあげるのはヘクターの肩を抱くクリスピーアン。な
んだか二人ともぼろぼろ、というか戦場から引き揚げる兵士のような
だ。クリスピーアンの傍らにはキーラまでいる。ふふ、と笑いながら
わたしに手を振った。

「リジア、こんな時間までどうしたの？」

ヘクターがこちらに近づいてきた。

「今日は教官のアシスタントに入る当番だったのよ。こっちこそび
っくりした。どうしたの？」

「なんかあいつがいきなり『ひさびさに居残り稽古しようぜ』とか
言い出したから、こんな時間まで付き合わされてた。キーラは……
リジアは知ってるか。同じクラスだもんね」

そう言ってヘクターが指差す先にはにこにここと明らかに『良い事し
たでしょ？』と言いたげな二人。

「俺、荷物取ってくるから待っててくれる？」

ヘクターに言われ、わたしはこくこくと頷いた。ヘクターが校舎に消えていったから、わたしは残った二人に詰め寄る。

「……何やってんのよ」

「あれ、喜ぶと思ったのに」

クリスピアノが頬を掻いた。

「わざとらしいわよ！大体キーラまでなんでいるのよ」

「知らないの？個人練習で真剣を扱う場合は回復魔法が使える者が立ち会うこと、って決まり」

キーラはうふふ、と笑う。

「あ、そうそう、お陰で俺も良い事あったんだよねー」

クリスピアノはそう言つと、上着のポケットから意外な物を取り出した。

「じゃーん」

「あつ、それって……」

わたしは出されたそれを指差し呟く。月のエンブレムのタリスマン。見た目はみんな一緒なのでわからないが、たぶんキーラの作ったものだ。

「協力してくれたから、お礼よ」

キーラは髪をかきあげた。

「やっぱりわざとじゃないのよ！」

わたしが抗議するも二人はしれつとしたままだ。

「感謝してよね。稽古の間、何人の殺気を感じたかわからないわよ」

「睨んでたねー、早くどっか行け！」って空気バシバシ感じた。

俺ら相当なお邪魔虫だったんだねー」

それってやっぱりヘクターにエンブレムを渡す機会を窺っていた子たちってことだろうか。二人の好意とは裏腹に、わたしが恨まれる率が上がったような気がするのだが……。

「あ、来たよ」

クリスピアノがわたしの背中側を指差す。振り返ると帰り支度を終

えたヘクターが立っていた。

「じゃあ俺は帰るからな。……あ、お前剣受けたあと右に逃げるクセ直しとけよ」

ヘクターはそう言うとなたしを手招きする。

「ちえー、気づいてたのにそこ突いてこないなんて嫌味な奴」

クリスピーアンは顔をしかめた。キーラがわたしを呼び止める。

「……ここまでして渡さなかったら、分かってるわね？」

小声で囁かれ、わたしは背筋が寒くなる。こ、こわい女だ。

学園の裏口すぐにあるバス停にくとベンチに座る。時刻表を見ていたヘクターが戻ってきた。

「大分空きそう。こんな時間だしね」

そう言うとなたしの隣りに腰掛けた。なんだか申し訳ない。彼は知らないが、遅くなったのはわたしのせいといえそうだ。ふいに先ほどのキーラの声が蘇る。

『渡さなかったら……』

うおおお、わかってるよ！

「あのさ！」

わたしが自分でも驚く大声で言うと、ヘクターも肩をびくんとさせた。

「なに、なに？」

顔を覗き込まれ、綺麗なグレイの瞳と目が合う。いやん、かつこい。わたしは顔を赤くする。

「……どうかした？」

中々続きが出て来ないわたしにヘクターが突っ込んできたことによやく我に返る。いかんいかん。引っ張るほど緊張するものだよな、こういうものは。さらっと渡せばいいんだよ！もう一人の自分がしきりに励ますが、すんなり言葉が出て来ない。

「そ、そ、そそソーサラークラスでさ、先週どんな授業があった

「か知ってる！？」

「えっ、……ご、ごめん。全然わからない」

当たり前な質問にわざわざ謝ってくれるヘクターにますます自己嫌悪に陥るわたし。

「だよねー。知らないよねー」

乾いた笑いで誤魔化する。

「きよ、今日は？何か変わったことなかった？」

わたしが聞くとヘクターは腕を組む。

「……特にない、かな。あ、帰りにクリスに無理矢理、修練場連れてかれた。リジアが帰っちゃうかな、と思ってちよっとむかついたかな」

「えっ本当！？」

思わぬ彼の言葉にわたしは嬉しさで舞い上がる。

「やー、だって少しでももし待っててもらったら悪いじゃん」

そっちかよ、とわたしは少し舌打ちした。というか、この流れと雰囲気からしてもしかして、もしかしてだけどヘクターって全然タリスマンの事知らないんじゃないの？

わたしは思い切ってポケットからタリスマンを取り出した。

「おー、綺麗だね」

わたしが彼の目の前にぶら下げたタリスマンを見て、ヘクターは感心したように呟いた。

「見ていい？」

わたしは頷いて彼の手に渡す。

「こういうのってタリスマンっていうんだっけ」

しげしげと眺めながら聞かれ、わたしはこくりと肯定する。

「うん。……わたしが作ったの」

「え！すごいじゃん」

ヘクターはまるで壊れ物を扱うかのようにタリスマンを持ち直す。

「いや、材料も作り方も教官の指示通りにしただけだよ。……でも最後の仕上げに魔力を込めるのは、個人差が出るんだ」

大昔の魔法使いが、恋人の無事を祈ってこめた愛の呪文。どうか生きて戻ってきて欲しい、と込めた願い。このタリスマンにはそういうものが込められているからこそ、皆が騒ぐのだ。

「こ、これ……」

貰って欲しい、と言おうとした時だった。ベンチの背もたれ、わたしとヘクターの間から覗いた頭がじー、っとタリスマンを見つめている。

「い、イルヴァ……」

ウェーブした黒髪に人形のような大きな瞳の顔、嫌になるほど知っている人物がそこにいた。彼女は無言でタリスマンを見つめ続けている。

「……欲しいの？」

わたしが聞くとイルヴァはこくこくと頷く。

「だって皆貰ってましたもん。同じパーティーのソーサリーからのタリスマンを貰うのが、ファイターとしてのステータスなんです！」

イルヴァはじょじょに興奮した声を上げると「欲しい」を連発した。ああ……、どうすれば。つかなんてここにいます！？突っ込もうとしたとき、イルヴァに逆に詰め寄せられた。

「イルヴァはリジアのナイトじゃないんですか！？」

アメジストのような瞳で真っ直ぐ見られ、わたしはたじたじとなる。イルヴァはこのタリスマンの意味を知っているようだし、彼女だっで立派なファイターだ。今日はイルヴァにあげておいてもいいかな、そんな風に思った時だった。

「イルヴァ！」

夜空にきらりと光る物体が、わたしたちの上空を弧を描いて飛んでいく。メダル型のそれを確認できた瞬間、イルヴァが飛んだ。そのまま、
ぱくっ

口でくわえる。く、口で取るか、普通。着地したイルヴァの口もと

を見るとメダル型のタリスマン。金の鎖が付いていて見るからにお高そう。

「なんれふか？こえ？」

「よくわからない物を口に入れるもんじゃないわよ」

「もごもごしゃべるイルヴァにわたしは注意した。」

「私が昔、造ったタリスマンだ」

声のした方向に振り返る。

「アルフレート……」

「身体のポテンシャルを底上げする呪文が封じてある。常勝の將軍に贈った品だぞ？彼が老衰で死んだんで私のところに戻ってきたがイルヴァはしげしげとタリスマンを眺める。

「くれるんですか？」

「タリスマンは異性から貰うからこそ、意味があるんじゃないか」さっきの話しと噛み合っていない気がするが、イルヴァはにぱー、と笑った。

「そうかもしれないですね。アルフレートが造ったのならイルヴァも嬉しいです」

満足気に頷くイルヴァ。

「……あげちゃっていいの？そんな大層なもの」

わたしは小声でアルフレートに尋ねる。

「効果は本当だが、逸話は今作った。お前が気を利かせて二人分用意しないのが悪いんだろ？」

彼はそう言つと「借りは大きいからな」と睨んできた。

「じゃあそつちはヘクターさんにあげます」

イルヴァに言われ、ヘクターが困惑顔でこちらを見てくる。

「貰ってくれる？」

自分としてはさざりと言つたつもりだが、やっぱり声は上擦り顔はにやけるのだった。

帰りのバスの中、ヘクターがタリスマンを眺めている。

「聖騎士マクシミリアンのタリスマン、か……」

彼の呟きに一瞬、頭が真っ白になった。え、え？なんでその名前が出てくるの？

「知ってたの!？」

顔から火が出そうだ。

「さあ？」

ヘクターは惚けたように言うと、腰のベルトにタリスマンを括り付ける。わたしは彼がどの程度まで知っているのか詰問したくなかったが、

「ありがとう」

ヘクターの一言でショートした頭を抱え、座席に沈み込んだ。

横目でヘクターを見ると、いつもと変わらない柔らかい微笑みがある。なんて気持ちの読めない人だろう。少し恨めしく思った。窓の外にはタリスマンと同じ三日月が浮かんでいる。

「……明日、スペシャルシーフードサンド忘れないようにしなきゃ

……」

わたしは今だ熱を引かない頬を押さえ、呟いた。

f i n

「うわ、すごいなコレ。いじめ？」

フロロが目の前にいる少女に話しかけると、少女は不機嫌顔で振り向いた。

「まーたこんな所に来て。ここは盗賊が来るような所じゃないわよ」「盗賊だからこそ、神出鬼没なんだよ。……それよりリジアいじめられてんの？」

ソーサラークラスのある廊下、フロロはリジアが荷物を仕舞っているロッカーの中を指差す。彼女のロッカーは内部がひどい落書きだらけだ。筆跡を隠す為なのかみみずが這ったような文字で解読に苦しむが、あまり良い内容ではないことは確かだ。

「これがいじめだっていうならそうなんじゃない？ただ犯人も狡賢いもんで他人に目が触れそうな場所は何もないのよねー。靴箱とか。普段の生活上も何も無いわよ。わかりやすく体当たりされたり、とかあった方が反撃しがいがあるのにな」

「でも、ロッカーへこんでるぜ？」

フロロはそう言うところの扉に出来ているクレーターを指でなぞった。

「ああ、それは腹が立ったんで自分で蹴った跡よ」

「……そう」

小柄な女の子のわりに気が強い子だ。ただ腹が立つ、ということとは精神衛生上良いわけでは無いだろう。そうなる仲間との事なので少し気になる。

「ちょっと探ってみるか……」

「え？何か言った？」

フロロの呟きにリジアが反応するが、フロロは首を振る。思いついたら即行動。モロ口族には忍耐の文字はない。フロロは何か語りかけていたリジアを無視して走り出した。

「何なのよー！」

後ろからリジアの抗議が聞こえるが、彼女の為に動いてやるのだ。
このくらい許されるだろう。

フロロが所属するシーフクラスがある技術師科の校舎に入る。他の校舎に比べて薄暗いのは気のせいかな。

「フロロー、こっちこっち」

フロロが名前を呼ばれた方向に目をやると、窓の外から手を振る人物がいる。同じモロロ族のパウロだ。栗色の髪に先が黒くなった耳がピコピコと揺れている。

「お、もしかして隠し通路開通した？」

窓枠を飛び越え外へ体を投げ出しながらフロロが尋ねるとパウロは大きく頷いた。

「したしたー。ちよろいちよろい」

耳と同じ先だけ黒い尻尾がゆらりと揺れ、校舎の外壁を指す。軒下の様子を見る為の鉄柵だ。フロロはそれを慣れた手つきで外すと中に滑り込んだ。

「皆集まってるの？」

暗い軒下を腰をかがめ素早く移動しながらフロロが尋ねる。

「集まってるー。カロロが家具を運びこんだよ」

パウロはそう答えながらくすくすと笑う。二人はある程度まで来ると本来は床がある頭の上の板をこんこんと叩いた。一瞬の沈黙の後、上から光が漏れる。床板を外したモロロ族の顔が覗いた。

「きたー、フロロきたよー」

黒髪に真っ白な耳のカロロが笑顔で二人を引っ張り上げてくれる。

「おー、すっかり出来上がってるじゃん」

フロロは室内を見回し、感心した。ここは使われなくなった教室の準備室。廊下から来るには空き教室を通って、更に準備室の鍵を開けなくてはならない。それを学園のモロロ族のメンバーが床下から

開通させて隠し砦にしたのだ。家具もモロ口族のサイズの物を揃えてある。すでにソファには赤毛のニウロが横になっていた。

「人数揃ってるところで頼みがあるんだけどさ」

フロロが言つとニウロが起き上がり、カロロとパウロは目を輝かせる。

「なにになになに？」

興奮するカロロをフロロはなだめた。

「俺の仲間の中でちよつと困ったことになってる奴がいるんだよね。それをちよつと探ってほしい」

「仲間ってあの、面白い奴らか」

ニウロがクリーム色の尻尾をぴんと伸ばす。

「リジアってソーサラーの女の子だよ」

フロロは名前を出した。

「知ってるぞ、先生に怒られてたぞ」

「ファイアーボールで壁に大穴開けたんだよね」

「からかったら怒ったよ。面白かった」

口々に言う彼らをフロロは再び手で制す。

「リジアのロッカーに落書きする犯人を捕まえたいんだ」

「落書き？ いじめだいじめ」

カロロが眉を釣り上げた。

「俺もそう思ったんだけど、どうも変なんだよな」

フロロが言つと三人は首を傾げる。

「なんで？」

パウロが身を乗り出してきた。フロロはゆっくり頷き、三人の顔を見回す。

「いじめにしちゃ随分卑屈なんだよな。落書きも絶対にリジアの目にしか入らないロッカーの『中』だけだし」

「面白そうなことしてるな」

ふいにかけられた声に四人の尻尾は固く伸び、一斉に戸口の方へ振り返った。準備室の扉を開けてゆっくりとした足どりで入ってくる

人物にフロロは溜息をつく。

「脅かすなよ、アル」

フロロが睨むとアルフレートはにやりと笑った。

「アルだ！」

「アルが来たよ！」

「アル」

跳び回るパウロ達。

「ええい！跳ぶな踊るな飛びつくな！」

アルフレートは太股のカロロを引きはがす。その様子をただ見ているフロロにアルフレートは言った。

「お前がモロロ族の中じゃ二枚目キャラって本当だったんだな……」

「まあね」

フロロは素っ気なく受け流す。

「アル！どうやって入って来たんだよ」

カロロが腰に手を当て怒ったように拗ねた。

「世の中には鍵開けの呪文が……って、そんなことはどうでもいいじゃないか。何か興味深い話しが聞こえてきたんでね」

「リジアの話しか？」

アルフレートの言葉にパウロが反応する。

「そう、本人は犯人探しも諦めているようだが、私としては謎が転がっている状況を放置するのも気持ちが悪い。解決しないことには学園の風紀も乱れるではないか」

偉そうなことを言っているが暇なのだろう。フロロは「素直じゃないなあ」と呟いた。

「まず、事の始まりから考えてみるとしよう」

アルフレートのすつと伸ばした人差し指をフロロたちは見つめた。

「リジアのロッカーに落書きが始まったのはいつだ？」

「間違いなくあの兄ちゃんが俺らの仲間に入った時からだね」

指を当てられたフロロが答えるとニウロが質問する。

「兄ちゃん？」

「ファイターのヘクターだよ」

カロロが答えた。

「あの兄ちゃんか。あの兄ちゃん、優しいぞ」

「知っているのか、ニウロ」

アルフレートが意外だというように聞く。

「フロロの友達だつて言つたら飴くれた」

「へえ……」

ニウロの答えにフロロはヘクターが飴を持ち歩いていることが意外だと思った。

「そう、彼は誰に対しても優しい男だ。あんなんじゃ人生損するんじゃないかと思うほど。そして見て分かる通りの色男だ」

「アルもカッコイイよ」

パウロが茶化す。が、アルフレートは面白くなさそうに即答する。

「そんなことは知っている。……話を戻そう。そんなわけで彼はモテる男だ。しかもファイターとしての腕も良い。当然のように他のパーティーからの勧誘もかなりの数あつたようだ」

「でも俺らのところに来たんだよな」

フロロが言つとアルフレートは頷いた。

「なぜかは知らないがね。結果、彼を取られたことになった連中は気に食わなかつただろうな。そして落書きが始まる」

アルフレートは部屋をゆつくりと歩き出す。自分の発言に注目するようにな、という探偵の振る舞いのように。

「ここで第一の疑問。なぜ落書きはリジアだけに絞られたものなのか？」

アルフレートの疑問にフロロは手を挙げ答えた。

「リジアが女の子だからだろ？優秀な人間をメンバーに誘えなかつた恨みよりも恋敵だからだ」

「その通り。犯人は女であると私も思っている。流石我が友」

「俺は？」

「俺はー？」

「僕は？」

「お前らなんて友達じゃないっ」

手を挙げるカロロたちを睨みつけるアルフレート。

「そして第二の疑問、なぜイルヴァには何も被害がないのか？」

「変態だから？」

フロロの即答にアルフレートは一瞬の沈黙の後、首を振る。

「それもあるが……、私が推したいのは二人のクラスの違いだ。イルヴァはファイタークラス、リジアはソーサラークラス。私は犯人は少なくとも魔術師クラスの人間だと思う」

「なんでー？」

カロロがフロロに尋ねる。フロロは腕組みを解くと説明を始めた。

「戦士系クラスと魔術師系クラスは結構な隔たりがあるんだよ。戦士系は男が多いし魔術師系は女が多い。自分と同じ立場の奴が上手くいっているから恨みに思っている、って言いたいんだろ？」

アルフレートは頷いた。

「で？それでどうするの？」

パウロは明らかに「飽きた」と言っている顔だ。

「推測はそこまでなんでね。ここからがお前たちの仕事だ」

アルフレートの言葉にフロロは呆れた声で答える。

「張り込むんだろ？」

元からそのつもりだったのだ。更にいえばアルフレートの推測など、フロロが既に考えていたことだ。全くの時間の無駄じゃないか……。講釈好きな仲間の顔を、フロロは睨みつけた。

「……ほんとに来るの？」

「……来るとすればこのぐらいの時間だろうからね。もう少しすれば見回りの教官が回ってくる時間だ」

フロロはパウロからの質問に小声で答えた。

時間は夕方。ほとんどの生徒は帰っている時間で、学園内も静かなものだ。もう少しすると居残りも不可とされる時間になるので、帰宅を促す為に見回りの教官が校舎を巡回するのだ。犯人が来るとすればその合間のこの時間のはずだった。

「俺、寝そう……」

パウロが欠伸を噛み殺した。今二人がいるのはリジアの教室の前にあるロッカー、その上に木箱を置いて中に入って張り込みをしている。モロロ族は暗くて狭いところが好きな性分だ。なんとも落ち着く雰囲気、つい眠気が襲ってくるのも仕方ない。

「……ところでさあ、フロロは『いじめにしちや随分卑屈』とか言ってたけど、どうしてそう思ったの？」

眠気を堪える為か、パウロは話しを続ける。

「……いじめにはしたくない、って感じがするってところかな？他に他人にも見られてしまうような場所だと『いじめ』になっちゃうだろ？靴箱なんかだと蓋がないし。リジアは他に日常生活に支障はない、って言い切ったんだ。要するに犯人は嫌がらせじゃなく、リジアに分かって欲しいんだろ」

「ああ……確かに卑屈……」

パウロは理解出来ない、という風に首を振った。その時、誰かが廊下を歩いてくる音がする。二人は体を固くした。ゆっくり、近づいてくる足音。多分辺りを伺いながら歩いているのだらう。フロロは設置した箱に覗き穴を用意しなかったことに舌打ちした。パウロがごくり、と喉を鳴らす。きい、とロッカーを開けるらしき音がした

のだ。

「今だ！」

フロロの掛け声と共に、二人は箱から飛び出した。

「ちゃりん！」

よく分からない擬音を口にしながらパウロは床に着地する。フロロはロッカーを開けて身構える人物を睨みつけた。素早くロッカーの位置を確認する。間違いない、リジアのロッカーだ。が、

「見るからに怪しいぞー」

パウロが言うのも無理ない。頭からすっぽりローブを羽織っているのだ。顔が伺えない。

「やいやい、落書きしてるのはお前だろ！」

フロロが指を突き付けると、相手は肯定としか思えない行動にでる。逃げ出したのだ。

「あつ逃げるよ！」

「かけつこで俺らに勝てるわけないだろー！」

猫を思わせるしなやかな動きで二人は後を追いつ出した。フロロの言う通り、あつという間に犯人との距離は縮まっていた。

「てやーっ」

「とあーっ」

フロロ、パウロの二人は犯人の体に飛び付き、しがみついた。が、
「くっ……！」

犯人も抵抗し、振り払おうと体を振り回す。

「あたっ」

結果、いとも簡単に振り落とされる二人。犯人は再び逃げ出し、二人は打ち付けた尻を摩った。

「……足が速いだけじゃ駄目だな。非力すぎるだろう、おまえら」

「……見てたなら手助けしろよ、アル」

「大丈夫だ、今捕まる」

アルフレートがそう言うのにやりと笑った瞬間、

「きやー！」

女の声で悲鳴が上がった。

「何よこれえ……！」

漁師網に似たボーラの中でもがいている少女は涙声を上げている。両サイドにいるカロロと二ウロが網の縛り縄を掴んでいるところを見ると二人が罨を張ったのだろう。

「もういいだろう。解いてやれ」

アルフレートが言つとカロロが網の中に手を突っ込み、網の一部分をスルツと引っ張る。すると嘘のように綺麗に少女から網は抜け落ちた。網が落ちるのと同時に少女の顔を覆っていたローブが肩に落ちる。

「……お前は！？」

アルフレートが声を上げた。フロロは少女の顔をまじまじと見た。栗色の髪にどちらかというと気の弱そうな顔、細身の体をした少女とアルフレートを交互に見ながらフロロは尋ねる。

「何、知ってる顔？」

「いや、知らん。こういうノリにするべきかと思ったからだ」

涼しい顔のエルフに四人のモロロ族は深い溜息を漏らした。その様子をおろおろと見ていた少女が口を開く。

「……な、何なのよ、あなたたち」

「何、とは随分だな。態度によつては穩便に済ましてやろうと思つたのに」

「悪役みたいな台詞だな、アル」

そうフロロが突っ込んでもアルフレートは顔色一つ変えない。薄ら笑いのアルフレートに少女が少し怯えたようにきよろきよろと始めた。

「で、なんでリジアのロッカーに落書きなんてしてたわけ？」

フロロが尋ねると少女は首を振る。

「し、知らないわよ。ちよつとロッカーの位置を間違えたただけでな

んでこんなことされるのよ。教官に言うわよ！」

「ほほーう、惚ける方向に出たか。……おい女、『デイドリーム・コンフューズ』という呪文は知っているか？」

アルフレートが顔を近付けると少女の顔が歪んだ。

「ななな、何、それ？」

「相手を完全なる傀儡とする呪文だ。もぬけの殻となるばかりか、自白も思い通りになる。……思い通りとは少し違うか。なんせ聞いていない深層心理までぼろぼろと喋るようにな……」

「わわわわかったわよ！言うわよお！」

涙目で手を振り、アルフレートから距離を取る少女。アルフレートは再びニヤリと笑う。

「じゃあもう一回確認するけど、アンタが落書きしてたんだな？」
フロロが詰め寄ると渋々といった様子で少女は首を縦に振った。

「ごめんなさい……」

謝って済む問題ではないが一応しおらしい様子には見える。フロロは深く息を吐き出した。

「だって……だってくやしいじゃない。わたし、ずっと彼のこと追いかけてきたのに」

少女はそう言うのとボロボロと泣き出す。アルフレートとフロロは顔を見合わせ、他のモロロ族メンバーは慌てたように騒ぎだした。

「泣いた！」

「泣いたよ！」

「追いかけてきたって誰を！？」

カロロの質問をフロロが引き継ぐ。

「ヘクターの兄ちゃんのこと？」

少女はコクリと頷いた。

少女の名はカーチャ。ソーサークラスでも目立たない存在らしい。生まれた時からもの静かで影薄く、成績も中の中。フロロはリジア

から一度も名前を聞いた事のないことを納得した。顔もかわいくないと言いたい。しかし美人かと言われるれば首を傾げるところだ。よくするに特徴という特徴が無い。目を引く要素もマイナスになる要素も無いのだ。外見どころか中身までそうなのだとしたら数十人という数が集まる教室で目立つのは至難の技だろう。もしかしたらリジアに名前を聞いても少女の顔を思い出すのに時間がかかるかもしれない。

「追いかけてって……、ストーカーでもしてたか？」

ニウロが悪意無い顔でさらりと聞くとカーチャは顔を赤くした。

「……否定しづらいわ。だってサントリナから追いかけて来たんだもの」

「サントリナ？ローラスの隣りの国のサントリナのことか？」

アルフレートがぼかんとした顔で言うのでフロロが頷く。

「兄ちゃんはサントリナ出身なんだよ。この学園には途中から移ってきたんだ。ああ、アルも同じ時期に入ってきたんじゃない？だから知らなかったのかもね」

「よく知ってるな」

アルフレートは素直に感心する。

「わたしも元々はサントリナにいたの……。向こうの学園に入学して、彼に出会って」

「惚れちゃったんだ？」

カロロがカーチャの顔を覗き込む。

「お前らうるさいからちよっと黙ってる」

アルフレートが言うのとカロロ、ニウロ、パウロは肩をすくめて笑った。

「向こうの学園では一期生は戦士も魔法使いも同じクラスになるの。わたしと彼も同じクラスだったのよ。彼、向こうの学園でも同じように目立っていて、……ううん、ここで以上に目立ってたと思う。もっと天真爛漫で、子供だったからだと思うけど。いつも周りに人が集まるようなタイプで、でも威張る感じはなくて、みんなにやさ

しくて」

「今でもやさしいぜ？」

フロロが言くとカーチャは首を振る。

「この学園の人はみんな知らないのよ。彼がどうしてああいう性格になったのか。……向こうの学園の人はみんな知ってるから彼が引越すことになって、みんな泣いてた。彼、ヘクターって両親いないのね。その都合で途中でローラスに越すことになって……」

「可哀想って？」

アルフレートは心底呆れた様子だ。それを見てカーチャは増々顔を赤くした。再び涙が目に浮かんでくる。

「ごめんなさいごめんなさい……。馬鹿だよ」

「馬鹿っていうか……」

フロロも力なく答える。馬鹿というよりは呆れて何も言えない。

「そんな理由は無理矢理自分が兄ちゃんを追いかける都合のいい理由付けに使ってるだけだろ？あんな一人が追いかけてきて、兄ちゃんの生活に何がプラスになるんだよ」

泣いているカーチャにイライラして、フロロはついキツくあたってしまった。

「ほんとだよ。何も意味ないよね。……彼、わたしのこと覚えてもいなかったし」

わつと泣き出したカーチャの言葉にみんなが顔を見合わせる。

「一年だといえ同じクラスになったのに？」

「まあわかる気がするけど」

「なんで覚えてないってわかったの？」

モロ口族3人が矢継ぎ早に言葉をぶつける。カーチャは少し顔上げると答えず。

「……こつちに来て、初めて顔を合わせた時に『すいません、教室どこですか？』って、聞かれたのよー！」

しゃくり上げながら言った少女の言葉にアルフレートがぶほと吹き出した。フロロが腕を突いて抗議する。

「まあ、それは可哀想だけど、でもリジアにあたって良い理由にはならないだろ？」

フロロがなだめるとカーチャは何度も頷いた。

「ほんとにごめんなさい。リジアは、本人は気にしてるみたいだけど、色んな意味ですごく目立っていて、しょっちゅう魔法で壁を壊したりするけど、それって魔力が高いつてことだし、顔も可愛いのに、変な格好してて目立つし、……ごめんなさい、上手く言えなくてごめんなさい」

「……ようするに羨ましかつたってことだろ？」

フロロは舌打ちを堪えて言った。

「うん……いつのまにかヘクターと仲良くなってるし、くやしかった」

「素直に悔しいという言葉が出てきたことは一歩前進したということだ。謝罪も含めて、本人に言うんだな」

アルフレートはやれやれといった様子で立ち上がった。

「といわけで、犯人捕まったけど」

翌日の朝、フロロはカーチャの手を取りリジアに説明した。

「本当にごめんなさい」

「え、あ、そ、そうなんだ…… ややややだなくも、言ってくれば良かったのに。良くないか？…… まあもう止めてくれればいいよ」

どうも煮え切らない様子にフロロはリジアの腕を引き、耳打ちする。

「リジア、カーチャのこと知らないんだろ」

「……ごめん。今初めて見たって言うてもいい」

「ひでーな」

「わたし、結構顔覚えるの得意なはずんだけどな……」

リジアは頬を掻いた。ふと、思い立ったようにロッカーを開ける。

「『どれ』を書いてた人？」

リジアの言葉にフロロは目を丸くする。一人じゃないってこと、そしてリジアはそれをわかつているということだ。

「これ、です。ごめんなさい……」

「ああ、この血文字で『呪』の人だったのね。これが一番病ていや、深刻そうだったから、わかってよかったわ」

「他のは誰だかわからないです……ごめんなさいごめんなさい」

「いや、いいからいいから。ところでコレ、どうやって書いてたの？まさか体切ったりしてないわよね」

リジアがそつとカーチャのローブの袖を触った時だった。

「リジア、フロロ」

廊下を歩きながら声をかけてきた人物に三人は一瞬、顔を強張らせた。なんてタイミング、全員がそう思っているに違いない。

「おはよ。……どうしたの？」

ヘクターが軽くあげた手を止めて三人の顔を眺める。その時、

「はううー!!」

カーチャが奇声と共に逃げ出した。フロロは呆気にとられた後、慌てて後を追う。

「は、早いな」

そう呟いてしまうほど、カーチャの逃げ足は昨日よりも随分早い。曲がり角を何回曲がっただろう。ようやく追いついたフロロはカーチャの背中に飛び乗った。

「どうしたんだよー! リジアはヘクターに告げ口したりする奴じゃないぜ!？」

「ちちちがうの……合わせる顔がないのよー!!」

「兄ちゃんに!?! いいから止まってくれよー!」

あんたどうせ顔覚えられてないじゃん、と思いつつカーチャの顔をぐい、と掴む。すると、ぬるっと嫌な感触が手のひらに伝わってきた。

「……げっ」

自らの手のひらを見て、フロロは青ざめる。真っ赤じゃないか、これは……血？

その頃によくカーチャが足を止める。はあはあと肩で息をするカーチャにフロロは問いかけた。

「な、何これ?……血?」

「……誰にも言わないで」

「い、いや言わないけど、大丈夫なの?」

カーチャがぐるりと振り向き、フロロは思わず「ひっ!」と悲鳴を上げた。顔が真っ赤だ。頬を染める、というレベルではない。文字通り真っ赤なのだ。

「……これが彼と仲良く出来ない理由よ。わたしは絶対に彼と話すことが出来ないの」

ぼたぼたと廊下に染みをつくる元凶を、フロロは恐る恐る凝視する。カーチャの顔の中央、鼻から垂れるソレを見つけた。

「鼻血、かよ……」

こくん、とカーチャが頷く。

「顔を見たり声を聞いたりするだけでも『予兆』が来るのよ……。
目が合ったら最後、このぐらいの惨事になるわ」

ふっと苦笑しながら目を伏せるカーチャを見て、フロロは掛ける言葉
を失った。

「悲劇、だね。ソレは……」

隠し砦のソファでカロロが呟く声にフロロは頷いた。

「まあ笑い堪えるの大変だったけどな」

フロロは天井を仰ぎ見る。

「でも、フロロがここに留まってる理由がわかったよ、俺は」

ニウロが棒付きキャンディを口の中で転がしながら言った。モロロ
族は流浪の民、年単位で一つの町に留まることは珍しい。今ここに
いるモロロ族のメンバーは皆、フロロを慕って残っているにすぎな
い。

「面白いもんねー、ここ」

パウロが寝転がりながら足をばたつかせる。

「確かに。今の話の子といい変な奴ばっか」

カロロも頷いている。

「だろ？」

フロロが言々と三人はにまー、っと笑った。

「中でも俺の仲間が一番面白いな」

フロロの言葉にカロロが首を振る。

「俺のメンバーも面白いよ！」

ニウロとパウロも手をあげた。

「うちも変人ばっかだぜ？」

「僕の仲間も面白いよ！良い奴らだし」

しばらく四人の間で「どこが一番個性的か」という話し合いが続く。
フロロが負けまいと冒険の話しを出そうとした時だった。

「面白い話してるじゃないか」

戸口から聞こえたエルフの声に、四人の体が固まる。

「……まさか、その『面白い』というのに私は含まれていないような？ フロロ」

アルフレートの言葉にフロロは苦笑する。モロロ族の隠れ砦が早くも崩れてしまった。でも、自分のパーティーのやつらなら、案内してやつてもいいかもしれない。フロロはそう考えてしまった。

f i n

ローザの一日はお祈りから始まる。

愛の女神フローは大地母神であり、祈りの言葉も大地への感謝が綴られる。代々神官の家系であるアズナヴール家にある祭壇は個人の自宅にあるにしては大きなものだ。フロー神の性格上、絢爛豪華とはいかないが、ちょっとした教会にも見えるこの一室は、家族全員が祈りの場使用する。祭壇にひざまずき、手を合わせるローザが長い長い祈りを締め括ろうとした時だった。

「ちよつと、まだ？」

姉カミーユに言われ、ローザは舌打ちした。

「まー、舌打ちなんてお下品なこと」

「姉様に言われたくないわよ！」

ローザが立ち上がり声を荒げてモカミーユは涼しい顔だ。

「喧嘩したいの？残念ながらあなたにそんな暇はないわよ」

つん、と言う顔を見せ姉は美しい金髪をかき上げる。

「……どういう意味？」

ローザは柱に掛かる時計をちらりと見遣る。まだ登校までそんなに慌てる時間でもない。

「お父様がお呼びよ」

「ああ……」

姉の言葉にローザは溜息をついた。父と話すのはどうも苦手だ。どうしても体が萎縮するし、朝から顔を突き合わせたくない相手なことは確かだ。そんな肩を落とす態度を見たからか、カミーユはふうと息をついた。

「何かやったの？」

「……特に思いつくことは無いわね」

「じゃあ平気でしょ。何にでも文句垂れるような方じゃないわよ、お父様は」

カミーユはぼん、とローザの肩を叩いた。姉とはしょっちゅう言い合うが、自分の気持ちを何故か察知するのもこの人だ。

「それにしても毎朝お祈りが長いわね。何かお願いでもしてるのかしら？」

「別につ」

ローザは妙に照れ臭くなり、踵を返すと部屋を出た。

「座りなさい」

父の部屋に入るなり掛けられた言葉にローザは少し肩をすくめた後、それに従いソファーに腰かけた。向かいに座る父親に目を向ける。

自分によく似た顔だ。髪形こそ違うが四十過ぎだというのにローザと同じ綺麗な金髪をしている。似ているからこそ苦手なのだ。将来の自分を見るようで嫌だった。

「なんででしょうか？」

ローザの問いに父は足を組み直し、頷く。

「最近の学園生活はどうだ？」

父は学園長を勤めている為か、ローザによくこの質問をしてくるのだ。父が知りたいような内容はローザも何となくわかるので簡単に答える。

「特に問題は無いです。五期生はローラスから出られない、というのが少し不満ですが」

「そうだな……、しかし五期生はまだ授業を受ける生徒もいるからな。まあ考えてみても良いかもしれない」

父は澄んだ青い瞳をすっ、と細めた。

「ああ、そうそう、お前の仲間といったヘクター・ブラックモアは、やはり断ったそうだ」

「でしようね」

父が言ったのは、ヘクターがプラティニ学園の精鋭部隊に入るように要請を受けたことだ。ローラスの盾となり剣となる。一見名誉あ

ることに思えるが、ローザはヘクターが断るだろうと確信していた。自分の仲間だから、などというくさい発想ではない。自分と同じ人種だ、と感じていたからだ。

「……リジアに言わないで正解だったわね」

「何か言ったか？」

眩きを尋ねられ、ローザは慌てて首を振った。

「あたしも恋がしたいわあ……」

ローザが溜息とともに発言すると、ヘクター以外の部屋の住民が露骨に嫌な顔をする。

「……何よ」

一変した部屋の空気にローザは不服の声を上げ、メンバーを見渡した。

「いや別に……」

リジアが目を逸らしながら呟く。

ミーティングルームでは通例となったお茶の時間。お茶の時間などというと聞こえは良いが飲んで食べ、食べては飲む。要するに六人は暇なのだ。

「お前が恋愛に目覚めるとろくなことがないからな」

アルフレートが舌打ち混じりに吐き捨てた。

「俺、もうストーカー行為は御免だぜ」

かつて使われるだけ使われたフロロも溜息つく。

「ローザさんはちょっと情熱的過ぎますよ」

四六時中、好きな相手の話を聞かされたイルヴァも首を振った。

「その癖冷めるのも早いんだ、これが」

リジアがそう言うのも無理はない。ローザの恋は熱しやすく冷めやすい。周りを巻き込むだけ巻き込んで、勝手に終わっていくのが常だった。リジアはなおも続ける。

「こないだの男はなんだっけな、よく見ると変な顔だった」だっ

け」

「ローザ以外は初めから気づいてた事実だったかな。ケケケ」

リジアの言葉にアルフレートが笑う。

「失礼ですよ、ちょっとゴリラ系だっただけです」

「イルヴァ、フォローになってないって」

フロロが突っ込んだ。ローザはそんな4人を黙ってつまらなそうな顔で見守った。自分でも迷惑をかけている自覚があるだけに言い返さない。

ふと、目の前でお茶をすすする男の顔をじつと見る。長めの銀髪にグレイの瞳。自分とは系統が違うが整った良い顔だ。リジアが夢中になるのもわかる。見られていることに気づいたヘクターは動きを止めた。見てはいるが何も言ってこないのどう反応するべきか困っている様子がありありとわかる。頬を触ったり、顎をさすったりして落ち着きない。

「……紅茶、おいしかったよ」

相手がぼつり呟いた言葉に、

「お茶の感想を要求してたわけじゃないわよ」

ローザは自分が煎れてやった紅茶のカップをぴん、と指で弾いた。今の反応、彼の人柄がよく出ている、とローザは思った。アルフレートあたりなら「何見ている」とすぐに喧嘩腰になるに決まっている。

親友の恋の相手としては合格というところか。そう思ったところで再び考えが一回りして元に戻った。

「はああああ、あたしも恋がしたい」

毎朝のお祈りはこれに費やされていた。神への祈りに不謹慎な、と思う他宗教者もいそうだが、フロー神は恋愛に関してはむしろ推奨されるべきことだ。命の営み、豊作、実り、結婚といったものを司るフロー神は乱暴な言い方を許されるなら「産めや増やせや」の神だ。綺麗にまとめて「愛の女神」となる。

「ローザちゃんはどう思う？」

リジアの声にはつとしてローザは顔を上げた。

「え、何？」

「聞いてなかった？暖かくなってきたからたまには普通に遊びに行く？って話してたの。イルヴァは海が良いって言うんだけど、まだ泳げる時期じゃないからそれはもうちょっと後で良くないか、って言うってたんだけど」

「ああ、そうね……」

その時、頭の中に電流が走ったような感覚。思わず体が硬直する。

『ロープ』

そう響いてきた。たった一言だけ、頭の中に囁かれた声。インスピレーションだ。巫女や神官など、特定の神に信仰があるもの全てが授かる力、神からの助言が受けられる力である。とはいっても望む時に授かれるわけではないし、ごく簡単な言葉だけだ。今のようにな前振りなしに突然降って湧いたように浮かぶのだが、これだってそうそうあるものではない。

「……ロープ？」

全く意味がわからない。思わずローザは口に出して呟いていた。他のメンバーもローザをぼかん、とした顔で見ている。

「え？何？ロープが何？」

リジアが聞くがローザは首を振った。

「いや、今そう聞こえたんだけど……」

ローザのインスピレーションの力を見るのが初めてではない皆は特に驚くこともなく、「ふーん」といった様子だ。

「あー、そういうわたし、靴の紐買に行かなきゃいけないんだっただ」

リジアが天井を仰ぎつつ言った。

「俺も剣のベルト買い直さなきゃなー」

ヘクターも続く。

「……今日、どっか買いに行く？」

「え！？ほんと？」

リジアがヘクターの言葉に飛びついた。

「靴ひもにベルトか。ロープと言えないこともないな」
アルフレートが妙に感心気に呟く。

「ま、まあそうね」

ローザは嬉しそうな親友の顔を眺めつつ言った。どうやらインスピレーションの力は効力が発揮できたようだ。思わぬデートのお誘いに、見るからに浮かれるリジアの姿を見てローザは一人呟いた。

「……どうも嫌な予感がある」

「あーっ！もう！何回目よ！」

ローザは購買のチョコパイを握り絞めつつ悲鳴を上げた。

「はい、15リーフ」

販売のおばちゃんが片手を出してくる。ローザは潰れたチョコパイの代金を払い、リジアに声をかけた。

「リジア、何か飲み物余分に買っていていきなさい。ヘクターがミーティングルームにくるから」

「は？今日は午前中、授業出るって聞いてたけど」

「いいから、フロー神を信じなさい」

リジアは「はあ？」と顔をしかめるが、ローザから無言で睨まれ少々冷たいお茶を買う。

先日のインスピレーションから何日連続なのだろう。これは新記録かもしれない。自分の信仰心が上がったと喜ぶべきなのだろうが、なんせ自分の事に関するアドバイスでは無いのだ。手放しに喜べない。隣りでお茶の釣銭を受け取るリジアをちらりと見た。

「ほんとに来るんでしょうねー？」

「絶対よ。最近のあたしの冴えようは知ってるでしょ。冷たい飲み物も絶対だから」

自信たつぶりだがどこか怒っているようなローザにリジアは反論を止めた。購買所を出て階段を上る。ミーティングルームのある廊下に差し掛かった時だった。

「……すごい、ローザちゃん」

リジアが感嘆の声を出す。

「だから言っただでしょうが」

この台詞を言うのに相応しい人物はこの時のローザよりいないだろう。前からやって来る人物を見ながらリジアはそう思ったに違いない。ヘクターが上着を肩に引っかけやってくる。

「なんだかお疲れの様子ね」

ローザはヘクターに声をかけた。ヘクターはふう、と溜息をついた後、説明する。

「今日は下級生の遠征に付き添ってただけど、一人怪我してさ。そいつ担いで帰ってきたんだ」

「それはご苦労様。……リジア」

ローザが腕を突くと、リジアは慌ててお茶を差し出した。ヘクターは一瞬驚いた様子を見せた後、「ありがとう」と言って受け取る。二人の間にほんわかとした空気が漂った。

間違いない。神はあたしを恋のキューピッドにしようとしている。

ローザは眉間にしわ寄せた。別にそれ自体は光栄なことであり、神からの提示が無かるうとローザは進んでやってみせたいことだった。自分が知る限り親友の初めての恋なはず。寂しくもあったが嬉しさの方が大きかった。が、祈りによって得られた結果がこうだったことがショックなのだ。

「……あたしの春はまだ先ってことなのかしら」

ローザはむなしく呟いた。

「ローザさん、なんだか疲れてません？」

ミーティングルームのテーブルに向かい合わせに座るイルヴァからの珍しく優しい言葉に、ローザは紅茶を飲む手を止める。

「そう見える？」

「なんだ、相変わらず続いているのか」

アルフレートが興味深げに身を乗り出した。彼にしてもこんな状態の神職者を見るのは初めてということなのだろうか。

「相変わらずよ。なぜか電波がビンビンに合ってるらしくて」

ローザはインスピレーションが連続的に起こる現象をそう言い表すことで自らの気持ちを軽くする。自分でも少し怖かったのだ。急激な精神力の成長なんてことはあり得ない。そしてどんなに熟練の神

官であろうと毎日のように神の言葉を授かる者などいない。それは教会の最高位法王であろうと。リジア、もしくはヘクターがフロー神に氣に入られているのだろうか。言葉をくれるのはいつもこの二人のことなのだから。二人が何処かへ行ってしまうのではないか、という漠然とした不安もあった。先程のお茶の件だけではない連日の流れを思い出していた。

「……少しの間、ローザの家に押しかけるの止めとこうか」

フロロが思いがけない提案をする。ローザは予想外の心配をかけていたことに、慌てて否定をしようとした。が、

「そうね……、丁度わたしも暫く用事があるし、良いかもしれない」
リジアが腕を組み呟いた。

「私も調べ物があるんだよね……、ちょっとした間忙しいかもしれない」

「じゃあ俺も、たまにはモロロ族の奴らと遊ぼうかな」

アルフレートとフロロがそれに乗っかるではないか。インスピレーションの力を「疲れからくる妄言」のように扱われること自体が本意ではあるが、それよりも見当違いな気づかいにもややもとした気持ちがある。

「じゃあ、暫くはここで解散ってことで」

ヘクターはそう言うのと剣を担ぎ直し部屋を出て行く。イルヴァもそれに続いた。

「ちょ、ちよっと……」

手を伸ばすローザの肩をリジアが叩く。

「早めに帰って休んどきなよ、ローザちゃん」

「三日後の週明けに集まればいいじゃないか。どうせ明日から休みなんだし」

とアルフレート。

「そうだけど……、ほんとあたしは迷惑じゃないのよ?」

ローザは指輪を無意識にいじくりまわした。

「そんなことはわかってるって」

フロロがにこにこしながら言った。その笑顔にローザは何も言えなくなってしまうた。

「わかってないっていうの！」

ローザは姉カミーユにぶちまける。カミーユは紅茶に入れた角砂糖をスプーンで崩しながらローザをじっと見つめた。

「それで今日は静かなわけね。……まあいいんじゃない？ たまには個人個人で活動する機会があっても」

「そ、それはそうだけど……」

ローザは口籠りながらテーブルの上にいるフローラを見た。専用のお皿に乗ったサラダをむしゃむしゃと食べていたイグアナロボットが「ん？」といった顔でローザを見上げる。姉と二人の食事ではないつもに比べて寂しいので、温室から食堂へ連れてきたのだ。

「でも大変な時こそ、皆にいて欲しいものじゃない？ それなのに」
大変そうだから帰ろうと『っていうのが薄情よ」

「わかってないのはあなたの方かもしれないよ、ヴィクトール」
姉カミーユの信じられない一言にローザは目を見開いた。カミーユは涼しい顔でお茶を啜っている。姉への話しの仕方がおかしかったのだろうか。今の話で自分が責められる方がわからない。きっと姉は何が何でも自分を悪人にしたいのだ。こんな人と話していても無駄ではないか。そう思いローザが席を立った時だった。

『汝は裏切られるであろう』

はつきりとした無機質な声にローザは硬直する。まただ。フロー神のお言葉を受けた。今日は二度目ということになる。そしてそのシヨックよりも大きなものがローザを小刻みに震わせた。最近の流れの中で初めて自分自身のことを示される「汝」という単語。そして

……、

「裏切られる？裏切り……、あたしが……」

混乱する頭に先程の声が蘇る。

汝は裏切られるであろう

あたしは裏切られる。これから……。今日のことでショックだといふのに、更にこれから仲間の裏切りを見るといふのだろうか。青白い顔で突っ立ったままのローザにカミューはいぶかしげに声を掛けた。

「どうしたのよ……」

「何でも無い！」

そう叫ぶとローザは部屋を飛び出し、自室へと廊下を全速力で走った。

枕に顔を埋め、ローザは痛む頭を振った。

確かに自分の仲間たちは口は悪いし、態度も悪い。でもそれは言いたい事を素直に言い合える仲だと思っていた。そうではなかったとでもいふのだろうか。本当にぎすぎすとした関係だったのだろうか。自分はそんなに空気の読めない子だったのか？さっきの言葉はまだ彼らのことだと決まったことではない。仲間のことではないのかもしれない。家族？両親、兄弟、家のお手伝いさんたち……。いくつも顔が浮かんで消えて行く。そしてどうしても残ってしまう顔。一番の仲良しだと信じて疑わなかった少女、リジアのことがどうしても思い起こされてしまうのだ。

リジアが裏切るとしたらどんなことだろう。

ぼんやりと考え続ける。とことん落ち込むところまで素直に考える。それがローザのやり方だった。最悪の展開にも対処するために、どんな暗いことでも考える。そうすれば現実に受けるショックは少ない。他人には見せたことのない、ローザの中で一番後ろ向きな姿でもある。

リジアがパーティーを抜ける……とか。それは考え難い。親の都合

でどうしても学園を辞めるとかならあり得る？でもそれでは自分自身が「裏切り」とは思わないだろう。隠し事がある、とかならシヨックは大きいかもしれない。が、確認しようが無いことでもある。「何でも話して欲しい」とは思うが強制したいとは思わない。個人の考えというものがあるのだから。本人が話したくないのであれば、それを『友情』という名の押しつけで強要するべきではない。ヘクターのことだつてそうだ。話して欲しかったという気持ちもあったが、「からかわれたくなかった」というリジアの気持ちはよくわかったし、今ではよく相談もしてくれる。

「……もしかして、もう付き合つてるとかないわよね」

仰向けに体勢を変えながら、一人呟いた。常々鈍い二人だな、と思つていた部分はある。バレバレなリジアの態度に気づく素振りの無いヘクター。それを他のメンバーに気づかれてるわけがないと思つていた節のあるリジア。そんな二人にあたしの助言によつて春が訪れているとしたら？……鈍いのはあたし！？

思わずベットから起き上がる。ローザは暫く動きを止めたのち、

「はあ……」

大きな溜息を一つつくと、再びベットに倒れ込んだ。駄目だ、どうも裏切りとはほど遠い。つくづく幸せな人生を歩んできていたのだな、と今更ながら気が付いてしまった思いだった。

朝の日差しが目には痛い。休日明けの登校時間。

「休んじやおうかな」

皆勤賞達成も夢ではないローザが初めて弱音を吐いた瞬間だった。インスピレーションの方はローザへの警告を最後に途切れている。また学園に行けばどうなるかはわからないが。思った通りというか、家族間では何も変わりがない休日を過ごした上で、今日はメンバーと顔を合わせなくてはいけない。気が重いのも仕方ない。

学園に着いてからもなるべくミーティングルームに行くのを遅らせる。教官に話しをしてみたり、普段話さないようなクラスメイトとも話しこんでみたり。誰でもいい、誰かが自分を裏切ってくれないか。

そんなことまで考え始めていた。

メンバー以外に裏切られるなら些細な事柄に決まっているのだ。クラスメイトが抜け駆けして新しい呪文をマスターした、とか、そんなレベルに留まるに決まっている。

「変わったこと？それが無いのよねー。毎回単調なクエストばかり。メンバーもダレてきちゃって大変なんだ。ぎすぎすしちゃって」クラスメイトの一人が語った話しにローザは心の中で舌打ちする。他人の不仲話しでは裏切りにはならない。

「そうなの、大変ね」

「ローザちゃんたちのところは仲良くて羨ましいな。一人一人がキヤラ濃い方が上手くいくものなのかもね」

褒めているのかどうなのかわからない台詞を言われ、ローザは苦笑した。すると廊下から大声で名前を呼ばれる。

「ローザさあああん！」

間延びする声はたいへん聞き覚えのあるものだ。クラスメイトのびつくりと目を見開く顔にローザは赤面する。

「ローザさああん、いないんですかあ？」

イルヴァの声だ。クラスメイトに謝るとローザは教室を出た。

「……ちよつと止めてよ、恥ずかしいじゃない」

「あ、ローザさん、いるじゃないですか。早くミーティングルーム行きましょう？ローザさんいないとお茶が無いんですよ」

よく見るとイルヴァの口の周りはお菓子の食べカスだらけだ。

「人をお茶汲み扱いしちゃって、もう」

そう言いながらもローザは少し嬉しかった。

「皆さんもう集まっていますよ。ローザさんが遅いなんて珍しいんで心配しちゃいました」

廊下を歩きながらイルヴァが言う。普段から全員のお茶を煎れるのに早くから入ってお湯を湧かしているからだ。

「それに今日は久々にローザさん家の御飯が食べれますね」

イルヴァの無邪気な言葉にローザは少し目頭が熱くなった。

「もー、たつた三日来てなかっただけじゃない」

「だってお昼も家で食べると食費がかかる、ってあんまり食べれなかったんですもん」

本気で「御飯くれる人」扱いされているようで、ローザは涙が引つ込む。裏切るってコイツのことかも……。そんなことを考えているうちにミーティングルームに着いてしまった。前を歩いていたイルヴァがドアを開けるのが自然だと思うのだが、「開けてくれませんか？」と頼まれる。

「静電気が恐いんです」

「はあ？もうそんな時期じゃないでしょうが。まったく……」

ローザはぶつぶつ言いながらノブを回し、扉を引いた。ぱんっという破裂音に身構える。頭に何か降り掛かってきた。

「おめでとー！」

リジアのものらしき声に恐る恐る目を開いていく。手を叩くリジア、大きな箱を抱えているヘクターになぜか鼻眼鏡姿のアルフレート、フロロ。呆気にとられるローザに後ろからイルヴァが声を掛ける。

「お誕生日おめでとうございます、ローザさん」

言われても尚もぼかん、としたままのローザの手をリジアが引つ張る。

「もーびつくりしすぎて声も出ないの？」

部屋に入るとあちこち色紙で装飾されていることがわかった。テーブルには大きなケーキがある。思わず目を見開き見つめていると、

「イルヴァとわたしで作ったんだよ」

「一応女の子ですから」

リジアとイルヴァが胸を張って答えた。

「これ、全員でお金出し合ったんだ」

ヘクターが大きな箱をソファアに置くとぼんぽん、と叩く。開ける、ということだろう。緊張で冷たい手を伸ばすとリボンを解いた。

「これって……」

箱を開けてみてローザはようやく声を出す。裁縫セットだ。裁縫の物差しがあるので箱が大きかったのだろう。それでも他の道具も立派だった。裁ちバサミに糸切り鋏、針山や細々とした道具がきちんとの一つのボックスに入っている。このボックス自体が前々からローザがリジアに欲しいとこぼしていた物だと気づいた時、思わず涙が出ってしまった。

誕生日なんてこと自体忘れてしまっていた。

「16なんて若いもんだなー」

アルフレートが腕を組み呟いた。思わず笑ってしまう。

「……ところで、なんで鼻眼鏡？」

「こんなひょうきんな部分もある、というところが見れて嬉しいだろう？」

ふふん、と笑うエルフをどうしても憎めない。ローザは頷いた。

「じゃあケーキ切りましょう？ローザさんにはお茶入れてもらってイルヴァの提案に各自動き始める。ローザは「裏切りって……まあ裏切られたっちゃあ裏切られたわね」そんなことを考えながら棚の上のポットに手を伸ばした。

「じゃあ一番上等のお茶の葉、開けちゃおうかな」

そう笑顔で振り向き、紅茶の缶をテーブルに置いた所で気がつく。

「あれ？……テーブル変わってない？」

自分が持ち込んだ白のテーブルが初めからここに備え付けてあった折りたたみデスクに変わっている。総レースのクロスはそのままだが、そこから覗く足は見事な曲線を描いていた重厚なものではなく、簡素な木だ。全員の動きがぴたりと止まる。嫌な予感がする。

「……壊したわね？」

ぎくり、と綺麗に5人の肩が動いた。

「……フロロが」

リジアが呟くとフロロが騒ぎ出した。

「ひでえな！元はと言えばイルヴァが悪いんだろお！？」

「アルフレートが人の事馬鹿にするからです」

「なんだと？ヘクターが可哀想だと思ったから注意してやったのに」

「ええっ、俺？」

ぎゃーすか騒ぐ5人を見て、ローザは溜息をついた。

「仲が良い……ね」

良いといえば良いのかもしれない。悪いといえば悪いかもしれない。ただ、この居心地の良さだけは本物なのだから、それで良いのだろう。

それに今日のことは純粹に嬉しかった。それに免じて許してやるか、と思った瞬間、ローザの頭に再び神の声が響き渡った。

『白いテーブルの持ち主は怒りに我を忘れる』

一瞬にしてローザの顔は氷のように固まる。背中に嫌な汗が流れ、目が虚ろになるのが自分でもわかった。

持ち主って……姉さんだね。無理言っただけでテーブルを借りた日の事を思い出し、ローザは胃が痛み出した。

「怒りに我を忘れる……って、のおおおー!!」

頭を抱えたローザを他のメンバーは更に青い顔で眺めた。

「……俺しらね！」

フロロが廊下へ飛び出す。「ちょっと待ちなさいよ！」「そう言いながら逃げるな！」「いやーん」「おいおい！」「次々と消えていくメンバーを見て、暫し呆気にとられていたローザの顔が赤くなっていく。

「……ま、待ちなさいよおおおー！」

神の言うことは絶対である。

フロー神の熱心な信者であるローザにとって、今日程神の存在を大きく感じた日は無いかもしれない。

今日も学園には騒がしい6人の声が広がっていく。

f i n

「来週末は皆も知っている通り、『体育祭』がある。よって緊急のクエスト以外は募集が無いので気をつけるように」

教官の事務的な言葉にわたしを含め何人かがはあ、と溜息を漏らす。そうか、今年もまたこの季節がやって来たのか。実は今月の頭から気が付いていたことだが、わたしは改めて事実が突き付けられて軽く憂鬱になった。

「なんだ、暗い顔だな。楽しいお祭りだぞ？体育祭の日ばかりは羽目を外していいんだから、もっと喜ばなさい」

メザリオ教官は言ってみてから自分でも無茶な事に気付いたのか、ポリポリと頬を掻く。教官もわたし達がこんな雰囲気になる理由を知っているのだ。

プラティニ学園にも学生らしい行事がいくつかある。その一つがこの『体育祭』である。春のこの浮かれ陽気に体を動かし皆で親睦を深めましょう、という一見すると素晴らしい行事だが、ファイタークラスにとってはなんのこっちゃでしかないし、わたし達魔術師クラスにとっては余計なお世話でしかない。そして憂鬱にまでなる最大の理由は、この体育祭の内容にあるのだ。普通の学校、商人育成の商業学校やお役人さんを目指す学校でも体育祭と名の付く行事はあるようで、普通は「玉入れ」だとか「借り物競争」といった行事らしい種目が並ぶらしい。が、我がプラティニ学園は冒険者育成機関。その性質に相応しい内容となっている。

種目は一種類、モンスター狩りである。モンスターといっても教官の一部が造り出したもので人形に近いものだ。学園中に放たれたそれをひたすら狩る。大変生産性の無い行事である。そして一番の問題がこの行事は何故か学年対抗となっていて、要するに最上級生である六期生が「ひゃっはー」したいだけの祭になってしまっている。この学園における一年の差は大きく、決して腕では敵わないし、六

期生以下のわたし達は彼等の引き立て役でしかない。

去年は空気を読まないアルフレートが暴走したお陰でわたし達四期生が危うく優勝するところまでいき、六期生はもちろん去年までの五期生にも睨みつけられ、嫌味を言われ、同級生からはアルフレートと何故か友達と思われるでいたわたしまで冷たい視線に曝されるという苦い思い出となってしまった。

唯一の良いところは、教官は「緊急のクエスト」と言っていたが、わたし達五期生にそんな物は端から回って来ないので一週間程は暇になる。それにまあ、緊急のクエストに借り出される分、六期生は他の学年より人数がかなり少ないはずなのに、まともにやっては敵わないという事実は頼もしいものではあるのだが。

「じゃあ係の者を決めておくように」

そう言つて教官が出ていくと、皆立ち上がる。口々に「どうする？」

「じゃんけんにしない？」と言っているのを聞き、わたしは隣の席の女の子に尋ねた。

「何、係つて？」

「聞いてなかったの？ 私達の学年からは準備の係を出して、教官の手伝いに行くんだって」

わたしが露骨に顔をしかめると、彼女は「私に文句言われても」と呟き席を立つ。体育祭で狩られる標的となるモンスターは、クリエイト系の魔法を得意とする教官が造った傀儡だ。傀儡術など習っていないわたし達に手伝いにいく価値があるのか疑問なのだが。

「ほら、リジアも早く！ じゃんけんするわよ」

クラスメイトから急かされ、渋々わたしも席を立った。

わたしは自分の広げた掌を見つめると、眉をぐぐ、と上げた。たつた今じゃんけんをした相手は手放しで喜んでいる。

「やった！ これで早く帰れるわあ」

無神経な態度にわたしが睨むとセリスは「な、なによ」と胸を張った。その隣でもじゃんけんを終えたキーラが微笑んでいる。

「単純な人間って『パー』しか出さない、って本当だったのね」
そう言うとハサミを象った手を見せ付けてきた。くっ……。

キーラに負けた相手を見るとわたしと同じ様に広げた掌を出しながら「ひどい……」と呟いている。そしていかにも薄幸そんな顔を更に曇らせているではないか。

「じゃあ係はリジアと、えーと……カーチャで決まりね」

セリスが皆に聞こえるように宣言する。

「今、私の名前忘れませんでした？」

「や、やあねえ、そんな訳ないじゃない」

セリスはそう言いながらも気まずそうにしている。無理もない。わたしも先日的事件で嫌という程関わりあったカーチャだというのに、今セリスが出すまで名前を忘れていたのだから。

「しょうがない、なっちゃったからにはがんばりましょうね」

わたしはそう言うとカーチャと握手した。カーチャはどこか嬉しそうに顔を綻ばせる。彼女こそわたしのロッカーの一番無気味な落書き、血文字の『呪』を書き続けた犯人だったりしたのだが、その不幸すぎる境遇故に憎めなかったりする。

まず外見が普通過ぎる。ソーサラークラスに多い陰気さも無ければ華やかさも無い。ローブ着用以外は自由だというのに、黒のローブに白のシャツ、黒のズボンをきっちり着ていて模範生のようだ。かといって「真面目そうだな」という取っ付き難さも無い。よく見ると可愛らしい顔だというのに、何故か集団の中に入ると彼女の顔だけ霧がかかったように霞む、という摩訶不思議な現象を巻き起こす。クラスの中での立ち位置も……まあこれは今年に入ってから初めて気が付いたことなのだが、成績優秀とも言いがたい問題児扱いも無い。友人が多い社交的な存在ではもちろんないし、友達がいないような様子で心配になる事もない。とにかく何もかもが普通なのだ。人間、普通が一番とは言うがこまでくると逆に個性的な気もする。そのキャラクターが彼女の印象を薄め、誰もが「いたっけ？」と首を傾げる存在になっているのだ。

「……早く行った方がいいと思うけど。……リジア？」

カーチャが話していることに気が付いてわたしは慌てる。

「ご、ごめん。ぼーっとしてた。何？」

「今日から早速なんだって。ラブレ教官の手伝いらしいから、怒られる前に早めに行かない？」

「げっ」

その名前を聞いてわたしは思わず声を上げた。よりによってあの『変態教官』だとは……。いや手伝いの内容からしてあの教官の所しか考えられないのだから、それで皆、じゃんけんに必死だったのか……。今更気が付いた自分に情けなくなり、わたしは大きく溜息をついた。周りは既に帰り支度を整えてぼつぼつと帰り始めている。と、わたしは肩を叩かれた。

「キーラ。どうしたの？ 帰らないの？」

わたしが尋ねるとキーラはわたしの腕を取り、顔を寄せてくる。何ともまあ、良い匂いに女同士だというのにクラクラとしてしまう。

「良かったわね。ファイタークラスも準備の為に駆り出されてるらしいわよ」

「えっ、本当？」

聞き返すわたしにキーラは頷く。思わず顔がにやけたせいか、彼女もにやりと笑っている。

「クリスのクラスが丸々駆り出されてるんですって。『一緒に係やろうぜ！』とか言ってきたから断ったのよね」

……報われない奴……。わたしは赤毛の戦士クリスピアンの顔を思い出し、そつと涙を拭った。

「シーフも呼ばれてるから今年は罾も設置するのかもね」

話しに入ってきたのは燃えるような赤い髪が美しいセリスだった。

「へー、じゃあフロロもいるのかな」

わたしは言ってみて首を振る。あいつのことだ。呼ばれてもバツクレそうだな。

「クリスは力仕事を手伝わされる、って言ってたから仕事は一緒に

やないでしょうけど、ヘクタ……」

キーラが言い終える前にわたしは慌てて彼女の口を押さえる。文句を言いたそうなキーラの顔がわたしの背後を見て目を見開いたものに変わった。セリスが悲鳴混じりに叫ぶ。

「やだ！どうしたのよ、あんた！」

……遅かったか。振り返ると鼻を押さえるカーチャの姿。

「吐血よ！」

わたしは我ながらフロローになっていない台詞を叫ぶと、カーチャの腕を取り教室を飛び出した。

「何か前より悪化してない？名前聞いただけで……その、鼻血って……」

廊下の水道で鼻を洗うカーチャを見ながら、わたしは頭を掻いた。

「……ごめんなさい。係で一緒かも、って想像したら、つい……」

「いや、謝られても……」

洗い終わったらしいカーチャにわたしはハンカチを差し出してやる。深々と頭を下げながら受け取るカーチャ。早いとこ移動しなきゃならないのは確かなので、歩きながら身支度は整えて貰う。

「これで明日から『重い病の子』って思われたらどうしよう……」

俯くカーチャにわたしは声を弾ませた。

「いいきつかけじゃない！これで明日から目立つかもよ？」

「そんな目立ち方嫌よ！」

我が儘な奴。カーチャって結局は目立ちたくないんだな。

「全然いいと思うけどなあ。わたしなんて未だに『学園クラッシュ

』みたいに言われるのに」

「それは事実じゃ……」

わたしが睨むとカーチャは慌てて前方を指差す。

「あ、そこじゃないかな？ラブレ教官の教官室」

見ると確かに教官の名前が彫られたプレートが掛かっていた。このように個人の教官室を構える教官も学園には何人かいるのだ。教官達は皆、研究を続けているが研究の規模が大きいと、このように個人の部屋が貰えるらしい。が、ラブレ教官の学園内での立ち位置を見ると「隔離されている」方が正解のような気がする。間を置わたしは「やだなあ」と小声で呟きながら扉をノックする。間を置かずに「入れ」と中から声がした。

「……失礼しまーす」

小さめの声で囁きながらそろそろとドアを開けると、いきなり書類

の山、山、山。床にも学術書やガラスのカップや何かの道具が散乱しており、入るのに躊躇する。

「早く入って来い」

物の山からひよい、と顔を出したのは無精髭に青白い肌のラブレー教官。ボサボサの銀髪から目がギョロギョロと覗いている。その目がわたしの顔を見た瞬間すつ、と細められた。

「……なんでお前なんだ」

初っ端の挨拶がそれかい。

「じゃんけんで負けたからです」

わたしは正直に答える。

「よりによってお前なのか……。はあ、しょうがない」

ラブレー教官は普段、物に魔力を付加させる『エンチャンター』としてのノウハウや、魔術具の扱いなどをわたし達の授業で請けもっている。授業数が少ないせい、わたしが壊した学園の壁や結界を修復するのにもよく駆り出されているので、ばっちり面識があるのだ。教官は書類を掻き分け出てくると、わたしの隣を見て首を傾げる。

「お前は？」

「わ、私もじゃんけんで負けて、その」

「いや、名前」

「カーチャ・サマエルです！」

その返事を聞くとラブレー教官はぽん、と手を叩いた。

「ああ、この前の提出物は覚えてるぞ。発動体のワンドはよく出来ていた」

物は覚えてるのに顔は覚えて無いのかよ、と思ったがカーチャは嬉しそうに顔を輝かせる。健気だなあ。

「じゃあ何とかなるか……。いや、やっぱり不安だなあ」

教官はボリボリと頭を掻いた。

「何やるんです？」

わたしが聞くと教官は物が積み上がって半分見えない黒板を指差す。

何やら色々書いてあるようだが殆ど解読出来ない。

「新しい媒体から作り上げるゴーレムを試したいんだ。特に難しい事じゃないんだが、一定の魔力を長い間付加させる必要がある」

何だか聞くだけでわたしには向いてなさそうなんですけど。

「なんでわたしを呼んだんです？」

「だから呼んでねーよ」

早くも冷やかな空気になるわたしとラブレ教官の間を、困った顔のカーチャがオロオロとする。この教官の、こういう所が嫌なのだ。教官達の中では若い為か横柄だし、言葉は悪いし。

「とりあえず移動するぞ」

「何処行くんですか？」

机らしき物を掻き分ける教官にわたしは尋ねる。教官は鍵を見つけ出すとそれをチャラチャラと振った。

「第二演習場だ。そこを押さえてある」

そういうとさつさと部屋を出ていく。わたしとカーチャはそれを見届けると顔を合わせ、肩を竦めた。

「よいせつと」

グラウンドから植え込みを跨いで、教官は演習場前へと体を躍らせる。ひよろ長い教官には簡単に越せる植え込みかもしれないが、わたしとカーチャは大人しく遠回りした。

「新しい媒体って何ですか？」

わたしの質問を教官は指を振って答える。

「自分で見た方が早いだろ」

そう言いながら演習場の重い扉を開けていった。徐々に隙間から中に光が入り、様子が見えてくる。

「うひい！」

わたしは思わず腕を摩る。鳥肌が気持ち悪い程立ってしまったのには理由がある。広い演習場を埋め尽くしているのは人形の列！同じ

顔に同じ体つきの人形達が、悪趣味なことに全てこちらを向いて顔をあげているのだ。

「な、なんですかこれ？」

カーチャが震える指で中を示した。教官は妙に嬉しそうに、

「スゲーだろ。一年かけて揃えたんだぜ」

と声を弾ませた。答えに詰まるわたし達。

教官は中に入ると一体一体、チェックしていく。わたし達もおっかなびつくり続くが異質な雰囲気飲まれ、無言になってしまふ。わたしは勇気を振り絞ると人形の一体をよく見てみた。材質がよくわからない。布ではないようだし、陶器とも違う。触ると軟らかいが生き物の肌とは似て非なるもの。しかしよく見るとラブラー教官に似ているのが気に食わない。まるで教官をデフォルメして人形サイズにしたような感じじゃないか。いつまでも口を開かないわたしとカーチャに痺れを切らしたように教官は説明を始めた。

「不思議そうな顔をしているな。これが何なのか分からないんだろ？……これはな、俺の髪から作り上げたゴーレムだ」

それを聞いた瞬間、わたしは人形から手を放す。き、気持ち悪い！
「ゴーレムといえば何を思い浮かべる？土から作り上げるマッドゴーレム、金属を媒体にしたアイアンゴーレム……。代表的なのはその二つか」

教官は指を折るとわたしの顔を見る。他にも木や硝子といった固形物を媒体にしたゴーレムは聞いたことがある。子供の頃に読んだ本では、水から作られたゴーレムが勇者の剣を翻弄しているのが描かれていたりしたが。

それらの固形物に古代人の知識で組み立てられた呪文を唱えることで、仮染めの命を与えてやるのがゴーレムだ。ただし知能は辛うじて簡単な命令を聞く程度。決して高くはない。

「生き物を媒体、っていう訳ですか」

わたしは呟く。髪の毛とはいえ生物の一部であることには変わらない。もしかしたらより複雑な知能を兼ね備えてたりするのかもしれない。

ない。多分、単純に普通のゴーレムを作り出す呪文をかけたわけではないのだろうが、どういう仕組みで成り立っているのか不思議だった。それこそがラブレ教官の研究の成果なのだろう。

「俺の外見を受け継いだのは予想外だったけどな。こいつらが当日、お前達に倒されていくのかと思うと涙が出るぜ」

「じゃあ一体作った時点で止めればいいのに……。っーか皆もやりにくいと思うんですけど。」

「あの、私達は何をすればいいんですか？」

カーチャの質問は尤もだ。もうゴーレムは出来上がっているのではないだろうか。教官はニヤニヤとしながらわたし達の顔を見る。

「お前達には一番重要な仕上げに参加させてやる。もっと喜んだ方がいいぞ？」

何とも押し付けがましい台詞を吐きながら、人形の一体に手を翳した。

「今から唱える術式を覚えろ。それからこいつが立ち上がるまでの間、マナを集めてやるんだ」

「失敗したらどうなるんです？」

わたしが聞くとラブレ教官は顔をしかめる。

「失敗するなよ……。別に難しいことじゃないんだから」

「わたしには難しいんです！」

わたしの叫びを無視したまま、ラブレ教官は呪文を唱え始める。

淡い光が手の中に漂い始め、暫くそれが続いた。瞳が乾く、ぐらいの時間だろうか、じつと見ていると人形が突如腕を上げる。カタカタ、ときこちない動きを見せた後、ゆっくりと立ち上がる。首を力クカクと動かし、わたし達を見回した。

「……………」

喋ることはないようで、沈黙が演習場を覆っている。

「……………どうだ？すげーだろ！」

教官は満面の笑みでこちらを見てくるが、わたしは返事に困る。その、動きが妙にカクカクとしていて不気味過ぎるのだ。決して愛着

は持てない。これなら体育祭当日も手を出しつらいといふことはないかもしれない。

「さ、お前達もやってみてくれ。こいつら全部を当日までに目覚めさせなきゃならないからな」

「これ全部やるってことだね？私、魔力持つかない……」

カーチャが不安そうな声を漏らす。わたしも苦手分野をやるだけに、精神的に持つか不安だ。

「今日で全部やるわけじゃない。大丈夫だろ」

教官がはは、と笑った。

「あの、それって終わるまで毎日ずっと居残りってことですよね？」
わたしが聞くと教官は天井に目をやりながら「まあ……そうなるな」と小声になる。マジっすか。わたしはムカムカとした気持ちを押しさえつつ、人形の一体に手を伸ばした。こうなったら早く終わらせるしかないのだ。教えられた呪文を唱えると右手に空中を漂っていたマナが収縮しだす。不思議と温かい。

「もう少し魔力を抑えろ、リジア」

「まじっすか。結構絞ってるんですけど」

教官の注意にわたしは慌てる。キツイなあ。軌道修正するものの、納得いかないのか教官が寄ってきて眉間に皺寄せる。

「だから違っつて！もつと微量でいいんだよ！」

「それが難しいんですよ！」

わたしが叫ぶと教官は「むう……」と呟いた。

「本当に大雑把な奴なんだな……。魔力付加はコントロールの鍛練になるから日頃からやつとけ、って言っただろ！」

そういえばそんな話もあったような。わたしが過去の回想に入った時だった。ぐにやり、と手の中にあるものが溶けているような感覚がした。見ると人形が熱でも受けたように溶けだしているではないか。溶けた部分から光に変わり、さらさらと空中に漂っていく。

「リジア・ファウラー、×一個、と」

手帳にメモを走らせるラブレ教官。ま、まさか成績に加味しないでしょうね。わたしは床に手を付くと、その場に崩れ落ちる。

「……ひどい、わたしだつて、わたしだつて頑張ってるのに……」

「お前……」

教官がわたしの肩を叩いた。

「それで俺が『悪かったな』と言うとでも？」

教官の言葉にわたしは思いつきり舌打ちする。

「お前、それが目上の人間にする態度か！」

「出来た！」

ラブレー教官が言い終えるより早く後ろからした声に、わたしと教官はびくん、となる。

「一体出来ましたよ、教官」

「お、おう」

そ、そうだ、カーチャもいたんだっけ……。一瞬、人形が喋り出したのかと思った、ということは言わないでおこう。カーチャの傍らにひっそりと立つ人形に目を向けて、わたしと教官は同時に目を擦る。

「……なんか一瞬、人形の顔に靄が掛かったように見えただが」
どうやら教官と同じ光景を見ていたらしい。

「もしかして作り手の特徴が反映されたりするんですかね？」

そう言いながらわたしは先程、教官が動かした人形に目を送る。隅の方でごろりと横になり、鼻をほじっている人形を指差しわたしは笑ってしまった。

「うるせえ、お前のなんて溶けたじゃないか！」

大人気なく怒るラブレー教官に、わたしは再び舌打ちする。それは一回目で失敗したからじゃないか。その間にもカーチャはせつせと作業に取り組んでいた。次々と出来上がる存在感の薄い人形にラブレー教官は、

「これはこれで生徒の目を翻弄するかもなあ」

と呟く。暗殺部隊か……。カーチャの作業分が増える程、厄介になるかもしれない。わたしは腕を捲ると再び人形に向かい合った。

慣れてくれば早いもので、気付けばわたしも順調に数をこなしていた。自分が命を吹き込んだともいえる完成品を見る。何だか顔がつやつやとしていて可愛いと思うのは気のせいだろうか。わたしの作った分は暢気に追いかけてこをしたり、髪を結わいあったりしていた。

「こうやってると、体育祭で壊されちゃうの寂しくなっちゃうね」
カーチャが呟く。わたしも同感だったのでしんみりとした空気になっ

ってしまった。
「……よし、次を最後にして今日はここまでにするぞ」

教官の言葉にわたしは演習場の上の方にある窓を見る。かなり日が長くなった季節だというのに真っ暗だ。これはファイタークラスの面々は帰っているかもなあ。わたしは少し肩を落とし、本日最後の一体に向かう。

「おっと」

気が抜けたのか、気合いが入り過ぎたのか手に集まるマナの光が強すぎることに気が付き、慌てて魔力を絞る。……つもりだった。

「ちよっあれっ待って！」

光は弱まるどころか強さを増していく。焦りながら人形から手を離すが、どんどん魔力を吸い取られているのが分かった。これは、ちとまずくないか！？ラブレー教官も慌てて駆け寄ってくる。

「な、な、なんだよ！」

教官が後退りした。人形が異様な変化を見せたからだ。体がみるみるうちに膨らんでいく。太っていく、などというかわいいものではない。腕が伸び、足が伸び、頭も大きくなっていく。ズウン、と重たい音を立てて床を軋ませるそれを、わたしは尻餅をついて見上げた。巨人だ。絵本で見た巨人がいる。巨人人形はゆっくりとした動作で演習場を見渡すとやおら拳を壁に叩きつけた。お腹に響く石壁の破壊される音。めきめきと骨組みが軋む悲鳴に似た響き。もうもうと煙が立ち込める。巨人人形は満足そうに頷くと、そのまま猛スピード

ドで表に飛び出していった。

わたしは未だ粉塵が舞う景色を見て、ようやく口を開きつ放しなことに気が付いた。呆氣に取られ、身動き取れなかったが、慌てて跳ね起きる。

「なななんですか、あれはー!!」

わたしは教官に詰め寄った。教官はぶんぶんと首を振り叫ぶ。

「知らん!俺のせいじゃ……」

そこではつとした表情に変わった。

「お前今、どさくさに紛れて俺のせいになろうとしただろ!？」

「半分は教官のせいでしょ!」

わたしが勢いに任せて喚いた時、表から再び破壊音が聞こえてくる。続いて怒声のような集団の騒ぎ。

「まずい、行くぞ!」

教官に促され、わたしは頷いた。すぐに表に飛び出すとグラウンドの方に巨人人形の銀色の髪が見える。

「あつちよ!」

わたし達はそのまま駆け出した。

「校舎でも壊されたらエライことだぞ!」

「演習場が破壊された時点でエライことですよ!……ってなんで!？」

わたしはちらりと目に入った光景に、慌てて後ろを振り返った。既に完成品となった人形達がついて来ているのだ。列を作りながら後ろを走ってきている。

「うわ!ばっか、まだ出てきちゃいかん!」

ラブレー教官がシッシツと追い払うと、人形達は顔を見合わせ肩を竦める。その顔は「ふう、やれやれ」とばかりにニヤついていた。

「くっ……かわいくない奴らだ」

帰っていく人形達に教官は吐き捨てる。

「教官が作ったやつじゃないですか?」

その声に教官はわたしに詰め寄る。

「なんでだよ」

怒り顔の教官にわたしは首を振った。

「わ、わたしじゃないですよ」

「あー」

後ろからの声にわたしと教官は飛び上がる。

「教官が『行くぞ！』って言ったからついて来てたんじゃないでしょうか。人数も教官が作った分くらいだったし……」

「カーチャ……、いたんだ」

わたしは思わず呟いていた。

「ひどい！」

カーチャが泣き顔になる横で、教官が手を叩く。

「ということは、だ。あいつもお前の命令は聞くかもしれないぞ？」

その時、またしても破壊の音と足に伝わる振動がわたし達を襲った。

「とにかく、行ってみるぞ！」

教官に言われるまでもなく、わたし達は駆け出していた。

目に飛び込んできた光景に、わたしは息を飲む。拳を振り回す巨人人形の周りに群がるのは、ファイタークラスの見覚えのある面々。既に武器を手にして攻撃態勢に入っていた。

「なんだこいつ！」

「固いぞ！」

叫び声の通り、暴れる巨人人形の足元に攻撃を加えているようだがダメージを負わせるまでには至っていないようだ。その中の一人、一際お美しい顔の人物にわたしは声をあげる。

「ヘクタ……ぐえっ！」

後ろから思いつきり衿元を引かれ、わたしは後ろに戻された。

「何するんですか！」

わたしが喉を摩りつつ抗議すると、ラブレ教官は小声で耳打ちしてくる。

「今出ていくのはマズイ！フランク教官達もいるじゃないか！」

教官の指差す先にはファイタークラスの教官達の慌てる姿もある。だったら尚更、事情説明を、と思うが『マズイ』というからにはマズイことがあるんだろう。多分、ラブレー教官の立場的に。しかし校舎を壊そうとめちやくちやな暴れる方をしている巨人人形と、それを止めている戦士達を見ていると暢気なこともいつてられないではないか。

「ちゃんと不慮の事故だって説明すれば分かってくれますよ！」

半分、自己弁護も含まれる台詞を言いながら、わたしが教官の腕を引っ張った時、フランク教官達の声が響き渡ってくる。

「見た目からしてラブレー教官の作品じゃないのか!？」

「いや、こんな大作は聞いていない！内部犯を装ったテロかもしれないぞ！」

うわあ、大事になってきてる！わたしが焦りながらラブレー教官を見ると教官は、

「う、うまくやり過ぎせば外部の犯行ということに……」

などと呟いている。いくらこの人でも、教官が人間のクズな発言をしているところは見たくなかった。その間にもフランク教官の雄々しい叫びが聞こえてくる。

「このゴーレムを操っている犯人が学園内に潜んでいるかもしれない！半分は搜索に当たれ！」

こんなに事が大きくなるよりは、こつてり怒られる方が良いじゃないか。わたしはラブレー教官を急かす。

「早く！ばれた時、余計に怒られますよ！」

「怒られるどころかクビだろ！俺はただでさえリーチかかってるんだ！」

「普段何やってきたんですか！」

生徒からの信頼も無ければ、教官の中でもそんな扱いなら辞めちまえよ！

わたしに反論しようとして足を踏み込んだ教官が足元に目をやり、飛び

上がる。

「うわ！なんだ、これっ」

下を見て、辺りに拡がる血の海にわたしも悲鳴をあげた。これはもしかして、カーチャの……。辺りを見回すがカーチャの姿がない。点々と続いている赤い跡を見ると、水道にでも行つたのかもしれない。

「か、カーチャです！あのこ、ちょっと重い病気なんです！」

「カーチャって誰だ！？」

ひええ、なんだこの混沌たる状況は！頭を抱えるわたしの横で暫く思案していた教官が、ぽんと手を叩く。

「そうか、そうだ……。あの子、カーチャを捜せ！」

「な、なんでですか？」

いないのは心配だが、カーチャが出てきたところでまともに働けないと思うのだが。わたしは遠目にロングソードを携えるヘクターの姿を確認すると唇を噛んだ。ラブレー教官は真剣な顔つきになるとわたしの肩を叩く。

「隠密部隊に動いて貰うんだよ……。行くぞ！」

微かな足音が聞こえる度に心臓が跳ね上がる。わたしは涙目を拭いた。抜き身の武器を持ったファイタークラスの面々がうろうろしている学園内にいるのだからしょうがない。クビのかかったラブレ教官の「お前も道連れにしてやるからな」という発言が無ければ、何もかも放り投げて帰っているところだ。

真っ暗な校舎内には他の生徒の姿は無い。とつくに生徒が居残れる時間を過ぎているのだから。やっぱりせめてラブレ教官と一緒にいれば良かった。わたしは後悔に奥歯を噛み締める。カーチャの搜索の為に二手に別れた方がいいが、いつ切り掛かれるかおっかなびっくりでまともに歩けないし、肝心のカーチャも見つからない。とりあえずソーサリークラスの教室にやって来たのだが、カーチャの姿は無かった。

「……参った」

声になっていない呟きを漏らすと、カーテンに身を隠しながら窓の外を見た。ここからでもグラウンドで暴れ回る巨人人形と、それを取り囲む戦士達の姿が見える。ローブ姿も増えているということは、他の教官達も駆け付けたらしい。

「ん？」

わたしは真下に見えた黒い影に目を凝らす。……カーチャだ！グラウンドの周りを囲む花壇の脇でオロオロとしているではないか。もしかして鼻を拭いて戻って来たら、わたしとラブレ教官がいないんで困ってる……？わたしは下手に動き回ってしまった事に小さく舌打ちした。直ぐに下へ向かおうと踵を返す。

すると、強い衝撃が肩を襲う。窓に体を押さえつけられ、一瞬にして動けなくなってしまった。カーテンのせいで全く見えないのだが、首筋に当たっているのは間違いなく剣とみていいだろう。

「……動くな」

言われんでも動かんわ！と言いたところだが、聞き覚えのある声に足の力が抜けそうになる。わたしが抵抗を見せない為か、相手がカーテンに手をかけるのが分かった。ちぎらんばかりに引かれた力ーテンが視界を開けると共に、肩にかけられていた手の力が一瞬にして緩められる。

「リジア!？」

目の前にいるヘクターが目を見開いていた。わたしは苦笑いで手を振るしかない。

「な、なんで……、いや、ごめん!」

土下座する勢いで頭を下げるヘクターに、わたしは慌てる。

「違うの!全面的にこっちが悪いから!」

無理矢理頭を上げさせるが、ヘクターは泣きそうな顔で口元を押さえている。

「いや、もつと慎重になつてれば……はあ」

こちらの事情など知らない彼は、剣を突き付けたことがよっぽどシヨックだったらしく、何度も剣先を見ては溜息をついた。うつつ、ごめんよー。

「とにかく、こっちに責任があるから!あなたは何も悪くないから、本当に」

ゆっくりと言い聞かせると漸く顔を上げてくれた。ほっ、と息をつくとわたしはヘクターの目をじっと見る。

「……ちよつとお願いがあるの。大変言いにくいことなんだけど」
わたしが言つとヘクターは真剣な顔つきになった。

「どうした?」

い、いや出来ればもつと軽いノリで聞いて欲しいところではあるんだけど。

「成る程ねー。だからあいつ、動きが鈍かったのか」

わたしの放課後の一連を聞き終えたヘクターは顎を撫でながら頷い

ている。

「鈍い？」

「今の話したトリジアは『命令してない』んだよね？何か気のせい
か、オロオロしてるだけにも見えただ。デカイから危なっかしい
けど」

成る程……。ということは巨人人形の方もわたしの命令を待ってい
たりするんだろうか？

「それよりカーチャって子、大丈夫なの？」

ヘクターが尤もな質問をする。カーチャが年頃の乙女であることを
考慮して、鼻血はないだろう、と『ちよつと特殊な発作持ちで水を
飲みに行った』と説明したのが悪かったかもしれない。しかし、そ
んな言い方しても実はあなたが一番付き合い長いんですよ、と言
いにくくなってしまった。

「……大丈夫、だと思う。それよりわたし、カーチャの所に行くわ
俺も行くよ」

ヘクターの申し出に、うつ、と詰まるわたし。そうして貰いたい
のは山々なのだが、色々厄介なのは間違いない。わたしの困惑を勘違
いしたのか、ヘクターが苦笑する。

「わかってるよ、他の皆には適当にごまかすから。ラブレー教官の
話しはしないよ」

そう受け取ったか。しかし協力して欲しいことも事実だ。わたしは
頷き、ちらりと窓の外のカーチャを見た。

「一つ注意、というか気をつけて欲しいんだけど、カーチャは男性
が苦手なのね。絶対に！目を合わせないようにしてくれろ？」

絶対、を強調したことにヘクターは驚いたようにたじろぐ。

「あと、下に降りてからもわたしがオツケー出すまで、隠れていて
わ、わかった」

厳戒態勢に戸惑った顔をしながらも、ヘクターは了解してくれた。
正直、なんでカーチャの為にここまでしてやらなきゃなんのだ、
という気もしなくもない。

校舎を出たすぐの植え込みに、身を隠すようにしゃがみ込むカーチャの肩をわたしはぽん、と叩いた。ヘクターには入り口で待機して貰っている。カーチャはびくん、となった後、わたしの顔を見て泣きついてきた。

「よ、よかった！無責任に帰ったのかと思った」

「……そうしようかと思ったけどね」

わたしはそう答えてから声を潜ませる。

「実は、後ろにヘクターがいるわ」

「ええ！」

カーチャの顔がみるみるうちに赤くなった。わたしは無言を言わず話し続ける。

「適当に理由つけて、彼にはカーチャの目を見ないように言っておいたから、何とか保ってちょうだい。手助けしてくれるらしいから」それを聞き終わると、暫く真つ赤だったカーチャの顔が、段々と暗く曇っていった。ふっ、と目を伏せると植え込みの枝をいじりだす。「良いわよね、リジアは……。普通に話せるし、そうやって頼み事も出来る仲なんだし」

こ、これは……。『恥ずかしさ』を通り越して『やさぐれモード』に入ったと見ていいんだろうか。とりあえずわたしはヘクターに出て来てもらうことにする。校舎の玄関口に向かつて手を振ると、あらかじめ打ち合わせした通りにヘクターが出て来た。彼にしては恐る恐るといった様子に見える。考えてみればわたしでも「女嫌いの奴だから気づかいよろしく」と言われても困る話だ。戸惑いの表情のままゆっくりこちらに來ると、わたしの後ろに隠れながらカーチャに挨拶する。もちろん視線は彼女に合わせないよう虚ろになりながら。

「ど、どうも。初めまして」

それは禁句かもしれない！わたしが慌ててカーチャを見ると、更に

顔を暗くする姿があった。気まずい。非常に気まずい。ヘクターも気まずいようでちらちらとわたしを見ている。

「……怒ってるよね？ やっぱり出て来ない方が良かった？」

そう耳打ちされるが「て、照れてるんじゃないかな」と答えるのが精一杯だった。

とりあえずラブレ教官を捜すことになったわたし達。教官がいな
いとカーチャに何をして貰いたかったのかが分からないからだ。

「全然やられそうにないわね……」

わたしは植え込みの影から巨人人形と皆の熱戦を窺い見た。人形の方もわたしと不器用に手足を暴れさせているだけだが、教官を始めとする戦士達の攻撃もまるで効いていない。

「早いとこ何とかしないと」

ヘクターの呟きにわたしは頷いた。物陰に隠れつつ、校舎をぐるつと回ると裏庭方面にやってきた。学園長が育てているモッコウバラの並ぶアーチを潜ると、わたしは正面を指差した。

「いた！」

指差す先にいたラブレ教官がびくんと体を揺らす。駆け寄ってみると明らかに焦っている。

「……もしかして帰ろうとしてませんでした？」

教官の姿を見て、わたしは訝し気に尋ねた。ラブレ教官は何故か教官用のローブを脱ぎ、茶の皮鞆を抱えていたのだ。

「そんな訳ないだろ？」

額に汗を光らせながら答える教官。うそつけ！

「呆れた教官ですね。行動によっては全部密告してもいいんですよ？」

冷やかな台詞を吐いたのはカーチャだった。教官は驚きに目を見開きながら、わたしに耳打ちしてくる。

「何かキヤラ変わってないか……？」

「まあ、ちょっと色々ありまして……」

わたしが無意識にヘクターの方を見たのに気付いたのか、教官は「あ！」と叫びヘクターを指差す。

「お前知ってるぞ！こいつファイタークラスの奴じゃないか！てめえ、『男』に身を売りやがったな！？」

「変なこと言わないでよ！」

わたしは詰め寄る教官に怒鳴り返す。ヘクターの顔が明らかに「本当に教官なのか？」と語っていた。

「彼はわたしのパーティメンバーなんです！だから協力して貰うことにしたんですよ」

頭に血を上らせながらわたしが言うと、教官は「そんなに怒るなよ」と頬を掻く。

「ま、いいや。丁度良いかもしれないな。いいか、これから俺の言う通りに動くんだぞ？」

帰ろうとしていた奴に指示されたくないが、一応話は聞いておくことにする。わたしは頷いた。

「まずこれから演習場に戻るぞ。計画は向かいながら言うから、ばつちり頭に入れるよ」

教官はそう言うと、演習場方向へと歩き出す。後ろに続くわたし達の顔は不信そのものだったに違いない。

「おし、やるか」

演習場に空いた穴から入り込みながら、ラブレー教官は腕まくりする。

教官の計画はこうだ。まず教官が完成させた分の人形達にグラウンドへと出陣させる。新たな敵の大群に向こうの皆は大混乱、そして巨人人形への意識は一瞬は逸れる。更に、既にグラウンドへと戻って貰ったヘクターには、それを増長させるように煽ってもらう。そしてその間にカーチャが完成させた人形達、すなわち「隠密部隊」にわたしを警護させながら巨人人形の元へ向かう、というものだ。

「本当にそんなんで、わたしが隠れるんですかね」

わたしはカーチャに指示する教官に尋ねた。

「大丈夫だろ。こんだけ存在感薄い上に、混乱の中に便乗するんだし」

教官は暢気に答えながら、カーチャの完成させた人形達を互いに肩車させる。三体が一組になり、トータルポール状態となった隠密部隊達。こうしないと周りを囲んでもわたしが隠れないからなのだが、一番下にいる子の膝がガクガクと震えていたりするのが不安でしようがない。

「どうです？」

試しに隠密部隊の中心に隠れたわたしは二人に聞いてみる。

「おおー」

「思った以上に存在感無いぜ」

とりあえず一安心というところか。カーチャは複雑な表情だが。

「これでわたしが人形に大人しくするよう命令を出せばいいんですよね」

教官は頷く。

「その後は見つかる前にさっさと帰った方がいいぞ。後は俺がごま

かしておく」

初めて見せるラブレ教官の頼もしげな表情に、わたしは全く信用せずに笑顔で応えた。

「行け！」

自らの完成品を送り出すラブレ教官の声が響く。何十という人形が声に応え、跳ねるように飛び出していった。

「皆、リジアをお願いね」

カーチャが言うわたしを取り囲む隠密部隊がこくこくと頷く。この子達とももうすぐお別れになってしまいかもしれないと思うと寂しい気もする。見た目はラブレ教官のミニチュアだというのに複雑だが、わたしは意を決してグラウンドへ飛び出した。慎重に、だが素早く歩を進める。

「な、なんだこいつら!？」

誰かの声に心臓が跳ね上がるが、人形の隙間から見える光景はファイタークラスの面々がラブレ教官作の人形達に翻弄される姿だった。すばしっこい動きに戸惑っている段階のようだ。おちよくるようにお尻を叩いたり、アカンベーと舌出す動きは上手いこと皆の目を奪っていた。とりあえずこちらに気付いた様子はない。ほっと胸を撫で下ろし、先へ進む。

グラウンドの隅を走って相変わらずじたばたと暴れる巨人へ急ぐわたしと隠密部隊達。膝が震える一番下の人形にもう少しだからがんばれ!と言いたくなった。表情は無いが必死さは伝わってくるのだ。しかし巨人人形の相手をしている教官、生徒は少なからずいる。このまま突っ込んで行って、本当に大丈夫なのか?と背中に冷汗が溜まる。その時、石を金属で削るようなざらつく音が響いた。

「こいつらには剣が効くぞ！」

ヘクターだ。彼に腕を切り落とされた人形が一瞬動きを止めるが、再び駆け回り始める。今の出来事が上手いこといったようで巨人人

形の周りにいた戦士達の視線が一瞬、グラウンドの中央へと逸れた。ヘクターに感謝しつつ巨人人形の背中側へと周り込んだ。そのまま体育祭用の物だろう設置前のテントの骨組みが横になっている影に隠れる。よし、これであいつに命令して動きを止めれば、と考えたところでわたしは動きをはた、と止めた。

ど、どうやって？ 大声で喚けば隠れてる意味無いじゃん！ かといって小声で囁いたところで意味無いだろうし……。耳が耳の役割をしているかどうかイマイチ分からないが、頭の位置が校舎の3階に届いてるあいつには並の声じゃ聞こえないだろう。

自分の詰めめ甘さと、ラブレ教官への怒りで混乱したわたしは、（や、やめなさい！ くら！ やめろー！）

意味が無いと判りつつも、声にならない声で喚き続けた。自分でも何やってるんだろ、と虚しくなってくる。すると、ピタッと動きを止めた巨人人形。余りにも突然のことに暫し思考が止まってしまった。人形を相手にしていた人々も同じだったようで、急激に静かになる。

「う、動かないな」

教官の一人の声に、わたしは漸く我に返る。ピクリとも動かない巨人人形をわたしはあらためて見た。これって凄く耳が良いんじゃないの？ というより演習場の壁を破壊した力といい、ものすごく性能が良いのでは。しかし感心している場合ではない。今もラブレ教官作の人形達を相手にした合戦は続いているのだし、早いとこ退散しなくては。

「……早く帰ろ」

わたしは溜息混じりに呟いた。そのままグラウンドの隅へとはける為、足を向けると、後ろから何かが迫る気配がした。ぞわり、と寒気がして振り返る。その何かを確認する前に、わたしの体は宙へと浮かんでいた。

「ちょ、ちょ、ちよつと待つ……」

わたしは遠ざかる地面に手を伸ばす。巨人人形がわたしの体を握り、

持ち上げたのだ。そのまま軽々と顔の前まで上げるとひよい、と自分の肩に乗せた。ぽかん、としていると下から声上がる。

「あーっ、てめー!!」

見るとこちらを指差し絶叫するのは緑頭のアントン。奴もヘクターと同じクラスだったな、とわたしは頬をひくつかせる。更にアントンの後ろにいる人物が余計な一言を発する。

「リジアちゃん？」

てめえ！名前言うんじゃないよ！！わたしは赤毛の戦士、クリスピアンを睨んだ。ヘクターがあちゃー、というように顔を押さえていた。

巨人がゆっくりと歩き出す。向かう方向は、演習場か？も、もしかして「帰ろう」の呟きに反応した！？わたしは慌てて巨人のもみあげ辺りを叩いた。

「ちよ、ちよっと！止まれ！止まんなさい！」

すると直ぐにぴたり、と止まる。なかなか忠誠的な奴だ。そのまま下へ下ろすよう指示すると、きちんと危なげないように運んでくれた。が、下ろされる途中で気がついた。これじゃわたしの命令で動いてます、って言ってるようなものじゃない？あのまま連れ去られていくように見せた方が良かったんじゃないだろうか。まずいと思った時にはもう遅い。

「どういうことだ？リジア・ファウラー」

わたしはよく知った声に恐る恐る振り向く。メザリオ教官が怒り、というよりは呆れた顔で腕を組んでいた。またお前か、という顔にも見えるが、そんなに問題児扱いするなんてひどい。

「教官もいたんですか」

わたしは作り笑顔で尋ねる。

「……いいから説明しなさい」

返ってきたのは冷たい言葉。どうしようか迷うが、言い訳出来そうにないメザリオ教官の雰囲気になわたしはふう、と溜息つく。と演習場方向を指差した。

「……ラブレ教官が」

「俺のせいにするなよ！」

がさり、と音を立ててラブレ教官が植え込みから顔を出す。直ぐにしまった、という顔になるが、

「捕まえろ」

メザリオ教官の一言にファイタークラスの皆が飛びかかった。

「てめーのせいで帰れなかったじゃねえか！」

「今何時だと思ってやがる！」

複数の力自慢にぎゅうぎゅうと押さえつけられるラブレ教官。

「おい！教官にそんな態度でいいと思ってるのか！？」

余計な一言で更に足蹴にされ、ぼろ雑巾へと変貌を遂げる。自分の人徳を分かっている人って可哀想。

「わわわかった！ゆるしてえ！」

ラブレ教官の悲鳴がグラウンドに木霊した時だった。

「体育祭は来週だと思っていたんですが」

凜と響く声に、その場にいた全員が声の方向に振り返った。

「学園長……」

教官達も姿勢を正す。金髪に美しい顔、金の刺繍がふんだんに入った白のローブは威厳を感じずにはいられない。アズナヴール学園長。プラティニ学園の学園長であり、最高融資者であったりもする。しかしたしに一番馴染み深いのは、

「久しぶりだね、リジア」

「は、はあ」

ニッコリと微笑む顔はローザによく似ている。彼はわたしの親友のお父さんである。

「ローザかと思った……」

いつの間にかわたしの隣に来ていたヘクターが呟いた。そのくらい顔は似ていたりするのだ。学園長は年齢不詳で皺一つ無い顔は「怪しい魔術でも使ってるんじゃないか」と変な噂が立つ程である。性格はもちろんオカマちゃんではないが。

「ラブレー教官」

学園長は片膝をつく、地面に転がるラブレー教官に語りかける。

「あなた又やりましたね？」

静かだが妙に威圧感を感じる学園長の声に、ラブレー教官の顔が恐怖に歪んだ。

「いやあ、その」

「ゆっくりお話伺いましょうか」

微笑む顔がとつても怖い。わたしは肩に力が入る。しかし、「また」とは？ 気になる一言にわたしは眉を上げた。

「よく分かりましたよ」

わたしの話を聞き終えた学園長は深く頷くと紅茶を口に運んだ。場所は学園の応接室。お偉いさんが来た時などに使う部屋だからか、やたら豪華な内装だ。フカフカのソファーにもたれていると疲れからか眠くなってしまう。メンバーはわたしとヘクター、メザリオ教官、ラブレ教官、そして学園長。……とカーチャ。そんな端っこにいるんだもん！忘れそうにもなるよ！

「間違いないな？」

メザリオ教官がラブレ教官に尋ねる。

「は、はい」

ラブレ教官はしおらしく答えた。そりやそうだろう。わたしが話した説明は我ながら事実だけの脚色無しだったし。勿論「わたしが」巨人人形を作り上げたことも話した。変に隠したりしない方がラブレ教官の反論を防げるだろうから、有りのままだけを話したつもりだ。

「管理が甘い教官の責任ですね。あなたは気にしなくてよろしい」
学園長はそうはつきり言うと、ニツコリと微笑む。か、神や。神がおる……。

メザリオ教官が大きな溜息をついた。てっきりわたしの暴走を咎めるのかと思ったら意外な話をする。

「この前の騒ぎで自分の……いや生物の細胞を使う実験は止めるように言っただろう。しかもリジア・ファウラーの特殊体質を知っていて作業を止めなかったのは、教職者として考えられない」

グラウンドでの学園長の話しにもあったな。気になったわたしは遠慮なく聞いてみる。

「2回目、ってことですか？」

「注意を受けたのが、だな。普段から何の研究をしているかなんて

いちいち詮索はしない」

メザリオ教官はそう言うのとラブレ教官の頭を叩いた。詮索しない、というのは一定の信用を持っていることが前提だ。それを裏切った罪は重いと思います！

「自分の爪を媒体、とか言ってたな、前は。幸い制御の出来ない出来損ない、というだけで力は無かったし、騒ぎが起きたのも放課後遅かったから被害は少なかったが」

「で、でも前はすぐに危険に気が付いて、自分で処分しましたよ？それに危険を冒さずに研究において何の進歩があるんです！？」
ラブレ教官は早口に捲し立てる。

「前回もあなたはそうやって反論しましたね。なぜ私が禁止したかわかりますか？」

淡々とした学園長の言葉にラブレ教官は暫く口を閉ざすと、首を振った。それは学園長の言葉が分からないというよりは、自分が周りに理解されない、という仕草に見えた。

「あなたが生徒に物を教える立場だからです。真理を追求するだけの研究に没頭したいならそれはそれでいい。でもそれなら教官という職を辞めてもらいたい。……生き物の細胞というのは未知の部分が大き過ぎる。今回のような大きなトラブルを起こす可能性が大きいんですよ」

学園長の話しは流石は神職の人間といったところで、ラブレ教官も反論は無くなった。が、すぐに顔を上げる。

「『研究を続けるなら教官を辞めてもらいたい』ってことは、クビにはならないんですか！？」

言葉を良いようにしか受け取らないやつだな、とわたしは呆れそうになったが、学園長はにっこり頷いた。ええ！いいの！？ラブレ教官以外が眉間に皺寄せ、ラブレ教官が満面の笑みになったところで学園長は口を開く。

「職務は全うしないとね。……来週の体育祭までに、使用するゴーレムを一人で揃えたら、ということにしましょう。こちらの事情だ

けで体育祭を中止にしたら、生徒が可哀想です」

「え、それは……、今回の分も1年がかりだったんですが……」
頬をひくつかせながらラブレ教官が呟くが、学園長は笑顔のままだ。

「それは特殊な媒体、などということをやったからでしょうか？普通のゴーレムなら百や二百、軽い軽い」

「えっと、せめて授業数を減らしてもらえませんか？」

「そんなもん、生徒に説明できん」

ばつさり切ったのはメザリオ教官。ラブレ教官はがっくりと肩を落とすとわたしを見る。

「手伝ってくれたりは……」

「ない」

わたしの即答に教官は再び肩を落とした。

「納得いかない部分も多かったわねー」

わたしは頭の後ろで腕を組み、背中を反らした。お咎め無しとはいえ、やっぱりわたしもやったことについてはモヤモヤがある。隣りでカーチャも頷いている。

「結局、ラブレ教官も許してもらえたわけだしね」

カーチャの呆れた声にわたしも頷きつつ、ふと思う。何だかんだいっても、ラブレ教官って教職は辞めたくなかったのかな。それが彼を人としての理性を保つ人間に留めているのかもしれない。

「演習場、どうするつもりなんだろう」

グラウンドを歩きながらわたしは破壊された演習場の方へ目をやる。暗くてよく見えないが、人形達も今はあそこで処分を待っている。

「……あの学園長のことだから、人形にも寛大だと思うよ」

ヘクターの言葉にわたしは頬を掻いた。考えていることがわかったらしい。

「じゃあ、私はこっちだから」

裏門を潜ったところでカーチャが通りを指差す。家が近いのかわたしとヘクターと違って徒歩のようだ。わたしはバス停のベンチに腰を下ろしながらカーチャに手を振った。

「気をつけてね」

「うん、また明日ね」

カーチャも手を振り返す。また少し距離が近づいた気もする。カーチャはわたしの隣りにいるヘクターにも手を振るべきか迷ったのだろう。目線が泳いでいる。わたしがどうフォローすべきか、と思った時だった。

「あのー」

ヘクターが目線は微妙に外しながらカーチャに尋ねる。な、なんだ、何を聞く気なんだ。予定外の出来事にわたしとカーチャに緊張が走る。わたしとカーチャの雰囲気緊張に包まれる中、ヘクターの声が通りに響いた。

「前に何処かで会ったこと無い？気のせいだったらごめん」

おお！とわたしは感嘆する。す、すごい。漸く記憶の彼方から引張ってきたか！？わたしはカーチャが驚きに目を見開く姿を見た。嬉しいはずだが、例の発作が起きるのではないかとひやりとする。

「はひよれふはによにれ！？」

意味不明な叫びにぎよっとするわたしとヘクター。ばっ！とカーチャが顔を押さえる。そしてそのまま背中を向けると走り去ってしまった。

「……ああ、やっぱり怒っちゃったのかな？馴れ馴れしかった？」

ヘクターが気まずそうに頭を掻いた。

「さ、さあ……」

わたしは曖昧に返事をしながら、目線を泳がせる。通りに描かれた赤い点々は、きつと暗がりで見えないうようにした。

眩しい日差しが入る廊下を抜けると、今日も陰気な空気たつぷりの

ソーサラークラスの教室が見えてくる。

「おはよ」

まだ少し眠い目をこじ開けながら教室のドアを開け、始めに目が合ったキーラに手を上げる。

「おはよう。今日も一緒に来たの？」

うふふ、と髪を揺らしながら応えるキーラ。朝から色っぽいですね。キーラがわたしの腕を取り、

「うらやましいわ」

と心のこもっていない声で囁いた。

「自分だってクリスは？相手にしてもらえなくて可哀想じゃん」
わたしが言くとキーラは肩を竦める。

「相手にする理由が無いもの」

「おはよー」

少し眠そうな顔でセリスがわたしにもたれかかってきた。

「おはよ、重い！」

わたしはセリスの背中を押す。「あー、既に帰りたいわ」というぼやきに呆れながら自分で立たせる。そこへ後ろから声がかかる。

「おはよう」

「うわあ！びっくりした、おはよ」

わたしの反応に苦笑いのカーチャ。でもどこか嬉しそうだ。

わたしは窓際の自分の席に行くと重い鞆を置く。そして窓を開け、顔を出した。暖かいローラスの風が頬を撫でる。朝の眩しい日差しがすつ、と曇った。

「おはよ」

窓の外、わたしの声に反応して大きな影と小さな影がいくつも動く。学園警護の任務を担った巨人人形、そして何十というラブレ教官のミニチュア達が、わたしを見て手を振った。

f i n

「……というわけで、このクラスからお手伝いを出すことになりました、つと。適当に二、三人ぐらい決めて、係に決まった人は放課後残ってねー」

どこか薄暗い教室内、やる気の無い声で生徒に呼び掛けるのは、シャイエクラスを受け持つシャイエ教官だ。投げナイフや暗器の扱いを専門にする女性教官である。それに応える生徒もやる気が無い。盗賊が集まるこのクラスには単なる興味本意で学園に集まった者ばかりだ。ちよつとした情報収集にも都合が良い為に在籍しているが、学園の生徒が楽しむようなお祭りにはあまり興味をそそられない。窓際の席で足を机に放り出し腕を組むフロロもそれは同じことで、今教官の話した「体育祭」なる行事にもあまりわくわくとした感情は湧いてこなかった。リーダーがそんな調子なら仲間も同じこと。同じモロ口族の三人、カロロとニウロ、パウロも教官の話などおこまい無しにおしゃべりを続ける。

他の生徒も似たようなものだ。協調性など皆無とっていいメンバーの集まりでの係決めは、話し合いなど意味を持たない。シャイエ教官もそのあたりは充分心得ているので、自分の好き勝手な指名に変更することにした。

「どーいーつーにーしーよーうーかーな、つと」

生徒の頭を指差しながら教官が呟いていると、
がたん！

一人の生徒が勢いよく立ち上がり、手をまっすぐ伸ばした。

「私にやらせて下さい！」

ブラチナブロンドを綺麗に短く整えた女生徒に、シャイエ教官は笑顔のまま眉を上げる。真っ直ぐで真面目だが少々問題のあるヴェエラ。正直気乗りのしない立候補者だが、他を探すのも面倒ではある。

「ま、いっか」

シャイエ教官はそう言つて頷いた。

「でも一人じゃ厳しいかなー？他にやりたい人ー？」

教官の言葉に皆、一斉に目を反らす。ただでさえ面倒な仕事に、ヴェラという要素まで加わつてはやりたい理由を探す方が難しい。教室内のぴりぴりとした空気にフロロはふつ、と笑いを漏らす。ヴェラの不人気振りも大したものだ。入学当初はちやほやとする者も多かったというのに。フロロがニヤニヤと人間達を見ていた時だった。「フロロさんが良いと思います」

真つ直ぐとこちらを指差すヴェラに、フロロは椅子から転げ落ちそうになった。モロロ族の仲間も驚いてフロロとヴェラを交互に見る。「な、なんでだよ！」

フロロが噛み付くと他の仲間からも「なんでだー」「なんでー？」と騒ぎ立てる声が上がった。ヴェラはゴニョゴニョと口を動かしている。

「い、一番器用ですし、何でも出来るからです！」

明らかに適当な理由付けにフロロはイライラするが、周りの生徒からもそれを後押しする声上がり始めた。

「そうだなあ、仕事は罷設置みたいだし、フロロが一番良いんじゃない？」

「カロロ達も参加してやれよ」

好き勝手な言い分にシャイエ教官がパンパン、と手を叩き止めに入った。

「はいはい、お前らはやりたくないからって人に押し付けない！」

教官の言い方にてつきり任を外れると思つたが、フロロは続く教官の言葉にがっかりする。

「でもヴェラの人選も悪くないわね。というわけでおチビちゃん達、よろしく」

フロロは反論しようとしたが、窓の外にちらりと写った景色に口を止めた。グラウンドの向こう、第二演習場の方角だ。金色の見慣れた頭が動いている。リジアだ。隣にもう一人少女がいるが、それは

誰なのか判らない。

「……まあやつてもいいかな」

リジアが何か行動している。面白そうだ。フロロは視線は窓の外のまま、にやりと笑い呟いた。

プラティニ学園の体育祭は「体育」と名付けているものの、他の教育機関で催されるものとは毛色が違っている。徒競走や玉転がしといった代表的なものが無い代わりに取り行われるのが『狩り』である。学園の教官が造りあげた傀儡を片っ端から狩っていき、倒した数で勝敗が決まる。学年対抗戦にしているせいか最上級生である六期生が主役になるイベントになっていて、下級生には余り評判はよろしくない。それが何故ダラダラと毎年開催されているのかというと、一番楽しみにしているのがこのプラティニ学園の学園長であるからに他ならない。

まああのおっさんがやりたいならしょうがない。フロロは学園長の顔を思い出し納得する。

「さあで、と。ちゃちゃつと終わらせちゃうわよー」

シャイエ教官が大きな箱を抱えながら、フロロ達が待たされていた廊下へやって来た。

「何が入ってるの？」

「良いもの？」

「食べ物？」

シャイエ教官は足に絡み付くフロロ族達を適当にあしらうと、ボスン、と音を立てて箱を床に置いた。

「アラームなんかのトラップを適当に持って来たから、学園中に設置してちょうだい」

フロロは教官が持って来た箱を覗いて見る。

「煙幕弾に鉄線のスネアにトラバサミか。結構えぐいな」

ふと手に当たった爆発物にフロロは顔をしかめる。生徒が怪我をす

る心配は無いのだろうか。

「大丈夫でしょ、皆頑丈だし」

教官の言葉には愛があるのか無いのか、いまいち掴めない。フロロの横から箱を覗き見ながらヴェラが首を傾げる。

「でも私達が罠設置するなら、私達二人は罠の場所も種類も把握してることになりますよね？不公平にはならないんですか？」

いかにも真面目な生徒の質問にシャイエ教官は苦笑した。

「別にいいでしょ、このぐらい。手伝ってくれるんだし。役得ってやつよ」

それに、と教官は付け加える。

「ソーサラークラスの生徒も傀儡作りを手伝ってるらしいから、その子達だって有利にはなるわよね」

「だってさ」

「見に行きたいな」

「面白そう」

カロ口達が口々に言うのを教官が手で制す。

「こつちが終ったらね。これだけじゃなくてまだまだあるのよー」

それを来週までにやつつけちゃわなきゃいけないんだし」

シャイエ教官はのほほんと言うと立ち上がった。

「じゃあ私はグラウンドの方に落とし穴作りに行かなきゃいけないから、こつちはよろしくー」

教官がそう言って立ち去ると、ヴェラはゆっくりとフロロ達に向き直る。

「勝負しませんか!？」

びしり、とフロロに指を突き付けながらヴェラは言い放った。

「……勝負だつて」

パウロがひそひそとフロロに耳打ちしてくる。フロロはひよいと肩を竦めると、「こんなことだと思った」と呟いた。

「この前のクエストで私が足を引っ張ったのは事実です。でもあなたの言葉に私は自尊心を傷つけられました!」

「……この前、って？」

二ウロがカロロに小声で尋ねた。

「このあいだまでフロロが出掛けてたアレだろ？音楽祭がどうのって……」

「ああ、この姉ちゃんが聞き込みもまともに出来なかったってやつか」

パウロの言葉にヴェラは頬を引き攣らせる。

「と、とにかく！私の中であなたを越えなくてはこの先、前に進めない気がするんです！」

『気がする』とはまた随分曖昧な言い分だな、とフロロは頬を掻いた。カロロが面白そうだとニヤニヤしつつヴェラをからかう。

「そんなこと言ってもさあ、姉ちゃんじゃフロロには適いつこないよ。フロロは僕達の中でも器用なんだぞ？」

「あれだろ？フロロに『盗賊向いてない』なんて言われちゃったからムキになってるんだ」

パウロもからかいの輪に加わった。

「そういやそんな事言ったっけ」

当のフロロが言うとうヴェラは顔を赤くする。

「い、言いましたよ！ひどいと思わないんですか！？」

「酷いも何も、本当のことじゃん」

フロロはあっさり答えた。ヴェラは言葉をつまらせる。

「なんで酷いんだ？」

「人間の中じゃ、本当の事でも相手が傷つくから言っちゃいけないんだって」

「なんだよ、変なの」

わーわー騒ぐモロロ族にヴェラが「うるさい！」と怒鳴る声。フロロは耳を塞いだ。

「別にいいけどさ、勝負したって。どっちが多く罠の設置が出来るか、でいいの？」

フロロの質問にヴェラは落ち着きを取り戻すと大きく頷く。

「そうですね。この箱が空になるまで、が勝負です。三人には判定員になってもらいましょう」

指差されたカロ口達は顔を見合わせた後、くすくすと笑った。

「僕達、何もしなくていいんだね」

「ラッキーだね」

「おい、グラウンド行こうぜ！」

駆け出す三人のモロ口族に再びヴェラが怒鳴る。

「人の話し聞いてください！」

「参りました」

すっかり暗くなった廊下の隅、フロロに土下座をするヴェラの姿があった。綺麗な銀髪が床に擦り付けられた姿はあまり気持ちのいいものではない。結果はフロロの完勝、いや勝負にもなっていないヴェラの出来にフロロは溜息しかなかった。

「あのよー、……まあいいや」

「何ですか！言って下さいよ！」

ガバツと上げたヴェラの顔は半泣きの表情だ。フロロは暫く頬を掻いていたが、ゆっくりと口を開いた。

「まず、姉ちゃんはある畀に引つ掛かるかい？」

フロロが指差す先、無造作に置かれたものはヴェラが設置したトラバサミだ。

「避けますね。……いや暗かったら分らないかも」

「体育祭は昼間だよ」

フロロの間を置かない突っ込みにヴェラは口籠る。

「だ、だって隠すものが無いんですもん……。屋外なら草とかありますけど」

「ちよつとその角曲がつて、教官室に誰がいるか見てきな」

フロロの急な申し出にヴェラは首を傾げた。

「何故です？」

「いいからいいから」

シッシツ、と手を振るフロロに渋々といった様子でヴェラは立ち上がる。膝の埃を払うとそのまま言われた方向へと歩き出した。明らかに何も警戒していないヴェラの横顔が廊下の角に消えていくと、フロロはにやりと笑う。その瞬間、

「キヤー！」

ヴェラの悲鳴と共に、白い煙りが沸き上がる。続けざまに悲鳴を掻

き消す無機質なアラームの音。

「ど、どこ！？止めて下さい！」

煙りのせいで足元が見えず、アラームの音が焦る気持ち加速させ、ヴェラはパニックになった。悲鳴混じりの声でフロロに助けを求めるが変化はない。

「フロロさん！」

怒声を上げた瞬間、ぴたりとアラームの音が止み、ヴェラは床にへたり込んだ。煙りも徐々に晴れていく。視界が開けていくとフロロが窓を開け放つ姿があった。

「どうだった？」

暢気に尋ねるとフロロは窓から床に着地する。

「……びっくりしました」

漸く発せられた自らの声にヴェラは喉を摩った。ただの白煙だったらしく、痛みは無い。煙りが消えつつある廊下の床をフロロが指差す。曲がり角すぐ、窓からの薄明かりで影が出来ている。微妙な位置に発動済みの白煙のトラップがあった。

「人の動線を読む。トラップ設置の基本だね。別に隠す物が無くても盲点をつけるもんだ」

フロロはそう言うのと肩を竦め、辺りを見回す。

「ところでカロ口達はどこ行ったんだ？」

「あ、さっき『グラウンドの方が騒がしい』とか言って行っちゃいました」

判定員を頼まれたのにいい加減なものだ、とフロロは眉間に皺寄せるものの、モロ口族なんてそんなものだ。直ぐに納得すると耳を澄ませた。確かにグラウンドの方が騒がしい。何か巨大なものが暴れているような音に、武器を奮う喧騒もする。

「俺も行ってみようっと」

フロロが駆け出そうとした時、ヴェラが慌てて尻尾を掴み止めてくる。

「ぎゃー！」

堪らず悲鳴を上げると、ヴェラは直ぐに手を離れた。

「ご、ごめんなさい！」

「尻尾だつてイテェんだぞ！あんた自分に無いからわかんないだろうけどさ」

涙目で尻尾を摩るフロロにヴェラは何度も頭を下げる。

「ごめんなさい！ごめんなさい！でもお願い！弟子にしてください！」

「もういいよ……って、はあ！？」

フロロは再び土下座の体制に入ったヴェラを、呆気に取られて見た。「お願い！私を一人前にして下さい！」

いきなり何を言い出すのか。この人の行動は理解不能過ぎる。フロロは頭を下げ続けるヴェラを暫く唖然としたまま眺めていた。

「姉ちゃんは何で盗賊になろうと思ったんだい？」

とりあえずヴェラを落ち着かせてから、廊下に座るとフロロは尋ねる。

「駆けつこが速かったからです！」

笑顔で答えるヴェラにフロロは顔を引き攣らせた。

「……まあ、イメージとしては盗賊はすばしっこいもんな」

戦闘で前線に出て、素早さで敵を翻弄する役目を負うのも盗賊の一面だろうが、実際の仕事を考えると器用さの方が大事だ。手先の器用さに加えて、要領の良さ、これが何よりも重要だとフロロは考えていた。しかしヴェラに抜け落ちた部分を指摘することになるので、フロロはとりあえず黙っていることにする。

「……まあいいんじゃない？きつかけなんて大した問題じゃないしで、何で俺の弟子になりたいの？」

「弟子になりたいというか……、立派な盗賊になりたいです。今のままだと、パーティ内でも居場所が無いというか」

ヴェラの言葉にフロロは緑頭の目付きの悪い剣士や、乗り心地の良さそうな肩をした体格の良い戦士などが思い出された。彼等が悪いわけではないが仲間意識が足りない気もする。フロローが少ないの

かもしれない。

「成る程ね。じゃあ盗賊に一番大切な仕事は何だと思っよ？」

「……め、目立たないこと」

ヴェラの答えにフロロは頭を掻く。初めて聞く意見で斬新ではある。暫く黙っていたフロロだったが、何か思いついたように口に笑みが漏れた。

「正解は『情報収集』だ。これさえあれば足が遅かろうと、トラップが解除出来なかつと生きていけるんだ」

フロロの怪しい笑みにヴェラは興味深そうに頷く。

「成る程！良くわかります。よく酒場で聞き耳立ててるイメージありますもんね」

「そう、それに自ら動くことも大事だな。聞き耳立てるだけじゃなく、首を突っ込む。これぞ盗賊の基本！」

フロロのビシツと立てられた人差し指を、ヴェラは「おおー！」と感嘆の声と共に見つめた。

「てな訳で、今グラウンドの方が騒がしいね。丁度いいから調べてみるか？」

フロロは単に自分が興味があつただけだったが、ヴェラの教育を体よく切り上げる良いきっかけに手を叩く。ヴェラも乗り気で頷いた。「わかりました！何だか盗賊の面白さが漸く分かってきた気がします！」

「いいね、その調子だ！」

二人は頷き合つとグラウンドへ向けて走り出した。

「何だ、ありゃ」

フロロは校舎の入り口からグラウンドを眺めると、初めて見る異質な生き物に目を丸くした。

「カッコイイですね！」

ヴェラが目を輝かせるが、フロロには暴れる巨体の姿がある人物が

似ていることが気になった。

「ラブレール教官に似てるな」

「誰です？」

魔術師系クラスの授業しか受けもっていないラブレール教官をヴェエラが知らないのは当然の事だった。が、フロロはちつつ、と指を振る。

「学園内の人間は全部押さえとかなきゃ。あれは魔術師クラスじゃ

『変態教官』で通ってる若い教官だよ」

「変態なんですか？」

「なんでも研究内容が不気味だとか、見た目が気持ち悪いとかそんな理由みたいだけど」

フロロは答えながら周りの状況を窺い見る。混乱気味に手足をばたつかせる謎の巨大生物に、それを囲む戦士達。設置前のテントがグラウンドに置いてあるのを見ると、ファイタークラスのお手伝いを邪魔しているというところか。しかし何故？

「フロロー」

声の方向に二人は振り返った。モロ口族の三人が手を振りながら走ってくる。カロロが息を弾ませながらグラウンドを指差し口を開く。「あいつすごい強いんだよ！ファイターの剣が全然効かないんだ」

「でも動きがマヌケでもしろいよ！何がしたいんだろうっね」

「リジア達が向こうにいたよ！何かこそそしてたけど」

パウロの言葉にフロロは身を乗り出した。

「リジアが？こそこそ、ねえ……」

「ラブレールってあの変な教官と一緒にだったよ」

ニウロが言っているとフロロとヴェエラは顔を見合わせた。

「これは、面白い匂いがするなあ」

フロロがにやつくときヴェエラがきょとんと答える。

「匂い？それより手伝わなくて良いんですか？校舎、壊されたりしませんかねえ」

巨人を指差すヴェエラにモロ口族が揃って首を振る。

「それは俺達の仕事じゃないな。俺達がやるのは……」
フロロはグラウンドを指差した。
「匂いの元を嗅ぎ回ることだ」

「よし、これからの行動を言うぞ！」

フロロは輪になった仲間の顔を見渡した。ワクワク顔のカロロ達とは対比的に、ヴェラは不安と疑問が入り混じった微妙な表情だ。

「カロロ達は適当な場所に隠れてグラウンドを見張っててくれ。」
「探り」は俺と姉ちゃんでやる」

フロロが告げると四人とも露骨に不満そうな顔になった。

「えーつつまんじゃないよ！」

「この姉ちゃんがやるの？無理だろ」

「僕達の方が出来るぞ！」

口々に文句言うカロロ達を手で制すとフロロは溜息をつく。

「今日は姉ちゃんの修業の日なんだ。しょうがないだろ？」

カロロ達はそれを聞くと「仕方ない」といった様子で顔を見合わせた。

「皆で『聞きに』行けばいいじゃないですか」

ヴェラが不思議そうに聞くと、フロロが思い切り大きな溜息で返す。
「そろそろ行っても目立つただけだろ？本来なら一人で行動するのが基本。あと何？『聞きに行く』って。ラブレー教官に『あんたがやったんだろ？』って聞きに行くつもり？素直に答えるかもわからないし、それじゃうま味が無いだろ」

「うま味？」

「なるべく深層まで調べて、然るべき人に売り込むんだよ」

フロロの答えにヴェラは目を丸くした。

「う、売り込むって……、お金取るんですか！？」

「例えだよ。物事が自分にプラスになるよう動かす、盗賊の基本だ」
フロロが強調した最後の言葉にヴェラは大きく反応する。

「成る程！」

ウンウン、と頷くヴェラにフロロとカロロは顔を見合わせる。

「……何となくこの姉ちゃんの操縦が分かってきたな」

「それでも大変そうだけど、頑張つてよフロロ」

モロロ族四人が頷き合ったその時、

「こいつを動かしてる犯人が何処かにいるかもしれん！半分は搜索にあたれ！」

グラウンドで巨人を相手に剣を振るっていたファイタークラスの教官が叫んだ。フロロが顔を上げると何人かの生徒が頷き、校舎へ走って行くのが見えた。その中の一人、銀髪に長身の男に目が止まる。「ヘクターだ」

そう呟くとフロロはにやりと笑う。

「良いネタにありつけそうだな、行くぞ！」

フロロに促され、走り出したヴェラは先に行くフロロに尋ねた。

「な、なんで良いネタがありそうなんです？」

「人間の中には事件を引き寄せる体質の奴がいるもんなんだよー！本人にはその気は無くてもな！そいつにくつついてりゃ『うま味』は降ってくる！」

「成る程！」

元気の良い返事にフロロはちらりと後ろを見た。

「……何やってんの？」

「何って……、メモ取ってるんですけど？」

小さな手帳にペンを走らせるヴェラに、フロロは呆れながら少し感心する。走りながら中々器用な事をする。その器用さが違う方向へ向かえば尚いいと思うのだが。

「何処行くんですか！？」

「とりあえずヘクターの兄ちゃんを尾行る。かなり難度高いから気合い入れるよ！」

相手は腕の良い戦士だ。敵の気配を読む訓練はやっているだろうし、こちらにはヴェラがいる。久々に胸が高鳴る状況にフロロは走るスピードを上げた。

「これ持つてな」

フロロが金属製の何かを投げると、ヴェラは悲鳴を上げそうになるのを堪えながら受け取る。見ると手に収まるサイズのネジ回しだ。

「いいかい？ 万一見つかったら『体育祭の罠を設置してた』っていう話にしるよ？ 変に慌てたりするなよ」

「こ、ここですか？」

震える声でヴェラは足元を指差す。校舎の外側、窓の下にある落下物防止の狭い縁は、歩く為のものでは無いはずだ。二階でもヴェラからすれば充分怖い高さだというのに、すたすたと歩くフロロを見て、体の小ささはあるとしてもヴェラは感心してしまう。

「で、でも不自然じゃないですか？」

「相手が訝しんでたとしても、ごり押しした者勝ちだろ。良い盗賊ってというのは嘘をつくのも上手いんだ」

「な、成る程」

ヴェラは急いでメモを取った。メモを取る余裕があるなら大丈夫かとフロロは移動のスピードを上げようとした。すると、視線の下に怪しい人影が写る。既に日が落ちきった時間、普通の生徒は学園内にはいないはずだ。しかし下にいる生徒らしき人物はグラウンドの隅に設置された水道で何やらバシャバシャと顔を洗っていた。服装からしてファイタークラスにも見えない。黒のローブということはソーサラーか。

「……何やってるんですかね？」

ヴェラが小声で尋ねながら眉を寄せた。暗闇の中、水の音が響くというのも中々ホラーな雰囲気だ。グラウンドの方から聞こえる喧騒が無ければ、もっと不気味だったかもしれない。

「鼻洗ってるみたいですよ？」

ヴェラの言葉で漸く、フロロの頭に少女の名前が呼び起こされた。

「まーた鼻血出したのか」

フロロはそう言うと、尻尾を器用に窓の縁に掛け、身を乗り出す。

「よう」

「あびよっ!!」

不意に掛けられた声に少女の体が一瞬、宙に浮いたように見えた。

「よう、カーチャの姉ちゃん。またやつちやったのかい？」

フロロが聞くと黒髪の少女カーチャは苦笑いで答える。

「こんな時間まで何やってんの？」

続けざまにしたフロロの質問にカーチャはびくり、と肩を震わせた。慌てたようにフロロに言い返す。

「そ、そっちこそ何やってるの？そんな壁にへばり付いて」

「俺達も体育祭の準備で居残りなんだよ」

「そ、そうなんだ……」

そう呟き目を伏せるカーチャにフロロはにやつと笑った。

「否定しないんだな」

「へ？」

「俺達『も』、って言ったのを否定しないって事はカーチャも体育祭の準備で居残りなんだろ？ソーサークラスは何やらされるんだっけ？」

フロロが隣りを見るとヴェラは少し考える。

「えっと、確か傀儡の作成を手伝うとか……」

「ちよつと私、用事あるから行くね!？」

大声でカーチャに遮られ、ヴェラは危うく手の中のネジ回しを落としそうになった。駆けていくカーチャの後ろ姿をぽかん、と見つめる。

「これでソーサークラスからの手伝い組が何かやらかしたのが分かったな」

「あ、それで慌ててたんですか」

ヴェラの間の抜けた返事に被さるように、グラウンドの喧騒が大きくなった。暗闇に巨人の影がゆらゆらと揺れている。妙な踊りをしているようにも見えて滑稽だ。

「アルならもつとネチネチと聞き込むだろうな……。まあそれは俺

の性格には合わないや。よし、次行くぞ！」

「え、あ、はい！」

ヴェラはフロロの小さな背中を追い、遅れないよう足を進めた。

「何、やってるんですかねえ……？」

窓から教室内を覗き込み、見えた光景にヴェラは首を傾げる。ここはソーサラークラスの教室だろうか。黒板に残る古代語や教室の後ろに備え付けられた発動体が並ぶ棚など、少し見慣れない雰囲気だ。その中央に二人の人物。見知った顔だが状況が妙だった。金髪のやや小柄なリジアに銀髪頭のヘクターが土下座している。リジアの方もそれを止めさせようとしているようだ。二人してコメツキバツタのようになっている光景が面白い。

「リジアを侵入者と間違えて、兄ちゃんが押さえつけたんだってさ」フロロがそつと呟いた。

「聞こえるんですか!？」

ヴェラは驚いてフロロを見る。しっ、と注意されて慌てて顔を竦めた。ヴェラには断片的にくぐもった声しか聞こえない。窓はきっちり閉められているのだから当たり前だ。次第に声のトーンが落ちていき、完全に聞こえなくなる。

「……あの二人、付き合ってるんじゃないですか？」

暇になったヴェラが珍しくニマツと笑い、からかうようにフロロへ問うが返ってきたのは溜息だった。

「あんた程勘の働かない人も珍しい……」

「な、わかんないですよ!？フロロさんが知らないだけかも！」

しかしフロロは「ないない」と手を振った。ヴェラはむう、と黙り込む。

「……よし、ラブレー教官の教官室を探すぞ」

「え、ちょっ、なんでです？」

急な展開についていけずにヴェラは慌てた。中の二人の会話を聞い

てのことだろうが、ヴェラには聞こえないのだ。

「移動しながら話してやるから」

フロロに促され、ヴェラは仕方なく後を追う。窓から頭を覗かせないよう、そろそろと這っていくと隣りの教室を再び覗き込んだ。誰もいないのを確認すると二人とも体を滑り込ませる。フロロに上着の裾を引っ張られ机の下に隠れると、廊下を先程の二人が駆けて行くのが見えた。フロロが大きく伸びをする。

「さて、誰もいなくなったところで教官室探すか」

「ラブレ教官ってソーサークラスの受け持ちなんですよね？だったらこの近くなんじゃないですか？」

フロロが大きく目を見開くのを見てヴェラは相手を軽く睨んだ。

「……何ですか？」

「いや、初めてまともな事を言っただけ、と思っただけ」

「馬鹿にしないで下さい！」

顔を赤くするヴェラを適当に受け流すと、フロロは真顔に戻った。

「早いとこ移動しよう。ふざけてる場合じゃなかった」

「何か……あつたんですか？」

ヴェラの問いにフロロは「歩きながら」と廊下を指す。

「グラウンドで暴れてるあのでっかいのは、やっぱりラブレ教官のゴーレムらしいな」

「じ、じゃあ教官捕まえてグラウンドの皆に差し出しましょう！」

フロロは隣りを歩くヴェラに指を振った。

「それがなあ、最後の仕上げをやってあんな化け物にしちゃったのはリジアみたいなんだ」

ヴェラはうつ、と言葉に詰まる。が、「でも」と続けた。

「それでもそんな危険がある事をやらせた教官の責任だと思いますよ？その、リジアさんは色々と有名な方ですし……」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか。まあ俺もこう見えても『仲間意識』ってやつは持つてるんでね。リジアが学園から追い出されるようなことは避けたいわけよ」

フロロの言葉にヴェラは大きく目を見開いた。

「お、追い出される？」

「問題起こすことの多いお嬢さんだからね。ここぞとばかりに退学に持ってく連中だっているかもしれないだろ？」

「鍵掛ってますね」

すんなり見つかったラブレ教官の教官室だったが、当然のことのように家主のいない部屋は施錠されていた。

「俺にかかったちゃ、んなもん掛かってないのと一緒にだけだな」

そう言いながらフロロが懐から取り出したのは、二本の針金だ。早速鍵穴に突っ込みながらヴェラに問いかける。

「姉ちゃんも練習してるか？ 鍵開け」

「わ、私はその、勝手に鍵開けるなんて泥棒みたいだと思うんで…

…」

「バツ力だなあ。洞窟奥の宝箱前にしても同じこと言うのかよ」

それを聞いてヴェラは言葉に詰まる。考えていなかったらしい。

「良い盗賊になりたいなら基本だぜ、っと。ほい、開いた」

関心がなかったヴェラでもフロロの鍵開けが素早いことは分かる。

まるで盗賊になるために生まれたような人じゃないか。

「あと注意事項としては鍵穴付近は傷つけないことだな。よし、入るぞ」

そろそろと扉を開け、室内を覗き込む二人の顔が中が見えるにつれて険しいものに変わっていった。

「きつたねー……」

お世辞にも綺麗な部屋に住んでいるとは言えないフロロが顔をしかめる散らかりようだ。

「うわあ……私、こういうの苦手なんですよね……」

ヴェラは入るのも躊躇っているようだ。フロロが後ろから押して部屋に押し込むことによって漸く足を踏み入れる。

「……で、ここで何すれば良いんです？」

ヴェラは手元にあった妖しい色合いの液体が入った瓶をつまみながら、フロロに聞く。

「ラブレ教官が本当にゴーレムが巨大化することを知らなかったのか、それを覆すような証拠を探す。研究レポートみたいなのは絶対有るはずだろ？」

「無かったら？」

「……そんなとき考える」

あったとしても魔術師が書くレポートを解読出来るか疑問だ。しかしフロロは口にはしないでおいた。

「うだうだしてもしょうがないだろ。さあ探すぞ！」

フロロが腕まくりするとヴェラも渋々といったように近場にあった本の山から手にかける。自然と片付けるようになってしまいうり方にフロロが止めに入った。

「こんな状態じゃ多少はばれないと思うけど、家捜しする場合は元の状態に戻すことを考えながらじゃなきゃダメだ」

「な、成る程」

「それに意外とこういう部屋にいる奴の方が目敏かったりする場合も有るからな」

そういうものだろうか。ヴェラは全く理解出来ない感覚に溜息しか無かった。

終わりの見えない作業に入ってからどのくらい経っただろうか。大した時間では無かったが、ヴェラは退屈から欠伸をかみ殺した。手に取るレポートらしきものの全てが見た事も無いような文字で書かれており、これじゃ探す意味があるのか疑問だ。それにこう散らかっていてはどこが手をつけた場所なのかすぐに分からなくなるのだ。

「はあ……」

疲れからヴェラは立ち上がり、腰を伸ばす。ふと目についた机の引き出しを何の気無しに開けた。

「ふうん」

どうしてこう乱雑な部屋に住む人間は引き出しなどの収納場所を使

わないのだろう。ラブレ教官もその類いらしく引き出しの中は綺麗なものだ。一つだけ、きらりと輝く緑色の宝石のようなものが転がっている。

「あら綺麗」

赤子の握りこぶし程の宝石に思わず笑みが溢れた。手に取り自然と光にかざす。キラキラと反射する光に目を細めると同時に、宝石にはあるはずのない物に気が付き眉根を寄せた。

「あれ、これ……？」

「やべっ！」

フロロが慌てたように飛び上がるとヴェラの手を掴む。

「隠れる！」

「え、え、え？」

二人してカーテンの影に隠れるのと同時に、部屋の扉が開け放たれた。ヴェラは心臓が止まりそうになる。カーテンの隙間から見える人物はグラウンドにいた巨人を普通の人間サイズに戻して感情を入れ込んだような姿だ。彼がラブレ教官で間違いないだろう。飛び込んだきた教官は大慌てといった様子で散らかった部屋を更に散らかしていく。どうやら何かを探しているらしい。その内何かを思いついたようにはつとすると机の引き出しに手を伸ばした。勢い良く開け放った引き出しに目的の物が無いらしく、ばたばたと中に手を突っ込んでいる。暫く唖然とした後、今度はイライラしたように足を踏み鳴らし、爪を噛んでいる。が、諦めたようで「ちっ」と舌打ちすると、教官用ローブを脱ぎ捨ててソファーにあった鞆を掴み部屋を出て行った。

「……ふう、行ったな」

すっかり教官の足音が消え去ってから、フロロは息をつく。ヴェラもつられて息をはいた。

「ここ調べてたな」

教官が立ち去った室内、物が積み上がり辛うじて姿を覗かせている、といった感の机を前にフロロは小声で呟いた。

「それより明らかに帰ろうとしてましたよね……？」

ヴェラはそう言うのと窓の外に視線を移す。ここからでも巨人の頭が揺れているのは見える。あれをほったらかしとは無責任な創作者だ。「嫌な事は先送りするタイプなんじゃないの？……何も無いな」

机の引き出しに小さな手をつまみ、フロロがぼやく。

「絶対ここに何か隠してたっばいんだけどなあ、あの様子だと。今の状況で持ち出すならレポートだろうし……」

「あ、そういえばこれ持ち出したままでした、私」

ヴェラは手にあった緑色の宝石をフロロに差し出した。

「こんな物持ち出そうとするって、本格的に夜逃げする人みたいですよな」

「そ、それだ！」

フロロがヴェラの右手を指差し叫んだことで、ヴェラはびくんと肩を震わせる。

「え、え、え？これ……」

「魔導師の中には膨大な情報を魔法石に蓄積させる、って聞いた事ある！それ、多分普通の宝石じゃないんじゃないか！？」

興奮気味のフロロにヴェラの脳裏にも思いつく事があった。すぐに宝石を光にかざす。

「それで、これ……」

ちかちかと輝く光に埋もれる封じ込まれた文字のようなもの。ヴェラは初めてみる魔法のアイテムに感動してしまった。

「よし、それを解読する方法を見つけないと……」

「楽しそうな話してますね」

急に現れた第三者にフロロとヴェラは飛び上がる。二人の間から顔を覗き込ませる人物はにこにこ笑顔で二人を見ている。

「が、学園長」

「おっちゃん、久しぶり」

金髪をなびかせる美しい顔の人物にフロロは片手を上げた。自分ですえ出現に気付かないとは、とフロロは苦笑してしまう。

「親しいんですか？」

ヴェラがフロロに小声で囁くと大きく頷いて返す。

「俺の仲間の父ちゃんだし。見りやわかんじゃん。そっくりで」

ヴェラの頭にローザの顔が浮かんで消える。似ているな、とは思っていたが本当に親子だったのか。しかし自分と同じ年の子供がいるようには見えないのだが。ヴェラは学園長の顔を改めて見た。

「あ、ああれ？あれ？」

学園長の手にはいつの間にか緑色の宝石がある。光にかざす仕草で目を細めているではないか。「ふむ」と呟くと短く何かを唱えた。すつ、と宝石から光が漏れる。壁に光によって何かが浮かび上がる。物が多過ぎる為に影で上手く読み取れない。学園長はおどけたように目を見開く仕草をすると光を天井に向けた。

「おお……」

フロロは思わず感嘆の声を漏らす。初めてみる光景だ。紙に書いたようなレポートのような文章の連なりが天井にぼう、と浮かび上がっている。その中にある文字を断片的に読み取ると、フロロは顔をしかめた。

「全然読めないです……」

ヴェラの小声に学園長はふつと笑った。

「古代語とクレール語が混ざって普通には読めなくしてあるね。どっちも希少文字だ。読めなくても無理は無い」

しかし何語か判るということは、学園長は読めているのだろう。ヴェラは素直に感心する。

「リジアの名前があるのが気になるんだけど」

そう言いフロロが指差したことに学園長は目を大きくした。そして直ぐに目を細める。

「読めるのかい？」

「古代語は少し。あと俺クレールの方の生まれだから」

「……そうか。多分ラブレ教官は自分以外の細胞からゴーレムを作り上げたらどうなるか、を実験してみたかったらしいね」

「それでリジアをアシスタントに？」

フロロの質問に学園長は首を振る。

「いや、それは偶然だろう。不公平にならないように教官の指名は禁止しているんだ。……あんな産物を見たら教官もくだらない考えは捨てるはずだしね。彼もそこまで馬鹿じゃない」

それに、と学園長は言葉を続ける。

「君が見つけた書き込み部分は『特異な体質の媒体で試しても面白いかもしれない。例えばあのリジア・ファウラーとか』っていう眩き程度の物だ。真剣に実験を考えていたわけじゃなさそうだよ」

「でも」

フロロが反論するより早く、学園長は宝石を振る仕草をし、光を引っ込める。そして、

「きゃ！」

パン！という風船が割れるような音にヴェラは悲鳴を上げた。キラキラと輝く破片が空を漂い、消える。

「これで良い」

学園長は満足そうに呟いた。

「壊しちゃったんですか！？」

ヴェラが驚くと学園長はにっこり微笑む。

「これで彼のお遊びも出来なくなるだろう？こんな危険な遊びは学園内でなくとも許されないことだ。……何、後は私に任せなさい」
そう言うつとフロロとヴェラの頭をぽんぽんと叩いた。

学園の校舎最上階、屋上のフェンスからヴェラ、モロ口族の五人はグラウンドを眺めていた。夜の学園のグラウンドは見慣れないからか、違う空間にも感じる。ふわりふわりと漂う『ライト』の光が祭りの会場を思い起こさせる幻想的な世界。

「リジアさんの責任は問われないみたいですね、あの様子だと。良かった」

袋だたきにあうラブレ教官の姿を見つけ、ヴェラはほっと息をつく。

「俺達はつまんなかったぞ、今回」

ニウロが口を尖らすとカロロもそれに乗っかる。

「なー？ぼけつとグラウンド見てただけだもん」

「でもちよつと面白かったよ。リジアが巨人に乗っかって悪の親玉みたいになってたもん」

パウロはそう言うのとケラケラと笑った。学園長の言葉を思い出しながらボンヤリとしていたフロロも、思わず笑ってしまった。

「で、姉ちゃんの方は今日は良い勉強になったかい？」

カロロが聞くとヴェラはふっ、と目を伏せる。

「なりすぎる程でした……。盗賊の役割、適性、嫌って程分かった気がします。これも全てフロロさんのおかげです」

淡々と言いながらも気持ちが悪かった言葉にフロロは頬を掻いた。正直、大した事はしていないのだが今それを言うとか妙にキザな台詞になってしまう。返答を困っているとヴェラが続ける。

「でも思ったことがあるんです」

「何なに？」

パウロがヴェラとフロロの顔を見比べた。フロロは肩を竦める。

「『良い盗賊』とは、ってことです。聞き込みの仕方、潜伏、鍵開け、それに情報を嗅ぎ分ける能力。……フロロさんと行動して思っ

たんです。あなたたちモロ口族の先天的な能力に比べて、私は力無
さ過ぎる」

フロロ達四人は顔を見合わせた。確かに耳の良さ一つとってもモロ
口族と人間のそれでは違いがはつきりしている。経験では埋められ
ない差かもしれない。それ故にフロロはどう答えるべきか分からな
くなってしまった。それでも場の雰囲気からか口を開く。

「いや、『盗賊向いてない』なんて言った俺が言うのもなんだけど
……」

「だから私決めたんです」

フロロの声を遮りヴェラが言った言葉に思わず声を引っ込める。ヴ
エラは仁王立ちすると胸を張った。

「自分の盗賊像を追い求めることにしました！私らしさを考えるの
が一番だと思うんです！」

「あー……で、それは何なの？」

フロロが聞くとヴェラは右手の人差し指をびしっ、と立てる。

「『正義の盗賊』です！かっこいいでしょ！」

モロ口族の四人は答えられない。黙ってキラキラとしたヴェラの瞳
を眺めるしかなかった。漸く口を開いたフロロが再び尋ねる。

「……どういふものの？それは」

「まだ分かんないです！これから考えます！」

盗賊の仕事を悪だというのは乱暴だと思うが、確かに聞き込みや鍵
開けなど真つ当な仕事とは言い難い部分もある。そういう影の部分
があることは確かだが、ヴェラが言う『正義』とは何なのか、彼女
の性格を考えると想像したくない。

「そう、良いんじゃないかな……」

「でしょ！？でしょ！？ありがとうございます！」

フロロにお墨付きを貰ったことでヴェラは大きく胸を張った。

「……だめじゃん、フロロ。全然教育出来てない」

「めんどくさいから『良いじゃん』って言っただろ」

「なんだ？正義の盗賊って……」

口々に小声で囁く仲間にフロロは手を振る。

「もういいよ……、面倒くさい」

仁王立ちして空を眺めるヴェラの瞳に映るのは明日への希望、といったところか。夜になって冷えた風が首を撫でるのが心地良い。モロロ族達は月明かりに照らされて浮き上がるヴェラのシルエットを黙って見つめていた。

f i n

「音痴って言っても二種類のものがあるんすよ」

ギターの弦から手を外すとヤツキ氏は指を折っていく。

「まずは音程は聞き取れるけど上手く声を出せないタイプ。正しい音程を聞き取る耳はあるけど、ようは歌い方が分からない為に調子が外れたり、歌う為に使う喉を使えないんすね」

ヤツキの向かいのソファーに身を預けていたアルフレートは軽く頷いた。

「二つ目がそもそも音程を聞き取れないタイプ。僕は生物学者では無いのでメカニズムなんかは分かりませんが、多分他の人とは違う音の聞き取り方なんでしょうね。本人もその通りに歌っているつもりなもんだから音痴という自覚すら無いんすよ。こちらの方が治すことは困難です」

再び頷くアルフレートを見てヤツキはサイドテーブルに置いた水を飲み干すと話しを続けた。

「アルフレートさんの場合、話しを聞く限りじゃどちらでも無いっすからね……。やっぱりコレは効かないと思いますよ」

「だらうな」

アルフレートはローテーブルに置いたブロンズ像を見るとふっ、と笑う。分かっていた事だ。自分でもまだ何かにすがりつく気持ちが残っていたのか、と自嘲した。

「しかしよく譲って貰えましたね、コレ。バンダレンでもビョールのギターより古いお宝すっよ」

ヤツキは「どんな脅し方したんですか」と聞きたかったが、流石にそれは止めておいた。先日までの冒険の対価だとすれば納得出来ることだ。使い手に美声を授けるという女神像。ヤツキには使い方は分からなかったが、アルフレートが試したことは確実だらう。それで自分の所を訪ねてきたのであろうことも。

ヤツキはアルフレートが窓の外を眺めているのに気が付き微笑む。

「綺麗でしょう？」

自宅の窓から見える景色はこの季節のものが一番好きだ。ヤツキは風に揺れる小さな花を見た。

「雑草らしいんですけどね。ここからかなり離れた国のものらしいつすよ。旅人の服にでもくっ付いてきたんでしょね、種が。見た目も可愛いし、そうやって遅く生きてること考えてそのままにとくことにしたんす」

「詩人らしい考え方じゃないか」

アルフレートの言葉にヤツキはふふ、と笑う。

「僕はそんな大したもんじゃないつすよ。……それより皆さん元気ですか？」

「相変わらずだ。やかましくてしょうがない」

そう言つて眉根を寄せるアルフレートの顔は漸く若い青年らしさを覗かせる。

「この前学園の方向を見上げたら、面白いものが立ってましたよ？ かつこいいつすね、アレ」

ヤツキが目を輝かし話すものの姿を思い出し、アルフレートは溜息混じりに「そうか？」と呟いた。学園の教官がやったヘマによって生まれた巨大なゴーレム。学園のガーディアンとしての役割を貰ったらしいが、ヘマをやった教官によく似た容姿が美しくない。大体学園にガーディアンが要るのかも疑問だった。

「そうだ、今度体育祭があるらしいつすね。見に行こうかなあ」

「やめとけ、あんなくだらん騒ぎ」

アルフレートは去年の云われない批判を受けた経験を思い出し、手を振った。それでもヤツキは「楽しみつす」と笑顔だ。

「……音楽の話し以外になると途端に噛み合わないな」

「え？」

「いや、何でもない」

アルフレートはそう答えると出されたお茶を飲み干した。

「さて、そろそろ帰るか。色々助かった。ありがとう」

立ち上がるアルフレートの目にぽかん、とするヤツキの顔が映った。

「なんだ？」

「いや、お礼を言うこともあるんすね」

ヤツキの返事にアルフレートはムツとするとさっさと入口に向かう。どうしてこう、こちらが下手に出ると人間は失礼な態度になるのだろう。

「いつでも来てくださいね」

ヤツキの朗らかな声を聞くとアルフレートは片手を上げ、音楽家という新しい友人の家を後にした。

ローラスに漸く訪れた初夏の陽気の中をアルフレートは目を細めながら歩く。この国に越してから随分になる。夏でもあまり暑くないのが気に入っているからだ。家に帰り本でも読むか、と思ったところで「それより何か新しい書物に目を通したい」と思い直した。今日は学園は休み。しかし一応生徒の一員であるアルフレートは学園内の施設を使うことは可能だ。

「たまには図書室というのも使ってみるか」

はなから当てにしていなかったせいで、未だに入ったことは無かったかもしれない。魔術書などは自分の利益になると思えなかったが、最近フィクション物にも手を出し始めたところだ。暇を潰すにはいか、と学園に向かうことにする。アルフレートから見れば『新しい』建物、プラティニ学園。なかなか面白いところで、こんなに一度に色々な人種に出会える施設というのも珍しい。長い時を生きてきたアルフレートでもそう思う。

学園内に入ると休日だというのに閑散、といった様子ではない。いたる所に生命の精霊が舞っているのを見ると、自分と同じように休日 of 学園に身を寄せている者も多いようだった。

「……なんだ、あれは？」

図書室を探す為に案内図のあるグラウンドに来た時だった。演習場という魔術師が魔法の練習を行ったり、戦士が組み手などをやる建物。どうも精霊の動きがおかしい。おかしいといっても不穏な動きというわけでは無く、不自然に活発なのだ。

「あんなに土の精霊がいるもんなのか？屋内なのに」

暫く考えてから覗いてみる事にした。面倒なことなら逃げればいい。先程ヤツキとの会話に出てきた巨人人形が暇そうに窓を掃除しているのを横目で見つつ、演習場の扉の前にやって来ると中を覗き込むぐず、ぐず、という泣き声と一人の男が演習場の中央に座り込む姿があった。思わず顔をしかめる。ぼさぼさの銀髪にひよる長い体、あれは今噂のラブレ教官じゃないか。いい大人がぐずぐずと泣きながら作業する姿は美しさに欠ける。何をしているのか観察していると、どうやらゴーレムを作っているらしい。方法に少し興味を引かれて中に入ってみる事にした。

「泥団子からマッドゴーレムの大量生産か。なかなか面白いことするもんだな」

アルフレートが言うとならラブレ教官ははっ、とした顔で振り向く。見られたからといって涙を拭くわけでもなく、こちらを指差すとわなわなと震えだした。

「お、お、お、お前、知ってるぞ！バードクラスの変わりもんエルフだ！」

妙に声が擦れている。少し笑いそうになるのを堪えながらアルフレートは胸を張る。

「だからどうした」

相手は面食らったように動きを止めるが、次の瞬間、素早い動きで土下座体勢になった。

「お願いします！手伝ってください！」

何を、と聞きたいところだがある程度事情は知っているアルフレートは黙って演習場内を見回した。端からずらりと並ぶマッドゴーレム達。来週から始まる体育祭の唯一の種目、モンスター狩りの標的

だろう。教官の脇に転がる無数の土の塊、いや、土だけでなく鉄、ガラス玉や木片もあるということはそれなりにバリエーションを考えているのだろう。

「……喉が哽れているのはあれか、呪文の唱え過ぎか？」

「そ、そうなんだよ。俺の特殊な製法で生み出したゴーレムの元は少ない材料からゴーレムを作ることが出来るし、簡単な呪文で仕上げられるんだ。でもこの数だろ？喉の方が保たなくてこのざまだよ……」

拒否が無いのを手伝って貰えると理解したのか、聞いてもないことをべらべらと喋りだす。

「成る程、これはゴーレムの元ってことか」

アルフレートは泥団子のようなものを一つつまみあげる。これ自体からも僅かに力を感じる。なかなか面白い。

「すごいだろ。学園長にメインの研究レポートはパーにされたが、頭に残ってる分だけでもこれぐらいは出来るんだぜ？」

にまにまと笑うラブレ教官にアルフレートは向き直ると、懷からブロンズ像を差し出した。

「……なんだよ、これ？」

「美声を授けるとても貴重な力を持ったアイテムだよ。これさえあれば一晩中でも魔法が唱えられるぞ？」

アルフレートがにこにこ答えると教官は暫くぼかん、と動かなくなる。そのうちがくり、と膝から崩れ落ちると再び涙を流し始めた。「む、無理だよお！もう気力が無いんだ……。日の光を浴びたい！綺麗な空気が吸いたいんだ！！」

普段、教官室に籠りっぱなしの人間が大変らしくない台詞を吐きながらおいおいと泣く姿は、アルフレートでなくても呆れるものだったに違いない。

「俺だってあんまり良くない実験なのは分かってたさ。でもな、研究者としての血の方が勝ってしまったんだろうな……」

ラブレ教官はそう懺悔を漏らす。確実に「分かるよ」と言って欲

しい空気が漂っていたが、アルフレートは黙って居並ぶゴーレム達を眺めていた。

フロ口達から事情は聞いていたが来週の体育祭までにゴーレムを揃えなくてはならないというこの教官は、アルフレートが考えていた以上にやり手らしい。すでにこの揃えようだ。弱音を吐く暇があるならさっさと終らせればいいのに、とも思ったが本人が言う通り「気力」が続かないのかもしれない。別にこの教官に同情する気持ちはさらさらないし、手助けする気持ちもさっぱり沸いて来なかったが、ある考えが浮かんできたことでアルフレートはにやりと笑った。「……仲間から話を聞いたんだが、あのグラウンドにいるカラクリはあんたの細胞から生まれたんだってな」

返事を貰えたことで嬉しくなり、一瞬笑顔を見せたラブレ教官だったがアルフレートの不気味な笑みに頬が引きつる。なんだろう、すごく嫌な予感がする。教官は「さて、作業に戻るか……」とアルフレートから離れようとした。がし、と後ろから肩を掴まれ、ラブレ教官は体を強張らせる。

「良い考えがあるんだよ……」

耳元で囁かれるねっとりとした声に蛇に睨まれたカエルになった教官は、ぎこちない動きで振り返った。

「な、何でしょう……？」

その質問にアルフレートはさっ、と先程のブロンズ像を出す。対象に美声を授けるといふブロンズ像。先日 of 冒険で音楽の都から頂戴してきた物だ。生憎彼の希望は叶えられなかった為、使い道を失っていたところだった。

「もしあのあんたの分身ともいえる人形達に、声を授けてやったらどうなる？ なかなか面白そうだと思わないか？」

アルフレートの言葉に教官は更に頬が引き攣る。

「い、いや……、声帯だとかの体の構造まで一緒かどうか……。それに、これ以上『あいつら』関係に首突っ込むと、本当にクビになっちゃう」

上目遣いで見る教官をアルフレートは「気持ち悪い」と吐き捨てた。
「なら話しは終わリだ。頑張りたまえ」

踵を返すアルフレートにラブレー教官は反射的に飛び付いてしまう。
「て、手伝ってくれよおー！あんたぐらいの使い手なら、ゴーレム作りぐらい簡単なもんだろう！？」

「そう、簡単だからつまらん。つまらん事には興味が無い」

「わ、分かったよ！さっきの話を聞くから！」

ラブレー教官は言った後にしまった、と顔を歪ませる。アルフレートがさつと振り返りニンマリと笑った。

「立場を分かっている人間は好きだよ、ラブレー教官。さあ、さつさと何体か人形達を連れてきたまえ」

教官はにこにこ笑うアルフレートに「何を考えているんだ」「なんでそんなに偉そうなんだ」など疑問は尽きなかったが、声に出す言葉は何も無かった。

「さ、連れてきたぜ」

パイプ椅子に座り本を呼んでいたアルフレートに教官が声を掛ける。アルフレートが顔を上げると演習場に新しく現れた十体程の人形達。巨人人形では無くフロロ程の身長の小さい方だ。どれもこちらを見上げているがどうも態度がよろしくない。にやにやと笑っていたりふてくされていたり、良く言えば人間くさいかもしれない。

「……あんたが命を吹き込んだ分、ってやつか」

「俺の号令に駆けつけるのはこいつらだからなあ。……よくわかったな？」

リジアの話しだと最終の仕上げをした人間の特性を受け継ぎ命令をきくようだ、ということだった。アルフレートは「まあいいか」と呟く。

「よく聞け、人形達。これから私が声を授けてやる。どうだ、嬉しいかね？」

人形達にアルフレートが尋ねると、やっぱりにやにやと笑っていた。「声を出せるようにしてどうするんだよ」

真つ当な教官の質問にアルフレートは鼻を鳴らした。

「手伝わせるんだよ、ゴーレム作りを」

そう言つてブロンズ像を床に置く。像がゴトリ、と音を立てると素早く呪文の詠唱を始めた。

「ちょ、ちよつと待ってくれよ！手伝わせる、ってそんなこと出来るのか!？」

「知るか」

詠唱の合間に言われた答えに教官は目を大きくする。い、いい加減だ。いい加減すぎる。大体、今アルフレートが唱えるのは古代語じゃないか。ということはこのブロンズ像は古代文明時代の宝物ということだ。

「マジかもしれねえ……」

教官は『美声を授ける』といううさんくさい像の能力を信じ始めていた。見た目も麗しいエルフの朗々たる呪文の詠唱が空気中のマナを震わせる。辺りに不思議な光の粒が集まり出すとアルフレートは身振りを大きくし始めた。

「うお!？」

巨大な光の波が演習場を飲み込む。目をくらませる突然の発光にラブレ教官はたじろぐと腕で目元を覆った。

「くっ……っっ!」

教官は瞼越しの光景が元の暗さになったことを確認すると、恐る恐る目を開いて行く。目の前には先程までと変わらずアルフレートと自分の分身達がいた。ほっと息をつく。

「ど、どうなった……?」

「どうもこうもねえよ、この薄のろ」

妙に甲高い声に教官、そしてアルフレートも目を大きくした。

「あ、喋れるぞ」

「本当だ」

「うはは!これで文句の一つも言い返せるようになったわけだ」

「やったぜ!」

次々に人形達が騒ぎ出し、演習場を駆け回る。

「な、な……」

「成る程、作り手の性格を受け継ぐ、ね」

アルフレートの言葉に教官は慌てて噛み付いた。

「どこが俺に似てるんだよ!ここまで口は悪くねえ!」

そう叫ぶとしん、と静まり返る辺りに教官は気まずさから振り上げた手はそのままに動きが止まる。ふ、と見下ろした視線の先に人形達がいやにやと笑う姿があった。

「……何叫んじやってるんだか」

「空気読めないんだろ、研究ばっかの生活で」

「だから嫌われてるんだ、生徒にも同僚にも」

ぼそぼそと囁かれる人形の声は、妙に甲高いことを抜かせば自分の声質によく似ている。ラブレ教官は「よけい腹立つ」と舌打ちする。

「まずは成功というわけだ。次は実際にゴーレム作りを手伝えるのかやってみるか」

アルフレートが腰に手をあて呟くと、人形達はこくこく、と頷いた。「はあ、じゃあ教えてやるからこつち来い」

覚悟を決めた教官も溜息をつくと用意されたゴーレムの元に手を伸ばす。

「……早く来いっつってんだろ、今から見本見せるぞ！」

そう人形達に怒鳴りつけると、彼らはひそひそと耳打ちし合い、にやにやと笑いながらラブレ教官を指差した。

「……くつ、かわいくねえ！」

「まあまあ、ここを超えれば後は楽だぞ？」

アルフレートの言葉に再び人形達はこくこくと頷いている。なぜだ、なぜこうも態度が違うんだ。ラブレ教官は「強い者に弱い」という自分の特性は理解出来ないままだった。

「問題はこいつらが魔力を持ってるか、ってことなんだよな」

教官は頭を掻いた。魔力を使う術が無ければゴーレム作りは出来ない。彼の研究の成果であるゴーレムの素を使おうともそれは同じだった。

「あんた意外と自分を信じてないんだな」

アルフレートが言い放つ言葉にラブレ教官は首を傾げる。その様子を横目にアルフレートは人形達に近寄り目線を合わせた。

「君達はその男の細胞を受け継いだ優秀な子供だ。あの男だって曲がりなりにも魔術で飯を食ってるんだからな。必ずやれる」

アルフレートの言葉に人形達はこくこくと頷いている。教官は苦々しく思いつつも再び手本を見せる体勢へと移ることにした。

「呪文は簡単、それにコツみたいなものも無い。きちんと呪文を唱えれば出来ることなんだ。……人間ならな」

教官は手に持った土の塊を掲げつつ呪文を唱えていく。アルフレートは初めて聞く術法に興味深気に聞き入っていた。

「さあ、やってみる」

ゴーレムの素である土の塊を手渡すと、ラブレ教官は人形達に命令する。人形の一体が甲高い声で呪文を唱え出すと、他の人形達もつられて詠唱に入る。

「ラ・ウォー」

最後の力ある言葉が紡ぎ出されると、途端に土の塊が発光しだした。

「お、おお……」

アルフレートと教官は同時に呟く。むくむくと膨らむゴーレムの素に教官は実験の成功を確信した。人形と同じ数の土のゴーレムが並ぶ。ゴーレム達はびしつと敬礼すると既に出来上がっていたゴーレムの列へと加わっていった。

「……す、すげえ」

ラブレ教官はあらためて目の前の光景に感嘆の声を漏らすとアルフレートの手を取る。

「すげえよ、あんた！天才だ！」

「おい、それは褒めてるのか？『そんなこと』は『知っている』。他の言葉を使うんだな」

冷たく言い放つアルフレートに教官は「エルフってこんなだったか……？」と呟いた。

「ま、いいや。これで一件落着、と」

踵を返すラブレ教官にアルフレートは声を掛ける。

「帰るのか？」

「おうよ、久々にまともな飯食えるようになったからな。……おい、お前達、ちゃんと残りの分もやつとけよ！そうしないと後でひでえからな！」

演習場の扉に手を掛けながら指差す教官に、人形達はひそひそと耳打ちし合うとにやにや笑った。

「……おい！変な事考えるなよ！明日来てみて、進んでなかったら

俺にも考えがあるからな！」

ふん、と鼻をならすラブレ教官に、やっぱり人形達にはやにやと笑うのだった。

「予想外に真面目なんだな」

アルフレートは教官が去って行った演習場内、黙々と作業を開始した人形達に声をかけた。

「……俺は実はあの教官が仕上げた個体じゃない」

人形の一体が答えた甲高い返事にアルフレートは頷いた。

「気が付いていた」

「やっぱそうか、あんた色々分かってそうだな」

人形はにやにやと笑うと真顔に戻る。

「俺はリジアが『仕上げた』個体だ」

「俺はカーチャの分だ」

「学園長が俺達に学園を警護する役目を与えた時点で、俺達は人間の命令なら聞くようになってるんだ」

「人間っていつでもあんたみたいなエルフでも、だぞ？」

口々に言う人形達にアルフレートは大きく頷く。人形達は満足そうに笑った。

「でもな、誰の命令でも聞くようになったことで弊害も生まれたんだ」

「誰の命令でも聞くけど、聞きたくない奴もいるってことに気が付いたんだ」

「ほう」

アルフレートは面白い話した、とばかりに顔を上げた。

「学園の部外者が勝手に侵入した場合は、もちろんその犯人の言うことなんかは聞かないように命令されてるけど、そうじゃなくてこの学園の人間だとしても、俺達が勝手に『聞きたくねえな』と思うこともあるようになってきたんだ」

「『あそこ掃除しとけ』とか、ああめんどくせえな、と思うけど、でもやってやるか、って思える人間と、誰がやるか！って人間がいるんだ」

「ラブレール教官はどうなんだ？彼は『聞きたくない』人間の方かね？」

アルフレートが尋ねると人形達は顔を見合わせた。

「……聞きたくない方、かな。でもあいつのお陰で俺達が存在してる、っていうのも分かってるよ」

「それが余計しゃくに触るけどな。あいつ、命令の仕方がむかつくんだよ」

「また俺達に『似てる』のがムカムカするし、気持ち悪いんだよな」
「なんだかあべこべな答えにアルフレートは吹き出しそうになった。それを堪えると再び彼らに質問する。」

「しかし今、君たちは彼の命令を聞いているな。それはなぜだ？」

人形達はまた顔を見合わせた。

「……皆が困るから、だよ。リジアやカーチャ、学園長みたいに『命令を聞きたい人』が困るからだ」

「体育祭が出来ないと困るだろ？」

「別にやりたくないみたいだったけど、でももし出来なかったらリジアは気にするだろ？」

「俺達を作った日にやった失敗を、自分のせいだと思ってるからな」
人形達の答えにアルフレートは目を大きくする。そしてにやりと笑った。

「そういう考えを『人間らしい』というんだ」

人の話を聞き、拒否をし、そして連鎖する人間関係を予想し、配慮する。予想以上の考え方に感嘆すると共に、アルフレートは思う。

「……学園長があいつの研究レポートを破壊してよかったな……」

明らかにあいつのキャパシティを超えた出来だ」

「何？」

「いや、何でも無い」

アルフレートは首を振ると、働く手を休めない人形達を見回した。

「その像、すごいね」

「何でそんなもの持ち歩いてるんだ？」

人形達がアルフレートに聞いてくるが、アルフレートは黙っていた。

「……聞かない方が良かった？」

「悪いな」

「……いや、いいんだ」

アルフレートはそう言いながら苦笑した。へんな状況だな、と。

「お願いがあるんだけど」

「他の奴らにも声を与えてやれないかな」

「無理ならいいんだ」

変にもじもじする人形達はもはやラブレ教官の影は無いように見える。リジア達の影響が入っているせいかもしれない。アルフレートはゆっくりと立ち上がった。

「珍しい現象を見られたお礼だ。やってやる。……それに、作業を終えるには働き手が多いにこした事はないだろう？」

アルフレートの返事に人形達は手を叩いて喜び一通りはしゃいだ後、アルフレートに向かって揃って頭を下げた。

声が与えられた喜びに浸る人形達、その数の多さからグラウンドは蜂の大群かと思うような音の波で包まれていた。

「皆喜んでるな」

「そりゃあそうだろ」

「話したくてしよがなかったからな」

アルフレートの隣で話しているのは始めに声を与えてやった数体だ。そのうち口を閉ざすと、意味ありげにこちらを見ている。

「……やっぱアレもやるのか？」

そう言つてアルフレートが指差すのは異質な一体。リジア作成の巨大な人形だ。

「そりゃあ、ねえ……」

「あいつだけ声出ないままじゃ可哀想だろ」

人形らしからぬ慈悲の心にアルフレートは思わず舌打ちする。しよがない、取りかかってしまったのは自分なのだ。そう自分を鼓舞するとアルフレートは立ち上がった。

「おい、そのでかいの、こっちに来い」

アルフレートが腕を組みつつ見上げると、巨人人形は窓を拭く手を止めて自らの顔を指差した。小首を傾げる姿は「俺のことっすか？」と言っているように見える。

「そうだ、お前だ。お前も声が欲しいだろう？」

そう問うと巨人人形は何度も首を縦に振った。

傍らに寄つて来た彼を座らせるとグラウンドがずうん、と揺れる。アルフレートはブロンズ像を置くと呪文を唱え出した。呪文を口にしながらアルフレートは思う。こいつはどういう声なのだろう。普通の人形達が甲高い声なのは声帯の大きさからだろうが、こいつはこのでかさだ。やはり野太い声なのだろうか。想像し吹き出しそうになるが何とか堪える。気が付くと小さな人形達も固唾を飲んで見

守っているようだ。

なんだ？何がそんなに心配なんだ？そんな疑問が頭によぎった時、呪文が完成した。溢れる光。アルフレートは目を細めた。

「……どうだ？」

静まった光が集まっていった先、巨人人形のきよとした顔を見ながらアルフレートは問いかける。周りの人形達の「ごくり」と喉を鳴らす音が聞こえた。

「……あ、あー、あゝ」

喉元を擦りつつ、声を確かめるように話し出すその声は予想に反して大分高い。小さい人形達よりは低めだが、その甲高い声をゆつくりさせたような不自然な声だ。

「……リジアは？」

巨人人形の言葉にアルフレートは「は？」と問い返す。

「リジアは？リジアはどこ？」

「な、なんだ、初っ端がそれか？」

アルフレートは顔をしかめる。巨人人形は辺りをきよきよと見回し不安げな顔だ。そのうち大きく顔を歪ませる。

「……リジアは？いないの？いない……うおゝん」

びりびり！と音の圧が体を押してくる。アルフレート、人形達も思わず足を踏ん張る。巨人人形がしゃくり上げる度に校舎の窓が揺れるのが分かった。涙が頬を伝っている様子はまるで子供だ。

「な、な、なんだ！？」

「こいつ何時もリジアを探してたからなあ」

「今日は休みだ、って言い聞かせても分かんないみてえだし」

「やっぱりこうなったかあ」

口々に言う人形にアルフレートは詰め寄る。

「なんで分かっていたんだ！？」

「俺達は声を出せなくても、何となく意思の疎通は出来るんだよ」

「……なぜそれを先に言わなかった？」

それが分かっていたらこんな面倒な奴には声を与えていなかった。

……だろうか？面白がってやっていた気はしなくてもない。
アルフレートは何事か、と校舎を飛び出してくる教官達の姿を見ながら「失敗したな、私にしては珍しく」と呟いていた。

「おはよう、リジア」

窓から覗く巨大な顔を前にリジアが頬を引き攣らせていた。

「お、おはよう」

話しは聞いていたので覚悟はしていたものの、やはりびびっているらしい。しかし自分を慕ってくれるのは嬉しいのか、笑顔で調子などを尋ねている。

「しっかしすごいことやったわね、アルフレート」

リジアは窓から離れるとアルフレートに振り返り尋ねる。

「……まあな」

仲間はバンダレンの町から頂いたお宝を知らないのだ。入手経緯を説明するとうるさいかもしれない。アルフレートは曖昧に言っておくことに留めることにする。そうすれば「何かよくわからないすごい術を使った」で済む。

「おはよー」

ミーティングルームに入ってきたヘクターが挨拶を終えると、窓から見える顔に目を丸くしている。

「な、なんか今しゃべってなかった？」

ヘクターが窓を指差し尋ねてくるのでアルフレートは頷いた。

「……俺、こいつ嫌い」

巨人人形がヘクターを指差した。

「あら、珍しく嫌われちゃったじゃない」

ローザが言つとリジアが巨人人形を窘める。

「こら！そんなこと言ったら駄目じゃない」

「だってリジアはこいつのことす……」

「だああああ！！何わけわかんないこと言い出すの！」

リジアが大声で止めると巨人人形はしゅん、とうなだれた。

「いっちょ前に嫉妬するわけか」

アルフレートが呟くとまた新しい顔がミーティングルームに入ってきた。イルヴァとフロロである。

「おはようございます」

「うはよー、体育祭のゴーレム、間に合ったらしいね」

フロロが言くとローザが反応した。

「あら、ラブレ教官ががんばったんじゃない」

「いやいやそれがさ……」

「だらあああ！こつらあああああ！！エルフっ！エルフの野郎はどこだあ！？」

フロロの声をかき消すような怒鳴り声が廊下から響いてくる。全員が顔を見合わせた時、部屋の扉が開け放たれた。

「……いた！おいしい！どういことだよお！」

アルフレートに詰め寄る血走った目はラブレ教官のものだ。

「朝から血圧高いな。血管切れるぞ」

「高くもなるわ！おい！ゴーレム作りと人形の成果！あんたのお陰ってどういうことだよ！！」

「私がやったんじゃないか」

アルフレートがしれつと答えると教官は更に近づき縋り付いてくる。

「……だからって学園長にわざわざ報告するのか！？お陰で教官室がばあだ！」

それを聞いて「ああ……」と呟いたのはローザだった。

「そっぴや言つてたわね。今度なんかあつたら個人教官室取り上げる、って。それが一番堪えるようだから」

ローザが言っているのは学園長の言葉だろう。

「そっぴやだよ、俺、教官室が無くなるのが一番くるっていう……って何言わす！？」

「うるさい人ねえ……」

ローザが教官に顔をしかめる。部屋に響く教官の怒鳴り声。自分達

6人にいかに迷惑を掛けられたかの呪いの言葉を吐き終わると、今度は涙声に変わった。すると、再び部屋の扉が開け放たれる。入ってきたのは数体の人形達。

「さあ帰るぞ」

「迷惑かけたな」

「大人しくしろよ!」

彼らはラブレ教官を持ち上げるとそのまま部屋を出て行く。廊下から教官の悲鳴が遠ざかるのが聞こえた。

「まーた良いところはアルに取られたってわけか」

フロロが隣りにくるとアルフレートに囁いた。アルフレートは大きく頷く。

「当然だろう。私こそ主人公にふさわしいのだから、ふふっ」

部屋に響くアルフレートの不気味な笑い声に、仲間は揃って顔をしかめるのだった。

f i n

「だからさ、南の方の国だと水泳の授業があるわけだ。すっげー羨ましいだろ？」

『へえ……』

クリスピアンの熱弁にわたしとヘクターは同時に気の無い返事をした。クリスピアンは不服そうに眉を動かす。

「なんだよ、二人とも。水泳だよ？水泳」

「……水着が見たいならそう言えればいいじゃん」

わたしが冷めた目で見るとクリスピアンは何故か嬉しそうに「ばれたか」と頭を掻いた。

「そんなんだから『この場』にキーラがいないんじゃないの？」

尚も突っ込むとクリスピアンの動きが固まる。痛い所を突かれたらしい。

わたし達がいるのはファイタークラスの教室。他は数名のファイターがうつつのみのここにわたしが何故いるのかというと、隣りで呆れた顔をして親友を眺めるヘクターに頼まれたからだだったりする。「いや、今日は『用事があるから』って断られただけなんだ。それに対してしつこくするような真似はしてないよ？だから嫌われてなんて……」

クリスピアンがわたしに言い訳、という無意味な行動をする横でヘクターが時計に目をやる。

「そろそろ行こうか」

待ち合わせ場所に移動しなくてはならないのだ。わたしはべらべらと話し続けるクリスピアンの口を押さえ込みつつ頷いた。

教室を出ると真顔に戻ったクリスピアンがヘクターに尋ねる。

「今日のメンバーは？」

「殆どがAチームの奴らだ。だから普段通りリーダーはデビス。人数も十人くらいって言ってたな……」

わたしは長身の二人の後をくっ付きながら会話を聞いていく。へえ、普段もデビスがリーダーなんだ。

さて、何の話をしているのかというところわたしは今日、ファイタークラスのお手伝いをしにやってきた。

ファイタークラスは普段、冒険に出る以外の時には学園に来た依頼の中でも「大規模なゴブリンの巣が発見された」「大型のモンスターが町の外にいた」などの戦闘が中心になるような依頼の片付けをやらされている。上級生になると魔術師クラスに比べて割と暇になるからだ。チームというのはクラスの中でも普段から十人一組のチーム分けが出来ていて、遠征時にその単位で行動したりするそうだ。今日は冒険に出掛けている仲間以外の手が借り出され、ファイター以外でも仲間に頼んで同行してもらいたい。

ヘクターに頼まれたのがわたし。今日は一限以外は暇だったから喜んで引き受けさせてもらった。クリスピアンも同じパーティーのキーラに声を掛けたが撃沈。まあ予想通りではあるけど。他にも何人かの魔術師やヒーラーが同行することだ。

「さくつと終るようなもんだといいなあー」

クリスピアンの言葉通り、まだ今日の依頼が何なのかは知らない。集合場所がグラウンドとのことなので今向かっているのだ。

「リジア・ファウラーです。どうぞよろしく」

わたしが自己紹介をした途端、輪になったメンバーの数人が笑顔のまま固まる。わたしの学園内での噂を聞いたことのある人達なんだろうけど、失礼しちゃう。同じ輪の中にこと手を叩いているデビスとサラ。その彼らの横にはアントンの姿もあった。同じAチームのメンバーであり、今は冒険に出ていないデビス達パーティーのメンバーなんだから当然なんだけど、皆の反応ににやにやした顔が気に入らない。

グラウンドに集まったメンバーは十二人。出発前の顔合わせである。

「サラ・ワグナーです。よろしく願いします」

サラの挨拶が終わり皆のどこかほっとしたような拍手の後、

「ロレンツ・ダフィネだ。よろしく」

わたしの隣りの人物が面倒くさそうに挨拶する。我が学友ロレンツ君。わたしは知らなかったんだけど彼はよくファイタークラスの手伝いに参加するらしい。ヘクターとも顔馴染みなので驚いてしまった。

助っ人となるメンバーはわたし含めてこの三人。他はヘクター達のクラスメイトだ。顔も見覚えのある人が多い。その中の一人に目がいったところで「あ」と声に出しそうになる。体格の良い男の子達の中で一人目立つ少女の姿。赤みがかった茶の髪はつやつやとしており、背もわたしより少し大きいぐらいしかない。大人しそうで可憐という言葉がよく似合う。

例の女の子だわ。

わたしは直感していた。そして思わずアントンを見てしまうが、

「何だよ」

じろりと睨まれたただだった。

前にイリヤが教えてくれた、意外な程どろどろとしたいざこざの話。アントンはあの子の事が好きで、あの子はヘクターの事が好きなんだよね。でも、振られちゃったんだっけ。……何かこの場の空気が気まずいと思うのはわたしの気が弱過ぎるんだろうか。皆はよくしらっとした顔出来るなあ、と思ってしまう。過ぎた話しは気にしないって事だろうか。

「おし、今回の依頼の話しをするぜ」

リーダーであるデイビスの声にわたしははっとして背筋を伸ばした。「今回は逃げたペットを捕まえて欲しい、って話しなんだ。ここウエリスペルトに住む金持ちからの依頼で、逃げ出したのも自宅からだから町の周辺にはいると思うんだけどな」

デイビスの話しに時間が掛かる依頼だと判断したのか、クリスピーアンがふうつと溜息をついた。

「で、ペットっていうのがアウラウネっつー妖精らしい」

そう言つて頬を摩るデイビス。思わずわたし、サラ、ロレンツは顔を見合わせる。

「アウラウネって……そんなもん飼つてるの？」

わたしが聞くとデイビスは頷いた。

「妖精を飼うつていうのも変な話しだけどな。金持ちの考える事はよくわかんねえなあ」

「妖精っていうより……モンスターだぞ？」

ロレンツが「意味わからん」とばかりに吐き捨てる。そう、アウラウネとは元は妖精族だがエルフなどと同じようにこつちの世界に移り住んだ種族だ。しかし言語は有さないし敵対心の強い個体が多いのでモンスターの括りにされる事が多い。そして何より見た目が……ニンジンのお化けみたいなものでお世辞にも可愛いとは言えないと思うんだけど。

「でもアウラウネだったらいそうな場所は一カ所しかないわね」
わたしはロレンツの顔を見る。彼の方も深く頷くと南西方向を指差した。

「テオニスの森だ。ウェリスペルト近郊にはあそこしか広大な森は無いし、アウラウネは必ず森に向かう」

「へえ、何でだ？」

戦士の一人が感心した後、口にした疑問にはサラが答える。

「アウラウネは妖精というより木の精霊の亜種なの。逃げ出したつていうのもこんな町中にいるのが耐えられなかったんじゃないかしら」

そう考えると可哀想な気がしてくる。捕まえて連れ戻すのもどうなんだろうね。

サラもロレンツも同じ事を考えていたのか微妙な顔をしている。が、「早速絞り込めたわけか。いやー、助っ人頼んで正解だったな！」
黒髪の戦士が嬉しそうな声を上げた。周りも「さっさと済ませて帰ろっぜ」などにこやかに話している。そうなると水を差すような発

言はしにくくなってしまう。それに「可哀想だよ」なんて言ってもどうしようもない事だし。わたし達は依頼を完了させることが仕事で依頼人に意見するのは別問題だもの。

「じゃあ暗くならない内に終らせようぜ」

デビスがよく通る声を響かせると学園の門へ足を向けた。

「歩くとあつついね」

わたしは町を出た所でローブの裾をぱたと振った。季節はすっかり夏。クリスピアンじゃないけど水泳の授業なんて羨ましいかも。街道の脇を彩る植物も青々としている。じいじいという蝉の鳴き声が更に暑さを加速させる気分だ。

「うん、空も大分低くなったなあ」

ヘクターが手を伸ばせば届きそうな入道雲を眺め、目を細めた。すると後ろを歩いていたクリスピアンが割って入って来る。

「ジジ臭い反応だなあ、こういう時は『海行くか』とかそういう流れだろー？」

「ちよつと黙っててよ」

わたしは発情男を睨みつける。ヘクターとのかういうのんびりした会話が好きなんだから。

デビスとサラを先頭にした隊列は何と無くぐらいの雰囲気二人一列になり進んでいく。クリスピアンの隣にいた黒髪の戦士、デイノがにこにこ話し掛けてきた。

「噂には聞いてるぜ。随分あちこちで活躍してるみたいだな」
意外な言葉にわたしは「そうなの？」とトンチンカンな返しをしてしまう。デイノは大きく頷いた。

「お前らぐらい色んな所に出向いてるパーティー自体、あんまりいないぜ？俺だつてずっと隣町との往復くらいだ。羨ましいぜ」
デイノの言葉にクリスピアンもうんうん、と頷いている。

「俺らもそんな感じだな。早くキーラを首都に連れてってやりたい

んだよなー」

あれ、でもこの前キーラが「首都に行つて来たのよ」なんて言つてただけだ。……誰と行つたんだろ。わたしは口には出せない疑問を考え、首を捻つた。そこへ前を歩くロレンツの声が掛かる。

「一番の問題児が一番冒険者としては満喫してるんだなあ。分らないもんだな」

その台詞にわたしは慌ててロレンツの腕を突いた。

「……ちよつと、余計な事言わないでよ」

「余計な事？……お前の授業での失敗談なんて俺だつて思い出したくないぜ。本気で命があぶな……」

「そつというのが余計なのよ！」

わたしがロレンツの髪を引っ張るのを見る周りは、少し不思議そうな顔をしている。

「何かやつぱりいつもとは雰囲気違うなあ、ロレンツ」

ディノが笑うとクリスティアンも同意するように頷いた。

「普段はもっとつまんなそうだが。気難しい顔しちゃってさ」

「へえ、そうなんだ」

今度はわたしがにやにやとロレンツを見る。すると顔を赤くして怒りだした。

「あ、当たり前だろ！普段とは違う顔触れの中に入らされるんだから」

確かにわたしもファイタークラスの雰囲気には憧れは持ってたけど、落ち着くのは根暗の集まる我がソーサークラスだったりする。結局似た者同士なんだよね。

「そろそろ着くぜ」 先頭にいるデИБスからの声が響いてきたのはお腹の空き始めた時だった。街道を逸れた向こうに緑覆い繁る景色が広がる。こんもりと帽子を冠せられたように見えるのは巨木『マウニ』の姿。ウエリスペルト近郊に広がるテオニスの森である。『着いたはいいけど腹減ったな』

デイノの言葉にほっとする。このまますぐに搜索が始まってしまうものかと思ったのだ。実はお腹の空き具合もさることながら、すでに足がだるくなり始めていたりする。普段はインドア派だもの、しようがない。ロレンツも同じような感じらしくしきりに腰を伸ばす仕草を見せている。

「じゃあ、すぐ向こうにある河原で休憩にするか」

デИБスの提案に嬉しくなるが、ふと疑問に思う。休憩はいいけどご飯どうするんだろ？この辺りは建物どころか民家も見当たらないし、もちろん皆、武器以外は手ぶらに見えるけど。しかし、

「はあ、飯だ飯だ」

なんて声も聞こえてくるではないか。首を傾げるわたしだったが、すぐに彼らの遅しさを見せつけられることになった。

「はー、きもちー」

わたしは川の中に足を突っ込み息をつく。腰掛けた丸い石も冷たくて気持ちがいい。夏場は雨が少ないからなのか流れも穏やかだ。泳げるほど大きな川じゃないけど、子供が遊ぶにはちょうど良さそう。『はい、出来たよ』

ヘクターがわたしに即席の釣り竿を渡してくる。

「ありがとう」

わたしは「無理！」と言って付けて貰った釣り餌を見ないように受

け取った。

わたしが馴れない竿を不器用に振った時、後ろから「ウサギ、獲ってきたぜ」という会話が聞こえてくる。うつ、ちよつと振り返って見れないかも。

「いつもこんな感じなの？」

わたしが聞くとヘクターは「んー」と少し考える。

「場所にもよるけど、まあこんな感じかな」

「手慣れてるもんね」

わたしはすでに二匹の魚を釣り上げているヘクターに感心の声を掛けた。比べてこっちは水中に餌を提供するのみになっている。

「あ」

ぐいつと竿が引かれる感覚にわたしは慌てて腕を持ち上げる。が、

「……またダメだった」

はあ、と溜息をつく。そんなわたしを見てヘクターがにこにここと次の釣り餌を準備し始めた。その彼の横からデイノが笑顔を向けてくる。

「俺の分、食わしてやるから大丈夫！」

釣りが得意らしく、すでに何度も魚を釣り上げているのだ。嬉しいし有り難いけど、わたしも一回ぐらいいは釣りたいなあ……。

しかし残念ながら時間切れとなったまま、食事の席に着くことになってしまった。

くつろぐ戦士達が円になって火を囲んでいる。座るのに手頃な石が並んでいるのも皆が準備したのだろうか。赤々と燃える焚火に、その周りにはサラが何かの肉が刺さった串をかざしている。やって来たわたしを見て、

「どうだったー？」

と尋ねてきた。わたしは無言で首を振る。あらら、という顔になるサラの向こうから嫌味な声が投げられた。

「何の役にも立たねえな」

へっ、と小ばかにするのはアントン。奴の絡みにも大分耐性がつい

てきたわたしは大きく胸を張る。

「あのね、その燃えてる火は誰がやってやったと思ってるの？」

「俺だろ」

ロレンツの突っ込みに大きく頷くと、わたしはびしりと彼の黒い口
ーブを指差した。

「そう！ソーサラーの力がやったのよ！すなわち『わたし達』のお
陰でしょうが！」

わたしの無茶苦茶な理論にロレンツはだんまりを決め込み、サラは
ぱちぱちと拍手する。こういうのは自信満々に言い切った者勝ちだ。

「はあ！？何訳わかんねーこ……」

目を吊り上げるアントンの頭をデビスが殴りつけ、座るよう指示
した。わたしも素知らぬ顔で石の上に座り込む。

「さてと、食いながらでいいから聞いてくれ。この後森に侵入する
が、とりあえず二人組で六方向からばらばらに侵入、中心部のマウ
二の巨木を指すように進んでくれ」

デビスはそう言うサラ、わたし、ロレンツを指差していく。

「サラは俺と、リジアはヘクターと、ロレンツはデイノで良いよな」
名前を挙げられたわたし達は一斉に頷いた。

「他は適当に二人組になつてくれ。目標が見付かった場合はすぐに
合図を出すこと。だから『クラッカー』の魔晶石持つてる奴と組む
ようにしてもらった方が良いな」

デビスが言う『クラッカー』の魔晶石は空砲を撃ち鳴らすことが
出来る。今回のような広範囲の野外活動の時によく使われるものだ。
もしわたしとヘクターがアウラウネを発見したら、代わりに何を唱
えようかなー、なんて事を考えていった。

お腹を満たしてくれた残骸や火の周りを片付けつつ各自、組みにな
った二人で話している中、

「何で俺がこいつとなんだよ！」

アントンが一人露骨に嫌な顔をして荒々しい声を上げる。彼の指差すのは赤みがかった茶髪に大きな目をした女戦士エルナ？？問題の彼女である。

先程デビスが明らかに適当な様子でさっさと組みを決めていったのだが、すっかり『事情』を忘れていたらしくアントンとエルナを組ませたのだ。言った瞬間の皆の凍りようは凄まじく、デビス自身もそれで思い出したらしかったが変に撤回する方が拗れると考えたのだろう。そのまま何も無かったように振る舞っていた。

「何言つてんだよ……、お前『クラッカー』持つてないんだろ？エルナはきちんと用意してあるんだから逆に感謝してやれよ」

デビスが『また始まった』と言わんばかりに溜息つきつつアントンを諷める。その隣り、当のエルナは指名された先程もアントンが騒ぐ今も、大きな目をあまり動かすことなく無表情だ。イルヴァのように生まれつき表情筋が少ないタイプなのか、それとも殻に閉じこもっているのかはわたしには分からない。

「鈍くせえから嫌なんだよ、こいつ。辛気くせえし」

アントンが腕組みしつつ吐き捨てた言葉にわたしはむっとする。そこまで言わなくても良いじゃないの。っていうか周りの雰囲気が悪くなるのが分かんないのかな、こいつ。

「あんただって人様に文句付けられるような人格してないんだから良いじゃないの」

思わず言い放ったわたしの言葉にサラがぎよっとする。

「な、何だと！？」

顔が赤くなるアントンにわたしはまずいかな、と思いつつ止まらない。

「だーから！男のくせに文句が多いの！……いや男とか関係ないわね。とにかくあんたは自分のことは棚に上げて文句が多い！」

わたしがびしり、とアントンに人差し指を突き付ける後ろで、

「こいつも気だけは強いよな。苦労してない？」

ロレンツがヘクターに余計な事を言っている。わたしは急いで振り

返りロレンツを睨んだ。

「可愛くねえ奴だな！」

アントンが叫ぶとデイビスがその彼の頭を殴りつける。ようやく大人しくなった。ふとエルナを見ると初めて見せる驚きの顔でわたしをまじまじと見ていた。が、わたしは何となく恥ずかしくなり目を逸らしてしまった。

「この辺りから入ろう」

ヘクターが更に迂回するクリスピアン達の後ろ姿を横目で見ながら先を指差した。背の高い草が覆う先に森の入り口が見える。各自、バラバラの位置から中心部にあるマウニの巨木を目指し、アウラウネの搜索を行うのだ。

「さつき騒いでごめんね」

わたしは照れ隠しに呟いた。土に還るためなのか湿った落ち葉が足に柔らかい。

「いやいや、リジアが言わなきゃ誰かしら言い返してただろうし、いつもの騒ぎだから」

そう言つて笑うヘクターを見て思う。「誰か」か。あなたの役目だったの？と聞きたくなるが流石に気まずい。ヘクターはわたしが彼らに起こつたいざごさを聞いていることも知らないのだから、余計話題には出し辛かった。

真つ昼間というのに木の葉の屋根で薄暗い。でも差し込む日差しが美しいからか不気味さは無い森の中。空気も冷えていて心地良い。歩く度にはきばきと鳴る小枝の割れる音まで澄んでいる。こういう場所が本来の住処であるはずのアウラウネ。そりゃウェリスペルトの住宅地に押し込められたら逃げ出すわ。

と考えたところではつとずる。森の中つてやつぱり人間以外の生き物の住処なのよね。モンスターだっているはず。いや、彼らの住処にわたし達がお邪魔することになるわけだ。わたしは気付かれない程度にヘクターとの距離を縮めた。

足下を気にするためにどうしても目線が下になる。落ち葉の間から見える赤い色が可愛い木の実を拾いそうになった。が、慌てて手を引つ込める。遊びに来てるわけじゃないものね。

前に行くヘクターが顔を上げる。つられて見ると滑らかな木の肌に

絡み付く蔓植物が綺麗な花を付けている。わたしには手の届かない位置にある、白地に薄紫で彩られたそれを一つ手に取ると静かな動作で切り取った。

ヘクターの手がわたしの頭に伸びる。感触で結わき上げた髪の毛の根元に花が添えられたのだと分かった。わたしにその行為をしてくれたのだと思うと飛び回って大騒ぎしたくなる程嬉しい。しかし何だかこの静かな空気にお礼も言いそびれてしまった。

歩き進めることに周りの木の様子が違ったものになってきた気がする。わたしの胴回り程の木が並んでいた景色が、今は腕を回しても届かなそうな太い幹へと変わっているのだ。それだけ奥に進んできたのだろう。

「何の気配も無いなあ……」

ヘクターが呟いた。小鳥の鳴き声や小動物が枝を走るような音は聞こえてきたが、アウラウネはもちろんモンスターに出会うことはなかった。

「あ、そっち気をつけて」

ヘクターがわたしの右手を指差した。急に地面が消えているのがわかる。崖になっていたのか……。薄暗いし茶と緑に染まる世界だから、目につき難い。

「ありがとう」

わたしがそう答えた時、何だか地面が揺れている感触が足に伝わってきた。ヘクターが静かな動作で崖下を覗き込むよう、足を踏み込む。

「……トロールだ。大丈夫、向こう側にいるから」

彼の背中に隠れるようにわたしも崖下を覗き込む。くすんだオレンジ色の肌の巨人が下をのしりと歩いている姿があった。遙か下に見える景色だというのにはつきりと姿を確認出来る。ばきばきと簡単に踏みしめる木の枝は実際はどのくらいの太さがあるものなんだ

ろう。

「でもこんな所をうろついてるなんて……、腹空かせてるのかも
しれない。少し逸れよう」

ヘクターが左手を指し示す。わたしはへっぴり腰になりながら頷いた。ふあー、初めて見る巨人族だけど、あんなの間近に見たくない
わ。

「あいつがいるから他の生き物が見えないのかしら」

少し足を早めながらわたしが尋ねるとヘクターも頷く。

「そうかも。まあ大抵の生き物は人間の方を怖がるわけだから向こ
うから避けてくれるしね。……でもああいうのは別。逆に向かつて
来るよ」

それを聞いてわたしは飛び上がる。ヘクターが慌てたように首を振
った。

「ごめんごめん、脅かすつもりじゃなかったんだ。いざって時は絶
対守るから、大丈夫」

「……素敵」

思わず出た声にわたしははっとして頭を振る。な、何を言ってるん
だわたしは。

しかし『モンスター』という言葉の意味が少し分かった気がする。
分かり合えない絶対的な何かがある生き物をそういう言葉で括るの
かもしれない。

「アウラウネってどういう性質なの？」

ヘクターからの質問にわたしは首を傾げた。どういう探索が効果的
か、という意味だと思うがわたしはうーん、と唸る。

「マンドラゴラって分かる？」

わたしが聞くとヘクターはピースサインにした手を逆さにした。

「こんな形の植物のモンスターでしょ？地中にいて、引っこ抜くと
奇声あげるとかいっ」

「そうそう、その悲鳴で相手を気絶させるのね。それからその弱った相手の養分を奪うって言われてるけど、実際は逃げ出すだけみたいよ」

その亜種になるのがアウラウネ。大きさ、見た目もそっくりだが、体の色がマンドラゴラが薄茶の植物の根の色をしているのに対して、アウラウネは真っ赤だということだ。ただどうして色が違うのか、マンドラゴラとどういった点が違うのかわかっていない。研究者はいるだろうけど一般的な魔術師の知識として出回る程ではないのだ。

「わたしもわかんないのよね……。でも森に住む生物なのは確かだと思うけど」

わたしがそう答えた時、何かに足が引っかかる。足下には気をつけていたはずだけど今の話しに気を取られたか、派手にすっ転んでしまった。落ち葉が舞い、膝と手のひらに痛みが走る。

「大丈夫!？」

「……いったい、な、何？」

ヘクターに腕を取られながらわたしは後ろを振り返る。木の根が走るところは避けていたと思ったのに。と、わたしは立ち上がる途中の動作で固まってしまった。後ろで動くもの。人間の膝下ぐらいの大きさのニンジン……。いやアウラウネ!

体から枝分かれした根のような細い手足に子供が描いた落書きのよな顔。どうやらわたしが躓いたのはこいつらしい。向こうもおでこと思われる箇所を擦るように撫でていて、その度に頭のふさふさとした葉っぱが揺れている。

「い、いたー!!!」

わたしが絶叫するとアウラウネは手足をばたつかせて飛び上がった。そのまま地面に着地すると同時にわたしとヘクターの間をもの凄い勢いで通り過ぎていく。巻き起こる風に啞然としてみると、

「追いかけよう!」

ヘクターに声をかけられ、ようやく意識を取り戻した。

「う、うん！」

勢いよく返事をし振り向いたは良いが、走る先には既にアウラウネの姿は見えなくなっていた。

「いないな……」

ヘクターが大きく溜息をついた。先程出会ったアウラウネを追いかけて、ひたすら走ってきたが再び見かけることは出来なかった。

「あんなに足が早いとはね……、参ったわ」

わたしも大きく息を吐くと周りを見回す。もう大分マウニの巨木に近付いているはずだ。大きな幹の大木が多く、地形がでこぼこしているのも走るのも怖くなってきた。それに日が傾いてきたのか明かりが無いと厳しい。

『ライト』

わたしは明かりの呪文を唱える。光体が現れふわりと浮かんた。足下が明るくなりほっとするも、ぽつり、と頬に何かぶつかる。間を置かず雨の音が打つ音の大合唱に包まれた。

「うわ、ついてないなあ」

ヘクターがそう呟くとわたしの手を取る。

「こっちに」

そう案内する彼に大人しく付いていくことにする。雨宿りの場所を探すらしい。苔むした地面は足を滑らせそうで厄介だ。案の定、何度が滑りそうになるがヘクターが支えてくれた。同じように足二本の体のはずなのに、なぜここまで安定性が違うのか……。わたしの靴の選び方が悪いのかしら、とヘクターのブーツを眺めていると、「ここで少し休もう。多分、夏の通り雨だからすぐ止むと思うんだ」そう指し示されたのは木々の合間からぽっかりと口を覗かせた広い洞窟だ。よく見ると太い根が幾重にも折り重なって出来ている。不思議な光景にわたしは暫し根の天井を眺めた。奥を見ると先が見えない程に深く広い。どこに繋がっているのだろう。

「この辺じゃ雨が入り込んだじゃうね。もつと奥に行ってみてもいい？」

わたしが指差し尋ねるとヘクターはにこつと微笑み、先を歩き出した。見慣れない世界にわたしはときどきとしながら後を付いて行く。二人の足音が反響する。目線を下ろすと根の絡まった絨毯があった。少し行くと隆起した根の塊がぼこぼこある所に出た。

「この辺で休もう」

ヘクターはそう言うロングソードを傍らに置き、根の隆起に座る。ふうと息つき髪をかきあげた顔にどきりとした。どこに座ろうかな、と考えたところではつとずる。

こゝ、これって所謂「熱いシチュエーション」じゃないのおお！雨に濡れた二人が人気の無いところで休んで、人様に言えないことになつちやったりするってやつじゃない！？衣服が濡れて、「寒いね」なんて言ってるうちに……いや、寒くないな。だって夏だもん。いくら涼しい気候の森林の中とはいえ、寒いまではいかないし。じゃあどうやってヘクターを脱がすのよ！？……いや、脱がさないし！脱がさないよ！

「うわー……わたしの頭の病気もここまで来たか……」

そんなことをぶつぶつと呟いているとヘクターの大きくした目と合う。

「どうしたの？」

彼に尋ねられわたしは慌てる。

「い、いや、何でもない」

ぶんぶん頭を振るわたしを不思議そうな顔で見ている。が、ふつと笑った。

「何か急に百面相みたいになつてたよ？」

ふふふ、と笑う彼の顔には邪気がない。わたしはもう一度頭を振ると自分の煩惱を追い払った。

ヘクターの隣りに腰掛けると濡れたローブを払う。火を熾すなんてお得意の呪文も披露したいが薪になりそうな物が無い。辺りにはび

こる根はみずみずしくて燃えそうにないし。

「ごめん、厄介なことになっちゃって」

はあ、と息つくヘクターに手を振り否定しようとする耳に「う」と聞こえる音があった。

「……何、この音？」

雨がそんなに激しいのだろうか、と思ったが違う。これは木の根の音だ。きつと管を勢い良く液体が流れるように栄養を吸う音。木の呼吸の音と言っているのだろうか。

「これってもしかして、マウニの巨木の根なのかな」

ヘクターがそう呟いた時だった。入り口方向に何か動く気配を感じ、わたしは振り返る。ひょこひょここと軽い足取りで現れたのは赤い妖精アウラウネ。わたし達の腰掛ける近くに同じように腰掛けると、何処から取り出したのか謎のハンカチで顔、体を拭きとりふうと息をついた。

「な、な、な……」

わたしが口をぱくぱくとさせているとヘクターが立ち上がる。素早い動きでアウラウネに手を伸ばすが妖精はひらりと舞い上がり、手足をばたばたさせる腹の立つ動きを見せた。そのまま着地と同時に走り去る。

「ま、待ちなさい！」

わたしとヘクターは再び風を切って走るアウラウネを追いかけて走り出した。

ぬかるむ地面に足がもつれる。跳ね返る泥が膝裏に当たり不快だ。雨は上がったようだが雫を含んだ枝に捕まる度、衣服を濡らしていた。洞窟を出た辺りで既に見失っていたアウラウネを再び視界に入れることは叶わず、わたしとヘクターは自然と同時に足を止めた。あがった息を整えた後わたしは呟く。

「いちいち癪に障る奴ね」

アウラウネの妙な動きを思い出し、わたしは眉根を寄せた。どう考えてもわざとわたし達の前に現れたとしか思えない行動。逃げ足に絶対的な自信があるのだろう。実際あの早さにはどんな足に自慢のある人であっても追いつけそうにないではないか。

「ちよつと考え直した方がいいな……。追いかけてこになったら捕まえるのは無理そうだから、不意打ち狙いじゃなきゃ駄目だね」

ヘクターの言葉にわたしも頷く。しかしあの軽快な動きの生物をひっそり捕獲するにはどうするべきか。こういう仕事こそフロ口達モロ口族が向いていそうなのに。

「とりあえず応援呼んじゃう？」

わたしはそう提案してみた。この辺りにいるのは確かなようだから、人数を増やしてみた方がいいかもしれない。

頷く仕種を見せたヘクターがわたしの頭上あたりに視線が動き、そのまま固まる。なんだ？　と思いわたしは振り返った。

「あ」

垂れ下がる枝に器用に腕を絡ませたアウラウネがわたしの頭の上で揺れている。ひよい、と素早い動きでわたしに手を伸ばすと何かを取った。そのまま口に運ぶのは……ヘクターがくれた花だった。

「ちよ、ちよつとおおお！」

怒りのあまり手が震える。その反応を楽しむかのようにわざとらしい動きで大きく口を動かし、ごくろ、花を飲み込んでしまった。げ

ぶり、という音にぶちギレるわたし。

わたしのぶつぶつ呟く声が呪文の詠唱だと気が付いたヘクターが必死に止めてきた。

「そ、それはマズイ……」

わたしはアウラウネとの間に入るヘクターに涙目で抗議する。

「止めないで！せつかく貰ったのに！」

「後でまた取ってあげるから、ね？」

子供をあやすような口調にわたしは渋々引き下がる。木の枝にぶら下がりこちらを見るアウラウネは、始めから笑ったような顔を更ににたにたとさせていた。ひよい、とヘクターが手を伸ばすと案の定、ひらりと避けて地面にぱたぱたと舞い降りる。そのまま風を巻き起こしながら走り去っていつてしまう。流石に追いかける気にならず、わたしとヘクターは顔を見合わせた。

「こつちをからかつてるんだね」

そう言うってからヘクターはふふ、と笑う。まともに相手をしているのはわたしだけってことか……。そう考えると赤面してしまった。

「捕まりたくはないみたいだけど、俺達の周りをうるちよろしてるのは間違いないな。変な奴」

ヘクターの言葉にわたしは考える。アウラウネ皆があんな性格なのか、それともアイツの性格がそうなのか。後者だとすれば人間に馴れているが故にちょっかい出してきてるのかしら。だとすれば放っておけば自分で家に帰りそうな気もする。

「うちの犬があんな行動してたのよね。家から脱走した時、捕まえようとする追いかけてこが楽しいみたいで逃げちゃって、放っておいたら自分から帰ってきたのよ」

「へえー、可愛いね」

ヘクターの暢気な返事にわたしは首を傾げる。可愛い、か？わたしは憎たらしかったけど。

そんなことを考えていると足元が揺れる感覚がした。なんだか感じたことのある感覚。近くを大きな生き物が動いているような……な

ど考えているとみしりみしりという足音が聞こえてくる。

「あいつだ」

ヘクターがわたしの手を取り素早く動く。大きな木の根元に身を寄せると静かに辺りを窺う。足音が大きくなってくることに緊張しながらもヘクターの呼吸が近い為にあわあわとする。顔が近い。やばい、顔が赤くなってきた。

「……まずいな」

ヘクターの呟きに「何が？」と聞き返しそうになったが、わたしの目にもその原因が写る。大きな体に凶悪な顔をした恐ろしい巨人族のモンスター、トロール。その前にへたり込んでいるのはアウラウネじゃないか。

「ちよつと……早く逃げなさいよっ」

わたしは必死に小声で呼び掛けるがアウラウネが動く様子はない。もしかして腰抜かしてるんじゃないわよね。

時計塔ぐらいありそうな巨体が動く。どしり、という足音にアウラウネの体がふわりと浮き上がる。その時、わたしの隣りの人物が動いた。飛ぶような勢いでトロールの元に向かうとアウラウネに伸びていた腕を斬りつける。真っ赤な鮮血が飛び散った。

おおおおお！トロールの怒りの咆哮が鼓膜を震わせ、わたしは身を竦める。痛みの為の怒りなのか周りの木を軽々とへし折っているトロールに腰を抜かしそうになったが、ヘクターが攻撃をかわし続ける動きにはつとめる。応援を呼ばなきゃ！

わたしはぱつと浮かんだ呪文をとりあえず唱え始めた。何でもいい、合図になれば。手を頭上にかざすと上空に向かって発動させる。

「ライトニングボルト！」

バチバチ！と耳障りな破裂音を響かせながら電流が空へと伸びて行く。目が眩む光と上空を覆っていた枝葉がなぎ倒される派手な音に一瞬、トロールがこちらを向くが再びヘクターの剣が走る。トロールの雄叫びが響く中、丸太のような脛を赤い線が走ったのを見た。

トロールの膨れ上がった腕が振られる度、黒く変色した爪が木の表皮を削る度にわたしは小さく悲鳴を上げる。ヘクターの剣が再びトロールの足を薙ぐ。足下を狙ってるんだ、とようやく理解した。その成果が出てきたのかトロールの動きは鈍い。始めから軽快な動き、というわけではなかったが明らかにふらつきが見られる。それでもあの腕の一撃が擦るだけで人間なら吹っ飛んでしまうだろう。ヘクターに両腕が伸びる度に心臓が跳ね上がる。

「おうおう、やってるかあ」

この場に合わない間延びした声と共に出現した相手をわたしは振り返り見た。木の間から顔を覗かせたのは随分身長差のある二人。刈り上げた金髪に逞しい腕をジャケットから覗かせる戦士と栗色の髪美しい女の子。

「デイベス！サラ！」

「ちよつと待つてな」

デイベスは軽い調子でそう言うサラに脱いだジャケットを渡した。雨で変色したそれは重そうだ。

「リジア、大丈夫だった？」

サラに尋ねられてわたしは首を振る。

「わたしは何もしてないもの。それより……」

わたしが視線を動かす先を見たのかサラがにっこり微笑む。

「ここは任せましょう」

サラの柔らかい声と被さるようにデイベスの吠えるような掛け声が響く。すでにトロールへと向かっていた彼のバトルアックスがトロールの足へ走る。骨が砕ける鈍い音とトロールの一際大きな怒りの声が森に響き渡った。あの巨人に臆せず飛び込む二人は単純にすごいと思うが、何の相談も無しに呼吸を合わせるヘクターとデイベスに普段の鍛錬が垣間見れた気がした。

もう一度デイベスのアックスがトロールの膝あたりにぶつかるたび、巨人の体が傾く。

「やれ！」

デビスの大声が響く。ヘクターが地面を蹴り、剣を走らせるのは巨人の首元。銀の一線が走った直後、ざあ！と辺りを血飛沫が舞う。ま……、う、

「あう……」

ヘクターの格好良さよりも目の前の光景のグロさにわたしはふらり、体勢を崩す。

「きゃ！ちよつとりジアー！」

サラがわたしの腕を取り、慌てて抱き起こそうとする。わたしはふらふらする頭を振りながら「面目ない……」と呟いた。そのまま尻餅つくようにへたり込むとお尻に妙な感覚がする。何かを踏みつぶしてしまったような、気持ちが悪い感触にすぐに意識を取り戻し立ち上がる。

「あ」

「げっ」

サラのぽかんとする声とわたしのだみ声が被さった。わたしの下にあった、いや「いた」という方が正しい。それは真つ赤な体のアウラウネ。わたしの体重でここまで？というほど見事にぺったんこになっているではないか。

「そ、それってもしかして……」

口をぱくぱくさせながら目を大きくするサラにわたしは引き攣り笑顔で答える。

「探してた……妖精さんよ」

わたしがひよいと持ち上げ平面の世界の人となってしまったアウラウネに溜息つくのと、こちらに戻ってくるヘクターとデビスの目が見開かれたのは同時だった。

ぱちぱちと爆ぜる木片と赤く照らされる皆の顔。魚の香ばしい匂いにもわたしの心は冴えない。

「どうすんだよ！」

予想通りの反応を見せたのはアントンだった。デイベスにおでこをぱちんと叩かれながらもこちらを指差し、目を吊り上げている。昼休憩を取った河原まで戻り、予定には無かった夕食の時間である。なぜ真つ直ぐ町へ戻らずにぐずぐずしているかというのがアントンが怒鳴る原因だ。すなわち今回の捕獲の標的をわたしがべったんに踏みつぶしたこと。それを話し合う必要が出たことだ。

「まあまあ、そんな気落ちしないでよ。わざとじゃないのはみーんな分かっているからさ」

あくまで明るいクリスピーアの慰めには大きく息を吐きながらも「ありがと」とお礼を言う。

「なあ、これいらなくなったら俺に出来ない？研究したいからさあ」ロレンツのずれた提案には睨んで答えた。そんな様子にイライラを爆発させたようにアントンが再び怒鳴る。

「だから！どうすんだよ！これ！」

「うるさいなあ！言っとくけどわたしは海より深く反省してるのよ！どうにか出来るならやってるの！喚いてもしょうがないから今考えてるの！ちよつと黙っててよ！」

わたしが怒鳴り返すとアントンの隣りにいるエルナの目が見開かれる。アントンも一瞬間食らったようだったが、更に顔を赤くして叫んだ。

「そそそそれが反省してる態度なのかー！」

「半分植物みたいなもんなんだから、栄養たっぷりの腐葉土に入れておくとかどうかしら」

喚き続けるアントンをシカトしてサラが提案してきた。確かに……

ぺったんこにはなってるけどアウラウネの様子は「ご臨終」っていう雰囲気じゃないんだよね。顔もあいかわらず笑顔だし。動いてもないし鼓動も無いけど、元気な時は心臓が動いて体温があつて、という体だったのかどうかも分からない。

「もしどうにもならなかったらアルフレートにも聞いてみようよ」ヘクターがそう言うところにりと笑う。わたしも苦笑しながら頷くが、あのエルフの手をすんなり借りれるものか……と考えていた。

城壁としての役割を担っていた時代からあるウェリスペルトの円形の外壁。その上から人々の生活を窺わせる明かりが瞬いている。ただいま、ウェリスペルトの町。さつさと帰ってお風呂に入り、汚れた服を着替えたいところだけど足取りは重い。

「学園にアドバイス貰いに行く？それとも依頼人に会いに行く方がいいか……」

デビスがうーん、と唸る。うう……申し訳ない。本当なら胸はつて依頼人に渡せば良かったものを、わたしが台無しにしちゃったんだもん。これで本当にアウラウネをどうにも出来なかったらどうすればいいんだろう。弁償？でもお金で済む問題でもないような……町の入り口来るとこの時間でも長距離バスが忙しく行き交う光景が目に入る。コルバインが走り行く道の端をとぼとぼと歩いて行くわたしに声が掛かった。

「別に森で発見した時には潰れてました、で良いんじゃない？だって実際にトロールに襲われる所だったんだろ？」

黒髪の戦士デイノがあっけらかんと言うがわたしの気持ちが軽くなるような事は無かった。のだが、

「リジア！手！」

サラがわたしを指差し叫ぶ。思わずびっくりして落としそうになった手の中に有るものを、顔の前に持ち上げて見る。あのぺったんこになったアウラウネの亡骸？である。風船に空気を入れるように薄

つぺらくなつた体がじょじょに膨らんでいくではないか。あまりのことに呆然とするわたし達が見守る中、すっかり元の大きさに戻ったアウラウネはわたしの手のひらの上にちょこんとあぐらをかくと、こきこきと肩を鳴らす仕草を見せた後「ウケケ」と笑った。

「マルガリータ！」

ひしつと抱き合うアウラウネと派手な装いのマダムを見守るわたし達。ウエリスペルトの中でもお金持ちの集まるマーセスター通り、その中の一軒のお屋敷がアウラウネ？？マルガリータちゃんの御宅であった。前庭にある大きな噴水といい薄ピンクの建物といい少々派手な邸宅である。

「ありがとう、世話になったね」

玄関前、でっぷりと太った旦那さんにお礼を言われる。抱き合う奥様とアウラウネの様子を見るに飼っていた本人で合っているようだ。デビスが簡単に挨拶を済ませ、皆でお屋敷を後にする。ちらりと振り返るとマルガリータがわたしに向かってゆらゆらと手を振り、にたにたと笑う姿があつた。……やっぱり可愛くない。

敷地から出て街灯に照らされる通りに出るとロレンツが腕を組み、皆を見渡す。

「で、なんで元に戻つたんだ？」

返事はない。誰も分からないからだ。もちろんわたしも同じこと。全員が無意味にお互いの顔を見回し、

「ま、いいじゃねえか」

リーダーデビスの一言により、今回のクエストは終わりを迎えたのである。

「飯食つて行こうぜ！」

デイノの大声にロレンツが顔をしかめる。

「さつき河原で魚、食べたじゃないか」

「あんなもんじゃ足りねえよ」

デイノの答えにデイビスも乗っかる。

「いいな、学食押し掛けてやってなかったら『白竜亭』行こうぜ」
うんうんと頷くメンバーが多い。やっぱり大食いの人が多いのね。
白竜亭とは学園の近くにある安くてイマイチな味の大衆食堂だ。わたしは眉根を寄せて提案する。

「あそこ行くならローザちゃん家行こうよ。今日行ってないからわたしも行きたいし」

「……学園長の家ってことだろ？良いのかな……」

ロレンツの不安顔にわたしは彼の背中を叩いて答える。

「優しい学園長はきつと、腹ぺこな教え子を救ってくれるわよ」

「よっしゃー」という歓声上がり、そろそろ移動が始まった。
ふと隣りを歩くヘクターが何かを考えるように暗くなった空を見上げているのが目に入る。

「どうしたの？」

尋ねるわたしを見るとゆっくり口を開いた。

「いや、やっぱりトロールがあんな所にいたっていうのは学園長にも報告しといた方がいいかな、って」

あんな所とはテオニスの森の事だ。ということはトロールというのは普通は森には現れないモンスターってことなのか。こういうことはヘクター達の方が詳しいのかもしれない。前に行くクリスピアノが振り向いた。

「でもある意味ラッキーだったよな。そのままだったら絶対、トロール討伐の依頼が別に来てたぜ。そのままだったら二度手間だったし」

「……まあ、そうだな」

クリスピアノの言葉に曖昧に頷くヘクターが気になってしまふ。が、わたしの目線に気が付くとふ、と小さく笑う。その仕草に聞きそびれてしまった。

「つか！頭燃えそう！」

わたしは古代語のテキストを前に悶絶する。今日の授業で習った範囲を一気に頭に叩き込もうとしたが土台無理だったらしい。魔法とは関係のない単純な知識としての分野だったので、興味は薄いしいつも以上に脳に入っていないのだ。

「古代人がどんな文学に興味があったなんてこっちは興味ないんだけどなあ」

わたしはぶつぶつ呟きながら教官の書き込みが残る黒板を眺めていた。すると脇から声が掛かる。

「おい、面白いこと分かったぜ」

真つ黒頭に真つ黒ローブ、半分眠そうな目でこちらを見るのはロレンツ。わたしがテキストを机に置きつつ「何が？」と尋ねると、教室の扉を指し示した。

「図書室行こうぜ。サラとも約束したから」

「……あ、こないだのアウラウネの話し？」

サラの名前が出てきた事でわたしはぴんとくる。ロレンツはにやつと笑うと頷いた。

「なんか懐かしい感じだわ！」

二期生の時に同じクラスだったわたしとロレンツと向き合い、サラは妙に嬉しそうだ。そんなサラを横目にロレンツは一冊の冊子を取り出すと図書室の広い机にぽん、と置く。

「何これ？」

『人面植物の生態、分類における考察』とある表紙にわたしは首を傾げる。中をぱらぱらと見るが小難しい内容のようだ。見慣れない単語が並ぶ様子を見るに随分専門的なレポートみたいだけど。

「教官から借りてきた。まだ研究段階のレポートみたいだけど、中々面白かったぜ。モンスターの生態を研究する学者の中でも植物系を専門にする人が書いたんだってさ」

へえーと返事するわたしとサラにレポートのページを広げて見せるロレンツ。

「マンドラゴラって分かるか？」

彼の質問にテオニスの森でヘクターとしたやり取りを思い出す。

「引っかくと悲鳴上げるやつでしょ？」

わたしが答えるとロレンツは頷く。

「そう、森に棲息して普段は地中に埋まって養分を吸ってる。でも引き抜かれると『この世のものとは思えない悲鳴』を上げて相手を失神させるモンスターだ」

「通常はその隙に逃げるだけなんだけど、大きく成長した個体は失神した相手の養分を吸ったりするみたいよ」

サラの淡々とした話しに、

「そうなんだ、こわっ！……あ、マンドラゴラって漢方に使われたりするから人間を怨んだりするのかな」

わたしがそんな返しをしているとロレンツが手で割って入ってくる。「そんなもんでいいだろ、今回はこっちの話し」

そう言っ指差すのはレポート内にある赤い人面植物の絵だ。わたし達が捕まえたマルガリータより随分凶悪な顔になっているがアウラウネのイラストらしい。下にずらずらと並ぶ難しそうな文章にわたしはロレンツの顔を見る。

「マンドラゴラとアウラウネの違いを中心に書いてる。なんで色が違うのか、とかな。これによるとアウラウネっていうのは他の生き物の『瘴気』『負の感情』を吸い取るんだ」

ロレンツの言葉にわたしとサラは顔を見合わせる。

「負の感情っていうと怒りとか悲しみとか、そういうこと？」

サラは少し訝し気だ。そんなものが栄養になるのか、というのはわたしも気になる。が、町に戻った時のことを思い出してはっとする。

「それで人間が集まる『町』に戻ったら元気になったってわけね」
わたしは口にしなから不思議な仕組みに感心していた。ロレンツは
うんうんと頷くと人差し指を立てる。

「それだけなら悪い気を吸う良いモンスターみたいに感じるけど、
もう一個、少し問題な特性がある。栄養となる負の感情を作り出す
ために周りを混乱させることが出来るらしいんだ。いたずらして怒
りの感情を湧かせるだけに留まらず、生態系をねじ曲げるような混
乱も引き起こすんでレポートには『危険生物に指定するべき』って
主張がある」

一瞬の沈黙の後、わたしはあの巨人モンスターを思い出す。

「トロールのことね」

「そう、本来岩場や荒野が住処のトロールが森にふらふら現れたの
もアイツの仕業だと考えていいだろうな。実際鉢合わせしたお前ら
にはあの破壊力が森に現れた危険性、何となく分かるだろ？」

ロレンツがにやつと笑うとサラは大きく頷いた。

「確かにあの調子で木をなぎ倒されたら溜めないわね……。他の生
き物も寄り付かなくなっちゃうし、住居構えられて集団になったら
すぐ厄介よ」

成る程、そういう混乱もマルガリータにとっては『美味しい好物』
になるわけか。わたしにちょこちよこいたずらしてきた姿を思い出
し、苦笑した。腹立ってしょうがなかったけどああいういたずらで
済ませてくれれば可愛いと言えなくもない。そこまで考えてふと思
う。

「でもそうなると町に住んだ方が幸せ、っていうか合ってるんじや
ない？だって人が大勢いる場所なら常に負の感情は漂ってるわけで」
わたしが言うのと二人も頷く。

「現に元気になっちゃったもんね。……森には遊びに行ってみたけ
ど『食べ物』が少ないんでびっくりしたのかも。もう逃げ出したり
しないんじゃない？」

サラはそう言うとうふふ、と笑った。

「にしても、今回楽しかったわー。いつもと違うメンバーで行動するのってわくわくしたし、リジアとロレンツとこうやって久々にお話出来たし」

サラの笑顔にわたしとロレンツはもじもじとする。こういうことを普通に言えるのも、その笑顔もなんだか眩しいのだ。根暗二人の居心地が少々悪くなるのも仕方が無い。

「ロレンツもたまには良いんじゃない？わたし達が旅に出てる間って勉強ばかりしてるんでしょ？」

わたしが彼の腕を突くと嫌そうに首を振った。

「俺はやっぱいいや。毎回付き合わされる度に向いてないって実感するんだよな。雨降って最悪だったし、ディノはうるさいし、疲れたし」

最後の一言にわたしが呆れているとサラが手を叩く。

「そうそう、ディノってロレンツとは幼なじみなんだって！ロレンツが研究科に進んじやうから一緒にパーティー組めなくて、がつかりしてたんだってね」

「へー、それでこういう機会には誘いがあるんだ？」

わたしは黒髪の戦士の姿を思い出し納得する。随分対照的な二人なのが面白い。

「向いてないもんはしょうがないだろ？俺は研究の分野でサポートするから、何かあれば聞きにきてくれよ」

「あら頼もしい」

ロレンツににこにことしていたサラの顔がふ、と真顔に戻る。

「ところで……ずっと気になってたんだけど」

そう言うサラは目線だけを図書室の入り口へと向けた。ロレンツも同じように何かを横目で確認する。

「あー……あれだろ？ソーサラークラスでもずっと張り付いてるぜ」

「二人とも、気にしないでいいわよ」

わたしはそう答えると大きく溜息をついた。図書室の入り口からじーっとわたし達を見る人物。ファイタークラスのエルナである。背

中に背負うソードが小さな体には重そうだ。赤み掛かった茶の髪の下から覗く大きな目がわたしをずっと見ている。何度か目線を合わせたが、あちらは視線を逸らすこともはたまた話しかけてくることも無く、ただじっと見ているだけなのが怖い。

サラとロレンツが落ち着かないようにきよろきよろと視線を動かす中、図書室の反対側の入り口が勢い良く開かれる。遠慮の無い態度で入ってくるのはひよろひよろとした長身に緑頭の目立つ風貌の男、アントン。

「おいサラ、ミーティングだよ」

そう言い放つと何故かわたしとロレンツを順に睨む。わたしはしつしと手を振った。

「はいはい、鋭い眼差しかつこいいですね」

「……ほんとに可愛くねえ女だな」

頬をぴくぴくとさせながら吐き捨てるアントンが、自分の入ってきた入り口とは反対側を見るとぎくりと固まる。

「な、なんでお前ここにいるんだよ！」

エルナを指差し怒鳴るアントンにわたしはイライラとしてきた。わたしが粘着される原因の半分がアントンだからだ。確かにファイタークラスの彼女がこんな所にいたらびつくりはするだろうけど一々うるさい。「こんな所で油売ってる暇あったら……」と続く喚きにわたしは立ち上がる。

「可愛い子からかいたいののは分かったから、早く行けば？サラを呼びに来たんでしょ？」

わたしの言葉にアントンが振り返り、何か言いたそうに口を開くがサラが「はいはい行きましょう」と廊下に連れ出した。後に残されるのはわたし、ロレンツ……とそれをじっと見るエルナ。なぜ彼女に粘着されているか、という理由だがこの前の一件で何度かわたしがアントンから庇ってやったことが原因らしい。じっと見る彼女の熱い視線からわたしは背を向ける。これがヘクターを巡る嫉妬の視線ならまだ分かるのだが、ひたすら「お熱」な空気をばんばん感

じる。大変苦しい。

「お前って変な奴に好かれるよなー」

妙に感心げに呟くロレンツをわたしは睨みつけた。あれが彼女の身の守り方であり、悪いのは執拗に絡む人間の方だ、と無理矢理思い込むことにする。しかし、これをヘクターは長期間やられてたのか

……。彼のような大らかさが無いわたしはすでに限界なんですけど。俺がお前を女として見れない理由が分かった気がするなー」

「何、遠回しに『自分はまとも』アピールしてんのよ!」

わたしは机にあるレポートでロレンツの頭を叩くと、再び大きく溜息をついた。

f i n

美しい人

涙も無く涙が溢れる。窓から身を乗り出すことで瞳が乾いたのでもなく、朝日が目に痛いわけでもない。じわじわと浸蝕する表世界の空気が私を泣かせるの。傷つけられたわけでもないのに、喉に刺さった小骨が抜けないのね。

可哀相なキーラ。

そう言っただけいいわけでもないの。言われたことは無いけれど、そんな言葉は聞き飽きたわ。

大人が「難しい年頃」と片付けてしまうような感情の大波。でも今は流されていようと思っている。この常に胸がざわついて憂鬱に満たされる感覚もあと数年で消えてしまうのだから。

「時間大丈夫なの？キーラ」

扉の向こうから聞こえてくる溜息混じりの声にわたしは立ち上がり、指で涙を拭う。振り返る時に目に入った鏡にはいつものすました自分が見えた。

「大丈夫よ、ママ。今行くから」

扉を開けるとローブを着込み、すっかり準備を整えた姿を見せてやる。鞆を掴み玄関へと向かう私に母はいくつもの言葉を投げってくる。

「今日の帰りは何時頃なの？お昼は食べてる？……勉強は追い付いていけるの？」

「大丈夫だったら。心配性なのね、ママは」

笑う私を見てほっとしたような顔になる母。早く出て行って欲しい、という空気をこまかすように彼女は毎朝、質問責めにしてくる。こうやって言葉を重ねるのは私を疎ましんでなんかいないと、自分に言い聞かせているのよ。

「行ってきます」

そう言っただけ放つ扉は母の趣味で付け替えたやけに重いものだ。朝から随分と温い空気に目を細める。

多分あと何年かしたら私は母のことなどどうでもよくなる。だから今は嫌いなままでいようと思うの。

「好きの反対は無関心よ」

私は目の前で大きな瞳をぱちぱちとさせるクラスメイトの顔を覗き込んだ。私の一言に腕を組み唸ったかと思えば口を開けて何かを言いかける。が、また首を傾げて唸る様子が見ていて面白い。

「経験ないって感じね、リジア」

私は彼女の名前を言うとき越えに腕を取る。リジアが目を細めた。嫌がっているのではなく照れているのだ。

「わたしはやっぱ『好き』の反対は『嫌い』だと思うけどなあ」
彼女の不服そうな声は可愛い。私は一つ頷くと考えを述べる。

「問題はどれだけ人の気持ち動かせるか、なのよ。大好きでも大嫌いで、相手の感情を大きく揺さぶるのは同じじゃなくて？」

「……なるほど、全く感情が動かない相手が『無関心』なわけね」
リジアの返答に私が再び頷いた時、赤い髪美しい少女が割って入ってきた。

「何なに、面白そうな話してるわね」

リジアと同じくクラスメイトのセリスだ。きつい顔の美人だが、実際の彼女は周りをよく見る気配りの出来る人だ。セリスは私達の隣りに座ると手鏡を開く。

「確かに無関心な相手が何しようと思わせちゃうもんね、浮気とかさ」
話しに入るなり言い放ったセリスの言葉にリジアが眉を寄せる。私はそれを見てくすくすと笑ってしまった。

「男女間の話じゃなくてもそうじゃない。あんまり関心のない子が相手だと、その子がどんなミス犯しても『いいわよー』で笑ってあげられない？」

「あらセリス、あなたとは話しが合いそうだわ」

私は手鏡を相手に前髪を直すセリスの水色の瞳を覗き込んだ。二人

して笑った時、上から声が振ってくる。

「たまに可愛い話題でもしてるのかと思えば、えぐい話してんな」
呆れた顔で私達三人を見下ろすのはロレンツ。このクラスの数少ない男の子であり、一番優秀な生徒だ。彼は私の顔を見ると扉方向を指差した。

「さっきそこでクリスピーアンに会った。『話がある』ってさ」

「告白の前みたいな言い方ね」

リジアがはあ、と息をつく。彼女もあの男が本気でそういう気があるわけではないと分かっているのだろう。面白がるようにそういう言葉を選ぶ性格だとも。立ち上がる私にセリスが半分からかうような声で囁いてきた。

「そんな澄ました顔して、実際本気で来られたら動揺するくせに」
それを聞いて私は思わず笑みがこぼれる。席に座る二人の顔を見ると私は言った。

「彼は絶対に私を好きだとは言わないわよ。クリスと組んだのは彼がそういう人だからなの」

ぼかん、とするクラスメイトを後ろに私は教室を出る。うなじにつく髪をかきあげると廊下の窓から入る風が気持ちよかった。

各ミーティングルームが並ぶ廊下までやって来ると見知った顔が窓に張り付いていた。

「パウロ、危ないわよ」

私が声を掛けると小さな友人はにこつと笑った。身長は私の腰までほどしかなく、耳は猫を連想させるフワフワとした獣のもの。長い尻尾が揺れる様子はいつも私の気持ちを穏やかにさせる。モロ口族という大人でも人間の子供のような外見の可愛い種族。学園に何人かいる内の一人が私のパーティーメンバーだ。パウロは彼らの中でも一番性格も子供みたいで可愛い。私は彼の頭を撫でた。

「皆いるの？」

私が扉を指差し尋ねるとパウロはいやいやをするように首を振る。
「クリスが来てないよ！あいつが集まられて言ってたのに、一番遅いんだ！」

彼の言葉に私は一瞬黙り込む。パウロの「探しに行こうか？」という申し出に首を振った。

「連れて来るわ。中で待っていて」

私が言うとかかと思うのか首を大きく傾げるが、パウロは手を振りミーンティングルームへと入っていく。私は扉が閉まる音を聞くと踵を返し、廊下を歩き出した。

屋上の扉を開け放つとじりじりとした陽が肌に迫る。私は目を細めた。屋上の熱を持った床を避けるように日陰になった端で赤い髪が揺れている。ごろりと横になり腕を頭の下で組む男に私は気配を消すこともなく近付いていった。

「早く来なさいよ」

顔を覗き込みクリスピアノに声を掛けると彼はにやつと笑った。

「キーラが呼びに来てくれるなんて嬉しいなあ、……もしかして俺の居場所分かつちゃうのってキーラだけだったり」

起き上がる様子も見せずに笑う彼に苛立ながら私は隣りに腰掛ける。
「何で分かったの？運命感じちゃうよね！こういうシチュエーション。行動パターンを読まれちゃうってやつ」

軽口を続けるクリスピアノの頭の両サイドに手を着くと私は顔を近付けて瞳を真っ直ぐ合わせた。

「もう止めにしない？そういうの」

私の声の後に一瞬訪れる静寂。夏の不快な風が二人の髪を撫でる。

「……何が？」

クリスピアノの答えに私は苛立を見せないよう、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「馬鹿馬鹿しいと思わなくて？何も生み出されないし、壊れていく

「だけよ」

「何故？」

表情を崩す事無くクリスピアノはそう答えると、私の腕を取りゆつくりと起き上がった。翡翠色の瞳がグラウンド方向に広がる空を眺める。

「さーて行こうか。流石に俺が集めといてこれ以上遅れたら立場ないし」

立ち上がり背中側の埃を叩くと私に手を伸ばす。優雅で柔らかいこの仕草が私は綺麗だと思ったし、素敵だとも思った。

「行こう」

クリスピアノの声の後に続く風。私の髪が彼の体に襲いかかるのを見て、髪を切ろうかと考えていた。

「ただいま」

重い扉を開くと自宅の甘い匂いが鼻につき、私を憂鬱にさせる。靴棚の上に朝は無かったブーケが飾られていた。

「おかえり」

そう言つて部屋から顔を出した予想済みの人物に私は微笑んだ。

「ただいま、帰っていたのね」

「来期にはキーラも今以上にこの家には帰つてこれなくなるって聞いたからね」

そう言つて赤い髪をかきあげる彼の横を通ると私は自室へと戻ろうとする。

「こら、おとうさんに挨拶したの？」

「今したよ……」

後ろから聞こえる両親の会話を受け流しつつ部屋に入った。きつちり閉ざされた自室はこの家では異質な程無臭であり、色が無い。重い靴を置くと部屋着に着替え、窓を開けた。丸い月を見ると誰か私を連れ出して、空に飛んで行けそんな気持ちになる。それは私の仲

間であり運命であり、今の生活を捨てることもしようがないのだというストーリー。でもきつとこんな妄想もあと少しではかばかしいと思うようになってしまう。きつと今だけ許される少女の特権。わけも無く不満であり、不憫な自分に酔いしれる。

笑い声が聞こえるのは居間からだろうか。隣りの家からなのだろうか。

今夜も私は可哀想な膝を抱えて眠るのだ。

f i n

花の人（前書き）

「美しい人」と対になる短いお話です。

花の人

僕等はパンドラの箱を開けてしまった！

一昨年のまだ冬の寒さの抜けない時期だっただろうか。

僕らの出会いに君はその無表情を貫く顔を歪ませる程、拒絶反応を見せて僕は微塵も持っていない信仰心を改める程神に感謝した。

「私達よっぽど運がないのね、クリスマスピアン」

君があえて『私達』という言葉を使って僕を牽制した事も分かっていたよ、キーラ。

でもね、僕は君が毎晩涙を流している事も、君が本当は絵に描いたような夢見る乙女だということも、母親を嫌っていることも呪い殺したい男が二人もいることも知っている。

それを知る僕のことを何とか視界から排除したいと思っていることもね。

それに僕は唯一君の心を激しく動かせる男だということが嬉しいんだ。それがマイナスの方向にだとしても。君の前を通り過ぎるだけで終ってしまった哀れな男共のように、顔も覚えてもらえない存在になるのはまっぴらだったからね。

僕は君が心配でもある。夢の精霊サンドマンに君が引きずり込まれるのではないかって、いつも心配しているんだ。そんな気持ちを知ったら、君は二ヶ月は僕と口を利かないだろうな。

僕は人を記号で見る癖がある。

例えば僕らのクラスのリーダーであるデビス。彼は『デビス』という名を持つ『大柄な男』という記号だ。その彼には『豪快で面倒見がよく、どんなにマヌケでヘマをやる者のことも最後まで見捨てない。しかしやる気の無い人間は容赦なく切り捨てる』という特性を持っている。だから僕は彼の前では『輪を乱さず、常に笑顔で

いるがいざという時はやる男』になるんだ。

そしてランディ。彼はデビースと同じような大柄で一見からつとした男だが、実際は努力の塊のような男であり、また同じように努力を重ねる奴の事を嫌う。同族嫌悪というのもあるかもしれないが、置いて行かれることを極端にまで怯える臆病者だ。だから彼の前では『いい加減でへらへらした男』を貫くんだ。

そんな僕にも記号として認識しない人間が二人いる。一人は言うまでもなく君なのだけだ。

「お前、そういう風に人を見るのやめろ」

前振りも無くいきなり言われた言葉に僕は咄嗟に返すのを忘れた。だって今の今まで『隣のクラスの教官』と『盗賊クラスの美人教官』の話をしていたんだ。会話の流れからして学び舎の導き手をいやらしい目で見るのはやめろ、と言っているのかと思うかい？ いや、彼の言いたいことはそんなくだらない事じゃない。彼には僕の悪癖が分かっていたんだらうね。そしてその事を僕も一瞬にして分かってしまったんだ。

「なぜそう思う？」

この質問はこの時も、そしてその数ヶ月後にももう一度したことがある。二度とも銀髪の戦士、ヘクターは曖昧に笑って、

「何となく、そう思ったただけだ」

そう答えるだけだった。彼はいつもそうなんだ。計算高く生きる事をしない。そして本当に『何となく』で動いているだけなんだ。

君にも僕にとつての彼のような人間が現れますように、と言ったら君は、

「ヘクター・ブラックモア？ 冗談でしょう？」

そう言って笑ったね。君の中では『女の子にもてはやされる優男』というイメージになっていたとは。少し残念だよ。なぜなら君が彼を拒否する理由はそのイメージのせいじゃないからだ。

「ヘクターは君と正反対過ぎる。そして正反対の人間に魅力を感じ

て惹かれる程、君には余裕が無い」

珍しく真顔で言った僕を君は睨んだ後、薄ら笑った。その時初めて男共が君を放っておかないのかが分かったんだ。

君が美しいのはその花のような美貌を持つ顔のせいでも、輝くような金の髪の毛のせいでもない。囁くように絡み付く声のせいでも、陶器のような肌をした長い足のせいでもないんだ。君の目が、深い闇の中にいるように光を探すその目が男共を不安にさせるんだ。だからみんな君を放っておけない。もし君が、今とは似ても似つかない顔で、胸も半分程になったとしても、君の瞳が変わらない限りは同じだと断言してみせるよ。

暗くなった町、僕は静かな家に帰る。小さいけど隣りの老夫婦は親切だし、家の大きさの割りに立派な暖炉があるから気に入ってるんだ。学園までは少し遠い住宅地だけど、贅沢は言えないね。

明かりを着けながら廊下を歩き、自室に帰る。疲れた筋肉に鞭打って着替えを済ませ、顔を洗う為にまた廊下に出る。

さっぱりした後、ようやく帰宅の挨拶をする為に奥の部屋に足を踏み入れた。

「ただいま、母さん」

真つ暗な部屋の中央には眠り続ける僕の母がいる。月明かりに照らされる顔は僕の母親とは思えない程に若い。

サンドマンが僕の母を掴んで離さない。彼がいなくなる限り、母は目を覚まさない。

サンドマンは母が呼んだ。母は弱かったんだ。現実を受け入れられず、心が狂ってしまいそうになって彼を呼んでしまった。眠り続ける母を見て、今日も彼はここにいることを認識する。

僕は君が心配なんだ、キーラ。夢の精霊サンドマンが君を連れて行ってしまうのではないかって。その見張りの為に僕は君と一緒にいることを選んだ。それが君にどうか伝わりませんように。

丘に立つて(前書き)

SS
デイビス編。

丘に立って

僕は抱きしめて欲しいと言った。女は殺してくれと叫んだ。

母は宜しくねとはにからだ。俺はぼんやりと部屋の隅のくずかごを見ていた。

俺の母親は酷い偏頭痛持ちだった。月の半分はふさぎ込み、いつも憂鬱そうだった。

今考えるとあれはただの偏頭痛なんかじゃない。何しろ尋常じゃない様子で痛みのために暴れる。失神することも度々あった。医者にも原因が分からない、と匙を投げられ、親父は家に戻らないことが増えていった。

何も出来ない程子供ではなく、家を投げ出す程大人ではない年齢になつていた俺は、気が狂ったかのように暴れる母を見て、ひたすら震える弟達を抱きしめるだけだった。

十二になった年、母親が死んだ。近所のおばさんが家に飛び込んで来て言つたのは、

『リズが……ルナンの丘で足を滑らせて。……うちのじいさんが見つけた時にはもう息をしてなかったの』

彼女の顔は気の毒な程に青かったが、言葉は冷静に淡々と発していた。ルナンの丘には急な崖があった。ルナンの丘は見晴らしが良かった。ルナンの丘には用があつて行くようなものは何も無かった。そういうことだ。

葬式の日、泣きじゃくる弟達を慰めながら、俺は一筋の涙も流さなかった。誰もそれを咎める人もいなかった。親父は母が埋められる

時に鳴らす鐘を、自分が鳴らす番の時に一度泣いた。泣かなかったのは俺だけになった。

その二カ月後のことだった。

「デイベス」

親父の声で台所から振り返ると、玄關の扉の前に親父と女が立っていた。

「彼女と、結婚しようと思うんだ」

そう言う親父の隣りにいるのは、どう見ても親父とは二十は違いそうな若い女。聞けばその時二十歳になったばかりだったそうだ。親父はその時四十五。俺は親父に呆れると共にその女のことを「馬鹿に違いない」と気の毒に思った。

「宜しくね」

恥ずかしそうに笑みを浮かべながら手を差し出す女――キミーの手を握りながら、俺は居間のくずかごが一杯になっていることばかりを気にしてしまっていた。

年の離れた弟達がキミーに懐くのは早かった。料理がお世辞にも上手いとは言えない彼女だったが、弟達が彼女の作ったパンケーキが美味しいと一度でも言えば、毎日作ってやっていた。眠れないとぐずれば一緒に添い寝してやり、親父に叩かれて慌てて起き上がる所を何度も見た。籠作りを見たことがないと言えば、村のばあさんのところまで連れて行ってやり、自分も練習して帰ってきた。

この頃の俺といえば、正直何をしていたのか一切覚えていない。ぼんやりとキミーと弟達を眺めるだけの生活だったのかもしれない。急にすることが無くなってしまった事での虚無感もあったのかもしれない。

それ程までにキミーは『母』であり、親父の『妻』としての顔は初

日に会った時だけだったような気がする。

親父が家に帰らなくなった。キミーが家に来て一年。親父の女癖の悪さは健康な妻に恵まれなかった不幸からではなく、生まれつきのものだったのだ。

ある日、村の入り口で親父が女と一緒にの所を見た。金髪の顔がうるさい女だった。キミーは赤茶髪、俺の母親は金髪だった。

俺は何故か声が掛けられなかった。声を掛けて、殴り返されようが一発痛めつけることは出来たはずなのに。

その日の夜、親父とキミーが喧嘩をする声が寝室まで聞こえてきた。喧嘩、といったが正確には親父の怒鳴り声とキミーの淡々とした声が聞こえるだけだった。キミーは馬鹿な女なんかじゃなかった。俺は隣りで眠る弟達が起きやしないか、そればかり考えていた。

次の日の朝、起きて居間に向かうと二人はまだ話し合いを続けていた。部屋に戻ろうとした俺に親父が戻らなくていい、と言い放った。振り返って見た親父の顔は、ふてくされたような酷い顔だった。

「俺達、別れようと思う」

俺はそれに対して黙って頷いた。

「子供達は連れて行きます。もう、私の子供です」

キミーのこの言葉で俺の視界が初めてモノクロからカラーに変わった気がした。それ程、動揺していた。弟達と離れることになるのか、と思った俺は急激に自分の立場や人生を考え始めていた。

「三人共に、私の故郷に連れて行きます」

三人、と言った。弟達は二人。俺も含まれていた事に、ほっとするよりも「やっぱりこの女は馬鹿だった」と思った。

「勝手にしろ」

親父はそう言ってせせら笑っていた。息子への執着が無いというよ

り、すぐに諦めて戻ってくる、という嘲笑が窺えた。

ウェリスペルトに越して一年が経った。俺はこの町の冒険者育成学校に通っていた。傭兵になろうと思ったからだ。俺は同年代の奴らと比べても体も大きかったし、力も強かった。傭兵になれば金を稼ぐのも手っ取り早い。冒険家を目指して旅から旅の生活になるのもいい。

元いた村では考えられなかったことだった。親父は何故か俺に、しつこい程「弟の世話以外、何もなくていい」と言っていたからだ。今思うと、俺の親父は俺の体が大きくなることを、異常なまでに恐れていた。

傭兵になりたい旨、学校へ通うことをキミーに伝えたと、

「そう、頑張つてね。でも、私に遠慮しちゃ駄目よ？君達を育て上げるくらい稼ぎはあるんだから」

と笑った。嘘じゃなかった。キミーの実家は資産家で、ウェリスペルトのような都会に大きな家があり、キミーは実家の事業を手伝うようになっていた。

親父から毎月、かなりの額の送金もあった。罪悪感からなのかもしれない。キミーがその全てを俺に渡してくるので、俺は学費と弟達の貯金にすることにした。すぐ下の弟が学問に興味を持ち始めたから、きつとこれから金が掛かる。そう思ったからだ。

キミーといえば、

「どんどん手が掛からなくなっていくのね。寂しいわ」とよく呟くようになっていた。

一番下の弟を抱っこするキミーと買い物に行き、その帰り道だった。「こうして並んでると、本当の親子に見えるといいねえ」

俺は苦笑するしかなかった。

俺とキミーは八つしか年が変わらなかった。実際、ウェリスペルトに越してすぐは好奇心剥き出しの視線に晒された。子供を追いかける生活のせいかキミーは少し老けていたが、俺も年の割りに体がでかかったので、どう見ても姉弟か何かにしか見えなかっただろう。「学校、楽しそうね」

キミーが言うのなら、俺は楽しそうだったんだろう。キミーはやりたい事が無かったのだろうか。学生時代は何を学んでいたのだろう。俺や弟のように、これをもって生きていこう、というものがあつたんじゃないだろうか。

そう考えている内に分かってしまったんだ。彼女は、本当に親父の事が好きだったんだ。今こうして俺達と一緒にいる。それこそがキミーの親父への愛の証だったのだ。

俺は学園の五期生になっていた。今年からは町を出る機会が増える。家を空ける晩も増えるだろう。それを伝えるとキミーは「寂しくなるわ」と眉を下げた。

「今までもそうだったんだから今更だけど、弟達を任せきりにしてごめん」

俺はそう呟きながら、訓練で固くなった自分の手のひらを眺めていた。

「卒業して、本当に旅の生活になってしまっても、なるべく帰ってきてね？ハリー達には君が必要なんだし、私も寂しいわ」

「……それは約束出来ない」

俺の答えに目を見開くキミーの「どうして？」という問いに、俺はひたすら「出来ないんだ」と答えた。母が死んでから初めて涙が頬を伝った。俯く俺の頭をキミーが撫でた。

「デイベス、君の気持ちは知ってたよ」

俺も、知られていることを知っていた。だからこそ、俺を連れて行くと言ったキミーに驚いたんだ。

「でもね、それでも君をこの町に連れて来たかったの。ううん、一番君を連れ出さなきゃいけないと思ってた。君が……一番壊れていたら」
涙で喉の奥が痛んでしうがなかった。それでも俺はキミーに「ありがとう」と何度も伝えた。

俺の家はウェリスペルトの北東にある。三日ぶりに家に帰った時に、キミーがよく言う「寂しい」という言葉の意味が理解出来た気がした。

元気盛りの男の子二人がいる家は通りからも分かるほどに騒がしい。でも、そこは母の愛で詰まっているんだ。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296q/>

タダシイ冒険の仕方 短編

2011年9月30日08時02分発行